

マルバスは咳一咳して、餘り美しく生れるのも一つの不幸だよと云ふ。これは序幕であるが、四幕目になると奴隷に向つて、實を云へば、まだお前には話さなんだが、俺は美神ウエニスの孫だよと云ひ、また、大富限で金銀をエトナ山程持つてゐると云ひ、殊に俺はユピテルより唯一たつたいちにち日後ちかぢれて生れた計りに、天國の支配が出来なんだ。」と云ふに至つては、全く誇大妄想狂と云ふ外は無。

このブラマルバスはまた女に脆く、その爲に、この劇では大失態を演じて、しまひには怪しげな女に籠絡せられ、うか／＼とその女の家へ入つて行くと、意外にも其亭主だと稱する男がゐて、大勢の奴隷と一緒に彼を打擲し、半殺しの眼に逢はせられる。彼は大聲を擧げて泣きながら、命許りはと云ふ。この實力と口先との矛盾、撞着にかういふ性格の可笑味があるので、大名の中にもこの種の虚喝家があることは前にも述べてゐいたが、なほ獨逸の復活劇に於てもかの羅馬の知州ピラーツス及其部下の兵士等がこの種の滑稽を演じてゐる。ピラーツスは威風堂々と舞臺に現はれて、部下の兵士共に命じて基督の墳墓を見張らせる。基督が復活するといふ噂が高いからである。強さうな名の兵士共は一人、一人慎で命を奉ずる由

を高らかに述べて、それから一同嘲りの歌を合唱しつゝ、聖墓の方へ行く、

俺等は墓に行かねばならぬ！

イエーズスが蘇生るとよ！

それが定なら、眞實なら、

俺等の髪は金色である。

彼等は聖墓の前で色々の娛樂をやつて、揚句の果には義務を懈り、横になつて、高軒で寝込んでしまふ。その中に天使が基督を喚び、覺し兵士共を一種の半睡状態に陥れる。丁度催眠術に罹つたやうに、彼等は身動きも出来ないが、しかも眼前に起る事件が幾分見えるといふやうな有様である。後にグリフニス(Gryphus)といふ戯曲家も、ホルリビリクリブリファクタ(Horribilicriphax)といふ劇の中で、かういふ法螺吹軍人を嘲つてゐる。

附録

癡固、逆行から生れる笑の一例としてこの一篇を掲げる。

天邪鬼

辨さんは最早五年越妻君の候補者を探してゐるが、土地の美しい娘の中から一人を抜くとすると色々眼移りがして、つひ考へ過ごしたり、まあ待てと思案最中に不意と他の男が出て来て辨さんの鼻面を擦つて折角の玉を強奪つて行くことなどが毎度あつた。一體女といふものは男の心臓も欲しいが、手の方が一層所望なのだ。それに辨さんは男振は満更で無いが、餘り性根の据わらない男で、妙に捻くれた處がある。俗に云ふ天邪鬼といふ奴で、何かあると屹度人に相談して置いて、斯うしろと勧められると却てその逆を行るといつた性質である。

或日のこと、柳屋といふ料亭の別室に陣取つて、  
「おん、やつと一人目つけ出したが如何なものだらう。ずいぶんくつて、滅法綺麗

「。一寸見せたいよ。君の前だが、すつかり

思ふんだが——どうが

亭主は不愛想に

「お前さんが惚れ込んでゐるなら何も云ふことあ無いぢやないか。」

「も少し考へてみやうかと思ふんだが」

「そりや私にしても考へては見るさ、その話のやうなのだ」と尙更のことだ。」

「ぢや君は、この話は見合はした方が可と云ふんだね？」

「いや辨さん、こゝは他人の出る幕ぢや無い。お前さんの胸一つにあることだ。

たゞ私はかう思ふんだ、貰ふのは直ぐだが、連れ添ふ間は永い。それに縹緞々々と

云ふが女が美しい中は兎角亭主一人を守り切れないものだし、美しくなくなると

今度はお前さんの方で厭氣がさすかも知れない、とまあ云つた譯さ。」

「アム奴さん妬いてるな、彼奴に云はせると俺は美しい女房を持つちや悪いと云ふ譯なんだ、から辨さんは肚の中で思つた。」

そして若い指物師の友達のところへ行つた。至つて伶俐な男で、これもまだ獨

身で、肥つた義母と一緒に暮らしてゐる。

「おい房さんと聲を懸けて」

「さあ急いで舞踏靴を造つたり、花婿様は即ちかく申す拙者だよ。どうも素敵な代物にひつかゝつた、あの標緻好しのお寅つ子さ。今度こそ本氣になる積りだが、どうだ君の考は但、止めつこなしだよ。」

「また止めるわけも無いぢやないか。あの女がお前の眼について、お前の氣に入ればそれでいいんだ。あとの事はどうにもならうぢやないか。」

「そこで、あの標緻に少しばかり財産があつて呉れると申分は無いんだが。」

「財産だつて？ そんなものがありや、お前、一生亭主の頭の上りつこなしだよ。お前は嬢の金の番をしながら、喰ふ物は矢張自分の腕で稼がなくつちやならない。それでゐて、何かありや、屹度嬢は持参々々を鼻にかけやうつてもんだ。」

「優しい女だといふんだが。」

「へん亭主の望なら、どんな女だつて優しくすらあ。つまり面の悪い奴が腹も悪いんだ。辨さん、こゝは一つ本氣でやつつけねえ。」

此奴又何と思つてゐやがるんだらう。足許から鳥の立つやうに急ぎたて、何でも俺に女房を持たせやうとしやがる。そりや彼奴の様に口で云ふのは何でも無いが、俺の方は一生の話なんだ。晩く娶つて後悔した例は無い。まあ、まあ、少し待つとせう。

それから半歳経つて辨さんはまた柳屋へ来て、亭主の袖を引張つた。少し話した事があると云ふのだ。

「真面目な話なら聞いても可いが。」

「大真面目さ。實はまた一人あるんだ——今度は金持でね。」

「へえ、それは耳寄な話だ。」

「けれども餘り若くないんだよ。まあ年増盛りといふかね。四十を越した女だ。」

亭主は何と思つたか口笛を一つ吹いて、

「ちや、お前さんの母親にしても可い位だ。」

「さうで無いんだよ。立派な家持でね、身體も丈夫だし、元氣もある。僕が會計の方をやつてさへゆけば、まあ何不足無い身分になれるのだ。」

「その女がいつまでもお前さんに實を盡すだらうか。」

「そりや當り前さ。」

「そこで、お前さんの方でもかへ？」

「僕の方でも？何故さ、解つてるぢやないか。」

「一體いつ頃まで？」

「馬鹿な事を訊く男ぢやないか！」

「オイ、オイ、悪い事は云はないから、いつそずつと年寄を貰つたらどうだ。八十位の婆さんなら早く死ぬだけまだ始末が可い。四十女ぢや、お前さんの若い盛りが濟んでもまだ生きてゐるからね。何のことあねえ、朽れかゝつた庭の門へ鎖で括られた犬のやうなものだ。辨さん、頼むから、馬鹿な真似をして呉んなさるな。」

「さういふ君が年寄を女房にしてゐるぢやないか。」

「だからこそ、實地に當つて来たところを話すんだ。醜婦でも、炊婢でも、稼業上りの女でもいいが、婆さん丈はいけない。」

辨さんは腹を立て、そこを立ち去つた。——彼奴等が「悪い」と云ふから、俺は「可い」

と云ふのだ。どれ、話のわかる奴を探してみやう。——そこで、指物師のところへ出かけていつた。

「おい同胞、驚いちやいけないぜ、かう見えてもこの拙者は土地の分限になつたやうなものだ！あの高を貰ふつもりさ。」

指物師は莞爾して、

「何だつて？どうも油断のならない男だね！ぢやお前が愈々あの甘さうな鳥を射落すわけなんだね。いやどうも御芽出度！」

「まだ婆さんといふ程ではなしね。」

「さうとも、四十ぢやまだ年寄の部に入りはしない。そして那樣に達者なもの。」

「けれども僕では若過ぎはしないかしらん。」

「そりやお前が悪いんぢや無い。何もお前妬くにはあたらないやね。妬くつて奴は全く見つともよく無いものだよ。お高さんなら大丈夫金の脇差だ。さういふのは又極く夫婦仲の好いものでね。それに、お前、喰べる心配が無い、今日の苦勞が無いといふのが第一だよ。」

「全くさうだ」と辨さんは少し煮え切らない返事をして、だが後の事もあるからね、子供の事も……」

「一人は出来たらあね、それで澤山だ。お前、餓鬼つて奴あ蒼蠅いもんだぜ、そりや！ 好い加減の苦勞ぢや無いよ、ほんとに！ 私ならまああのお高さんの様なのを貰ふね。」

「ぢや貰ふさ！」

「貰へつてお前、知つての通り、私は義理の母親で我慢してゐるんだ。極く性質の好い、まめな女でね、すつかり賄の方を引き受けて呉れるから、かうして呑気にやつていけるんだ。」

「ふ、それで何故又僕には無理に女房を押し付けやうとするんだらう？」

「押し付ける？ そんな譯ぢや無いよ。けれども私は安心して勧められるね。お前は今迷つてゐるが、結局矢張女房を持つよ。お前は獨身ぢやゐられませぬ。そりやお前は元來家を持てる性ぢや無いかも知れない。けれども一旦女房を持たうと思ひ込んでるから、さうなるまでは逆も落着かれないんだ。」

「そこで？」

「そこでもう考へるがものは無いさ。」

「してみると、無理往生に押し付けられるんだね。」

「辨さん、お前はどうも思ひ切りが悪い男だね。風に吹かれる嫩芽のやうに始終考がフラついてゐる。だから無理の棒縛といふ奴にでもしなないと伸立てないよ。」

「房さん、君は出鱈目を云つてるね。見損つちや困るぜ。どうするかまあ見てゐ給へ。誰が女房なんか貰ふものか！」

その後一年経つた。標緻好しのお寅の子は立派な山林官に嫁ぎ、金持のお高さんは身代の好い材木問屋へ貰はれたが、辨さんはまだ獨身でゐた。

ある日のこと、辨さんはまた柳屋で一杯やつたが、馬鹿に酒が滅入つた。飲む林檎酒が胃の腑へ入らずに皆心臓の方へ行くやうだつた。何故と云ふに、飲む度に心臓が膨れて充満になり、そして重くなつて來た。しまひには餘りこの世が味氣ないと云つて嘔り泣を初めた。

「お前さん、齒でも痛むんぢやないかと亭主が尋ねた。」

「構はないでくれ、もう僕は行くよ。君達は皆僕の心を知らないんだ。——僕あ淋しくつて仕様が有りやしない。どれ、も一度指物屋の内儀と話をして來やうか。」

「また嫁さんでも目つけたんぢやないか。」

「あ、目つけたよ。何も僕は隠しはしない。どうせ君はまた色々な事を云つて止めるだらうがね。」

「止める？私が止める？飛んでも無い！私はいつでも女房を貰へ、貰へつて勧めてゐるぢやないか。たゞお前さんに似合ふのにしろと云ふんだ。お前さんは私に二度も相談をかけたが、私の勧めた通りにして、別に後悔はしなかつたらうと思つてゐるのさ。」

「君の勧めた通りにした？夢にも知らねえこつた。あの二人の女を止めたのは外に理由があつてのことだ。」

「ぢや、三度目正直で、今度は極まつたかね。さぞ美しいんだらうね。」

「美しくないね。」

「とにかく若いんだらう？」

「若くないね。」

「金持なんだらうね。」

「金持でないね。」

「ぢや不器量で、年寄で、素寒貧か。辨さん、心配しなさんな、今度は止めやしないそれには及ぶまいからね。」

「ところが、その女を僕は貰ふ積りなんだ。」

「お芽出度！」

「たんと冷嘲すが可い、屹度その女を貰つてみせる！」

「眞赤になつてそこを飛び出して——もう一人の友達の指物師のところへ行つた。」

「また目つかつたかい。」房さんが云つた。

「人の好い、控へ目の、年を喰つた女で、貧乏だが世帯持ちが宜つて、實直なんだ。」

「夫だ、さういふのが誂へ向きなんだ。」

「寡婦で、子供が無いんだ。」

「伶俐な、慾張らない男には極く恰好の相手だね。今度は一つ本氣になり給へ。」  
「だがね——」

「この土地の者かい？」

「さうとも、君の善く識つてる女だよ。それで、息子の方が二つ三つ父親より年上だなんていふのは何でも無いこつたからね。」

「え、そりや何のこつたい？」

「もう宜い、何にも言はないで呉れ。もう話が纏まつてゐるんだ。あの人は本眞にまだ君に何とも云はなかつたのかい？」

「誰が？」

「君の義母さんさ。」

指物師は驚いて後へ退つた。——俺の義母を貰はうと云ふのか。近い中に隠居して、俺に臍縁金を渡す約束になつてゐる義母を？」

「ふい同胞！」と房さんは重々しい調子で、片手を辨さんの肩にかけながら、かう云つた。

「そりや好く無い考だらうぜ。お前が私の家の者になるのは本眞に嬉しいんだがね、友達甲斐にお前に云つて置かなくちやならない事があるんだ。私の義母だがね、あれは逆もお前に似合はないよ。第一に、何と云つたつて齡だから、随分汚くなつてゐる。ねえ、お前が彼女を女房でございつて引き合はせたら、世間の人は本眞に驚くぜ。お前の女房の汚いのが界限の評判になつたら、お前だつて好い氣持はしまい？」

「世間の奴等の係はつた事かい！」

「お前お前には係はるさ。だから困るんだ。それから、彼女が大變人が好いなんて思つてると間違だよ。私の方がよく識つてるからね。」

「そりや義理の親となりや違ふさ。」

「いや恐らく世の中に見得坊で、喋舌で、吝嗇で汚くつて、氣六かしやの、口喧ましい婆さんてつたら、まあ宅の義母だらうね。」

「君は大袈裟に云ふんだ。もし其様なら、如何して君の亡くなつたお父つあんが

「そりやお前二十年も前の話さ。それにあれが我慢の出来るやうな女なら、父親もまだ生きてゐる筈なんだからね。」

「フシ、今度は皆してけちを付ける」と辨さんは呟いた。「俺には女房を持たせないといふんだな。よし、俺が女房を持つのに誰が邪魔を入れられるか見てえもんだ。」指物屋の房さん、これはお前さんどうも拙かつた。今迄辨さんが貰はふといふ女を誰かが賤すと、先生却て躍起になつたものだ。して辨さんが二の足を踏んだ理由は毎時房さん、お前さんが賛成したからなんだよ。そこん所へ御氣が附かないとはお前さんにも似合はない事だ。何故、辨さんに抱き着いて、かう云はなかつたんだ。

「辨さん、出来した、大賛成だ、どうか私の父親になつてくれ！ 宅の義母は世界で一等美しい、一等可愛らしい女だ。水々と熱れ切つた、美しい顔をしてお前を迎へるだらう！ それに御化粧の秘法を心得てゐて、談話上手で、儉約で、一寸ひら氣で人を焦らすやうな處に面白味があつて、態と怒つたり、拗たりして見せるのが堪らなく可愛い。亡くなつた父親はあの義母と一緒にゐてどんなに幸福だつたらう、惜し

いことに短い間だつたが。どうぞ亡父の後継者になつて呉れ。私はもう心底からお祝ひ申すよ。」

辨さんのやうな仁にはかう云ふ調子で結婚を諫止るものだ。指物屋の叔父さん話せないな、お前さんは糊加減を心得てゐない。お前さんが接合けやうと思ふものは離れ、離さにやならんものは膠着くんだ。

かうなつちや仕方がない、さあ裁縫師のところへ馳けつけて、大急ぎで婚禮の上衣を作らせたり。お前さんの義母はお前さんに父親を一人貰つて下さるんだよ。して、一年も経つと——鶴信があるかも知れない！——

婚禮があつてからもう一年以上も経つた。夫婦は仲好く暮らしてゐる。家附の息子も相應の取扱ひを受けてゐる。店の方も任されてゐるのだ。鶴は来たが、下女部屋の破風に止まつた。そして誰か、辨さんに、どうです世帯の味は？ と訊くと、「御親切に有難うよ」と返事をする。そこで、さぞお楽しみでせうなと切り込むと、「オイオイ、君達に何が分かるものか。こんな悲惨なものはないよ」と云ふ。若しまた誰か、密と辨さんに、どうも君が可哀想でならない、指物師の後家なんて、飛んだ



者に引つかつたね！」と嘯くと、辨さんは大きな聲をして「引つかつた？馬鹿なことを、大笑ひだ！私にはもう大満足で、この上の望みはありやしない。」それから——これは少々無作法だが丸切虚偽では無い——諸君が辨さんに、君の内儀は氣六ヶ敷やの敷くちや婆さんだ、と云ふと當人は、俺の女房は極く若くつて、いまは子供の——ダースも産むに相違ないと云ふのだ。

世間にはこんな變物もある。

(Peter Rosegger)

## 第二編

### 第一章 個性的滑稽人物

第一編に於ては主として外面的、肉體的の缺點から生ずる滑稽、及職業や階級に附随する特質から出づるものを中心として取扱つたが、この編では進んで個性上の異常缺點から生ずる滑稽を観察し、更に人生觀上より見たる笑に説き及ぼさうと思ふ。

ベルグソンの云ふ様に滑稽そのもの、性質上滑稽的人物は悲劇的人物のやうに固有名詞で呼ばれずに普通名詞例へば「吝嗇漢」、「嫉妬者」といふやうに呼ばれる程類型的傾向を有つてゐるのであるから、第一編に於て取扱つた諸性格とは畢竟程度の差違があるのに止まるのではあるが、しかも第一編に於ける滑稽的缺陷が多くは著しく外面的のものであるのに對して、これは餘程内面的、特殊的になつてゐると云ふことが出来る。そしてまた或意味に於ては兩編の別は分類的标准の

差であるとも云へるのである。

そこで先づ私は類型的、外面的の滑稽人物と個性的のそれとの區別を明かにするために「奴隸」の例を取つてみやうと思ふ。前編に述べたところに依ると、「奴隸」と云へば一樣に「狡猾」、「奸智」そのものゝやうな觀を呈し、一人の「奴隸」を見れば他は推して之を知ることが出来るやうなものであるが、これでは奴隸に共通のある特質を抽出し、若くは誇張して見せたものに過ぎず、到底肉あり血ある人物とは受け取り難いのである。即、作者が諷刺や機智を弄するための傀儡に過ぎないやうに感ぜられる。羅馬劇の奴隸と云へば腹の中からの狡猾者で、生れ落ちると直ぐ阿母を騙しさうに思はれる。然るに茲にまた大體に於て所謂「奴隸」の特性を持ちながら、しかも一個の「人間」として立派に生きてゐる人物がある。それは第一編に擧げて置いた、グロムバムツェルの喜劇、偽る者は禍なり」の主人公レオン(Leon)である。この男は自分の主人公なる僧正の甥が人質にされてゐるのを救ひ出さうがために敵方の伯爵に身を賣るのであるが、出發に臨んで、敬虔な主人公から、如何なる場合にも決して虚言を吐くな、虚偽を用ひて成功したら主従の縁を切るぞ、偽

る者は禍なり」(Wah dem, der lügt!)と嚴かに言ひ渡す。この言葉が耳底に残つてゐるので、一寸虚言を吐けば成功しさうな場合にも、どうも夫を爲かねてゐる。然し始めの中は口でこそ虚言は云はないが、所謂「偽らざる偽り」の舉動で相手を籠絡してゐたのであるが、後になつて彼は純粹な眞實、一點疾しい處の無い、公明正大な態度こそ救済に達する唯一の道であるといふことを悟つて、最早虚言を吐かうとはしない。今迄は主人の呪ひの言葉が恐ろしくて虚言が吐けなかつたのであるが、今度は衷心から虚言を吐かうと欲しなくなつたのである。この男は決してかの機智の油の續く限り詭計、詐謀を製造する機械ではない。立派に生きた人間である。生きてゐる限り、その性格は變化し、發達し、漸次に造り上げられるのである。生きた人間であるから、彼はまた「愛情」に對しても無感覺では無い。彼は美しい少女エドリタを心窃かに慕つてゐるのであるが、それとは色に出さずに、極めて快活な風を装つて、自分と彼女の助力とでやう／＼救ひ出した愚鈍なアタルスを扶けて主人の許へ旅立つのである。唯、夜になつて二人が寐靜まつた時、わづかに彼は胸中悶々の情を遣るのである。眞逆に彼女がこの愚昧な主人の甥を愛してゐや

うとも思はれないが、然し戀は神秘である。萬一愛してゐたらどうであらう？

太陽はまだ遠く出て出でず、夜は暗し、

萬象の暗きが如く暗きは吾が心なり。

かしこに幼兒の如く、彼等は眠る、

されど吾は母の如く思ひ煩へり。

.....

夜睡れるとき始めて彼女の頭は

わが胸の上に沈む。

やゝ強き呼吸は太息の如く響く。

その頭の温かき、その息の甘美さ。

されど候忽疑念は氷の如く吾が體に沁み徹れり。

「恐らくは彼の事を思ふならん」.....

我はつと立ちて彼女に他の枕を與へ、

出でて夜と語りぬ.....

この獨白は一の幽婉たる詩である。そして後に、愈々主人の許に甥を送り届けたとき、彼女が自分の保護者としてその愚鈍な甥に手を與へやうとするのを見ると、流石の彼も堪へがたくなつて主人の僧正に永の暇を乞ふ。旅行が習慣になつ

たからだと云ひ、また王の軍隊に加はりたいたからだと云ふ。然しレオンとエドワタとの相思の情を看破した僧正は「偽る者は禍なり」と最後の警告を與へ、茲に二人は真情を吐露して芽出度局を結ぶのである。

レオンの戀愛は肉慾的のものでは無く、頗る抒情的な、ロマンチックのものである。羅馬劇の奴隸には到底かういふ戀愛を持ち得る餘裕は無い。詭計と機智との體現なる彼等には全然情味が缺けてゐるのである。

因に、このレオンは、最初は餘程滑稽的分子が勝つてゐて、如何にも快活な喜劇的人物に出来上つてゐるが、後になつて戀を知るやうになると、漸次感傷的の分子が加はつてゆく。滑稽的人物に情味を有たせやうとする場合、即有情滑稽的人物を描かうとする場合に動もすると感傷的の病に陥る虞がある。レッシングの名篇「ミンナフオン・バルンヘルム」ですらこの點で多少の非難を免かれない。グッセルバールツェルのは然し詩人の本性に在る多分の抒情的分子の發露と見る可きであらう。「ミンナ」と云へば、この劇に出て来るヴェルネルとか、ユストとか云ふ獨逸近世の兵士も矢張レオンの系統を引いてゐて、粗野、大膽、剛直といふやうな屬性を具へ

た滑稽的人物になつてゐる。但レオンのやうに微妙な狡智は缺けてゐる。是が「奴隸」や「ハンズゲルスト」の型と異なる點である。この點では寧ろ、フライタハの名曲「新聞記者」(Die Journalisten)の中に出て来るボルツといふ人物がハンズゲルスト若くばハルレキンの後裔と稱せらるべきであらう。この人物は實際冠者の性質の多分を備へた所謂「惡戯者」であるが、唯レオンよりも一層リファインした、高尚な種類の道化役者なのである。それもその筈、レオンは厨僕であり、ボルツはドクトルの學位を有つてゐる。兎も角、このボルツといふ人物は近世喜劇的人物の白眉と云つて可いのである。而して沙翁の描いたフォルスタフに至つては冠者型の滑稽的性格として天下一品の觀がある。

さて、右の例で「類型的」と「個性的」との區別は略明らかになつたこと、思ふ、勿論第一編に擧げた例の中にも充分個性を具へた者も多少あるのであるが、さういふ者も職業、階級等に附隨する滑稽といふ方面から見て論述したのである。之に反してこの編では専らさういふ意味の類型を離れて、個性の方面から觀察しやうといふのである。そして又一方には前編に於て心理的敘述を主として來たのに對し

この編では美學上の立場から多少批評的の見方を加味することにした、さて滑稽的人物は次のやうに幾つかの群に分かれる。

### 一 虚飾家—偽善者

先づ第一に自惚家、外見坊と云つた種類の人間が来る。街學者、氣取家、偽善者などが之に屬する。前述の「プラマルバスの如きは餘りに誇張された結果美感を損ふので、最早今日の舞臺には適しない。全身法螺で固めたやうな人間は實際在り得ないやうに思はれる。今日の舞臺では滑稽的人物も多少個性を帯びてゐなくてはならない。

モリエールの「青鞥」(Les Femmes savantes)には男女の街學者や、氣取家の見本が澤山に提供されてゐる。そこで、等しく街學者とか、氣取家とか云つてもそこに少くとも二種を區別する事が出来る。一つは、云はゞ専門の街學者で、自分の學問や、才能を鼻にかける自稱學者や、自稱詩人が之に屬する。他は云はゞ素人であつて、ま

て人の煽動に乗り、自分の價値を過大視して、有りもせぬ才能を鼻にかけるといふ、寧ろ無邪氣な罪の無い輩である。前者は自分の専門に就ては多少の知識と能力とを持つてゐるだけに、幾分反省の眼も明いてゐる。従て生來自惚も強いが、それ以上に人爲的に自己の才能や價値を衒はうとする傾向がある。即意識的に法螺を吹くのである。單純な自惚家では無く、一種の偽善者なのである。餘程陰險な分子を含んでゐる。そして、その偽善の動機は多く虚榮心と利慾の念とから出てゐる。殊に「虚名」といふことが衒學者の生命であると云つて可い。

レッシングの「青年學者」(Der junge Gelehrte)はその虚名に憧がれる點で純粹の衒學者の好標本である。彼は自分の「原子論」を認めないと云つて祖國を「思知らず」と罵り、こんな國は永久におさらばを極めて、外國に移住し、獨逸人の籍を脱しやうと云つてゐる。また、これ程でなくても古典學の造詣を誇る餘り、親の附けて呉れた名前では面白くないと云つて拉丁風に「オレアリウス」(「グアッ」劇)とか「ザアデイウス」(「青箱」)とか名乗る學者は多數にある。そして、かういふ専門の衒學者になると、單に虚名を求めるといふばかりで無く、大抵その虚名を利用して金儲けをしやうと云ふ、

淺ましい我利の念が伴つて来る。かうなると一層野卑な人格が出来上がるのである。「青箱」の中のトリソタン(Trisotin)といふ學者とも詩人ともつかない男の如きに至つては實に嘔吐を催させるやうな人物である。一般にかういふ衒學者といふものは一種の「笑を失つた人」であつて、それ自身何等の情味も可笑味も無い、不愉快な人間である。吾々は唯その感むべき現實暴露を見て快哉を叫ぶばかりで、少しの同情も起さる餘地が無い。即所謂有情滑稽の對象にはなり難く、常に諷刺の材料に用ゐられてゐる。かの「青箱」の中の學者が偽手紙に釣られて面皮を剥がれる邊は實に痛快である。なほ、眞の學者と衒學者との對照を見るには、「ファウスト」を繙けば可い。死んだ知識の追求から覺醒したファウストと、夜燭を執て師の書齋を訪づれて、その冥想を妨げるワグネルとの問答が、簡明にその消息を語つてゐる。

「これでも知識は可なりある積りですが、一切を知り悉さうと思ひますので、  
といふワグネルの後姿を見送つて、ファウストはかう呟く、

「あゝいふ人間はいつまでも空な望みをかけ、絶えず空虚な事物に拘泥し、貪慾な

手で寶物を掘り探がして、たまたに蚯蚓でも掘むと喜んでゐる、御芽出度の代物だ。

## 二

次に、第二の種類の自惚家はどうかと云ふに、専門の術學者輩に煽動られ、擔がれ瞞されて、眼が眩み、逆上り、得意の鼻を蠢かすといふやうな、寧ろ好人物が多い。意識的に術ふ人間より無邪氣であり、またある意味に於て高尚だと云つて可い。勿論、氣取る、「外見を張る」といふ分子は多分にあるが、主なる要素は「自惚」である。無意識的自欺である。ベルグソンの云ふやうに、この無意識的のところ、眞の可笑味が宿るので、そこにまた吾々の同情の餘地があり、情味が生じ、所謂「好意的嘲笑」が湧いて來るのである。虛榮心はあるが、一方にはまた非常に強い信念がある。謬信ではあるが邪氣は無い。實際他人や、殊に自分の價値を信じてゐるのである。他から見ればその謬信なることが明かであるのに、飽まで頑迷にその信念を固執するところに、ベルグソンの所謂「凝固」から來る滑稽がある。「青踏」に現はれる母のフィラマンタ(Philaminta)は一種純乎たる女流哲學者で、家が破産をしたといふ虚報

が傳はつたときも、この老婦人だけは泰然として驚かない。

「何を騒ぐんです。臆病らしい！ なにも驚ろく事はないぢやありませんか。本眞の賢人には不幸といふものは無いのです。人は假令何もかも失くして仕舞つても、その人に變りはありません。」

この母の姉娘になると若いだけに虚榮心が強く、身の中に男戀しい血が燃えてゐながら態と無情な尊大な風を装つてゐる。男を愛しながらそれを告白するところが出來ないのは、一つには體裁を作るのと、一つには餘り「プラトニック愛」といふことを口にしすぎたからである。姉娘の方は飽まで家庭的の女で、これが却て戀に成功することになつてゐるが、序幕の冒頭で、この姉妹が結婚問題に就て意見を交換する處がある。二人の性格の相違が分つて面白いから少し抄譯してみやう。

姉。何ですつて？ 處女といふ美しい名を棄てるんですつて？ お前さん本眞に結婚なんかする氣なの？ しかもさも自慢らしく？

妹。え、さうですよ、姉さん。

姉。まあ、え、さうですよ、だつて、胸が悪くなるわ。

妹。どうして結婚がそんなに嫌ひなの？

姉。まあ、よく恥かしくも無く！

妹。あら、何故？

姉。よく恥かしくも無く、そんなことが訊かれたものです！「結婚」といふ言葉が妾達の精神にどんなに嫌らしく響くか、怪しい幻影でもつてどんなに深く妾達を侮辱するか、それがお前さんには分らないの？嫌らしい、猥な想像で人の考を掻き亂すのが分らないの？よく戦慄がみえぬにみられたものだ！お前さんには「結婚」といふ言葉からどういふ結果が生れるか分つてゐるの？

妹。え、結果と云へば、良人と子供と家庭とでせう。けれどもそれが妾には少しも恐ろしくもないし、侮辱とも思はれないわ。

姉。まあ、呆れてしまふ！そんな運命に屈従が出来るとおもふの？

妹。だつて真心から互に愛し合つてゐる良人と末永く添ひ遂げ、二人して清い、幸福な家庭を作るといふことが、妾達若い女の力で出来る一番善い事だと思ひますわ。ねえ、姉さんだつてかういふ結婚なら満更ぢや無いでせう？

姉。まあ低級ね、お前さんの思想は！詰らない家庭の心配に醒醒して、亭主と一打ばかりの子供とを唯一の幸福の理想として随喜するなんて、なんて卑小な生活でせう！そんな下等な快樂は下司や俗人に任せておいて、もつて高尚な事柄に眼をお付けなさい。もつと純な幸福を御望みなさい。物質とか、官能の樂みとかいふものを棄て、精神の命令だけに従ふやうになさい。阿母様を御覽なさい、女でこそあれ、學者として世間から尊敬されてゐらつしやる、阿母さんが立派な模範です。妾のやうに阿母さんの娘として恥かしくないやうになさい。一門の天才の仲間入りをして學問上の高尚な快樂を味はふやうに心懸けなさい。良人に服従するよりも哲學と結婚なさい。……

更に叔母のベリイズ(Belise)に至れば鼻持ちのならない人間に出来上つてゐる。有りもしない學問を銜ふだけならまだしもだが、齡にも恥ぢずに浮氣で、自分は絶世の美人だと想ひ込んでゐる。男に慕はれてゐるのは自分に相違ないと獨り合點をして、愈々相手が姪の方へ結婚を申込んでしまつてもまだ悟らない。そして、こんな世迷ひ言を云つてゐる。

「けれども矢張あの人の心は妾の物だ。自暴になつて心に染まぬ女と結婚して一生後悔する例も世間にはよくある。あの人も氣をつけるが可い」。

この叔母は嫌味な「叔母」の型として餘程好く描かれてゐる。ズーデルマンの「故郷」の中の叔母フランチスカはこのペリイズの血統を引いてゐる。一體にこの「青踏」の女性は皆類型的のものではあるが、しかもそれぞれ微妙な個性の色彩を持たして巧みに書き分けてあること恰も「氣取家」(Les Précieuses ridicules)や「女子學校の批評」(Critique de l'Ecole de Femmes)の女性と同様である。

## 三

次には前述の人物よりも更に愚かな、罪の無い虚飾家がある。例へばシルレルの「戀とたくみ」(Kabale und Liebe)の中の式部官カルプ(Kalb)の如きがそれで、麝香の匂をぶんとさせて巴里仕込の交際術を振り廻はし、自分は重大な用務を帯びてゐて非常に多忙であると云ひ觸らして得意の鼻を蠢めかさうと云ふ氣障なハイカラ男に出来上つてゐる。元來シルレルは悲壯劇を本領としてゐるが、滑稽の才も

多分に有つてゐた。それは特に初期の作に於て覗ふことができる。この劇などはこの點から見ても大なる價值があるのであるが、カルプの如きは詩人が最も諷刺の筆を恣にして描き上げた人物で、名からして「憤」といふ、名詮自稱の愚物で、形式主義の権化、間違つた名譽觀念の標本とも云ふべき者である。一朝君主といふ日光が照らさなくなると倏忽に「昨日の洒落去年の流行物」にならうといふ蜉蝣的人物である。かの、日本でも上演せられたマイエル・フォルステルの「アルト・ハイデルベルク」(思ひ出)の中の侍従ルツの如きも、型は多少違ふが、矢張カルプの系統を引いてゐる。然しこの種類の「自惚家」の傑作はモリエールの「俄紳士」(Le Bourgeois gentil-homme)の主人公ジユルダンであらう。この男の事は前編「筭」の條で一寸述べて置いたが所謂成金式人物の典型として餘程面白く描かれてゐる。勿論あの頃の文藝の常としてこの性格も餘程誇張されてはゐるが、それでも「タルチュフ」のオルゴンヤ(Orgon)「氣は病」のアルガン(Argan)のやうに病的人物にまで誇張されてはゐない。この「俄紳士」といふ劇はモリエールの物では最も自然で、また有情滑稽に富んでゐる作の一つだと思ふ。一體にモリエールには鋭い諷刺の筆はあるが、有情滑



稽は寧ろ乏しい方なのであるが、この劇は例外の一つである。

## 四

けれども以上挙げたのは、概して皆諷刺的人物であつて、ユーモアの對象となるには餘りに美點を缺き、餘りに虚偽に陥つてゐるものばかりである。之に反して、次になほ一群のペダンチックの人物がある。これは缺點と共に美點も多分に持つてゐて、吾々から好意的嘲笑を以て迎へらるべき人物である。例へばゲーテの名曲「ヘルマンとドロテア」(Hermann und Drotchen)の中に出て来る藥種屋や、シルレルの「ワルレンシユタインの陣營」(Wallensteins Lager)の騎兵曹長の如きがそれである。この藥種屋は色々の缺點を有つてゐる。彼は自分勝手の喧家で、臆病で、外見坊で、自惚が強く、吝嗇で、疑深く、殊に一知半解の饒舌家である。けれども、かういふ色々の缺點があるにも拘らず、吾々が彼に對して好意的微笑を禁じ得ないのは如何いふ譯であるかといふに、第一彼の弱點は「惡徳」といふ處迄誇張されてはゐない。寧ろ無邪氣な罪の無い程度の缺點である。第二に彼自身は全く自分の缺點を意

識してゐない。彼の一舉一動は自發的であつて、技巧の痕を止めず、虚偽の分子が無い。この「無意識的」といふところに大切な有情滑稽の要素が潜んでゐるのである。それから第三に、これは第二と關係のあることであるが、彼は結局腹の中は好人物なのである。親切氣があり、世話好きで、愛想が好い。かういふやうな消極的及積極的の善良な性質が有るので、他に幾多の缺點があるにも拘らず、人に愛好せられるのである。そして、かういふ自ら吾人の唇邊に微笑を漂はす様なユーモラスな人物を描き出した作者ゲーテが、豊富な高貴なユーモアを有つてゐたことは彼の諸作が明かに之を證明してゐる。かのメフィストの如きすら「愛すべき惡魔」の感を與へるのは矢張作者の人格の反映と見て可いであらう。殊に此「ヘルマンとドロテア」の一曲は春風に面を撫でられるやうな心からの慰安を吾人に與へる。この氣分はゲーテ以後には殊にケルレルに於て味はふことができる。因に、レッシングの「ミンナ・フォン・バルンヘルム」の「宿屋の亭主」もこの藥種屋と餘程共通の性質を有つてゐる。彼は非常に好奇心が強くて人の秘密を知りたがり、慾張りで、饒舌で、且臆病である。然しこの男には尙一つの大きな缺點がある。それは虚言を

吐く悪癖で、一方にはまた藥種屋の美點たる親切氣といふものが無く、徹頭徹尾利己的である。しかもこの男が吾人に嫌惡の情を起させないのは、その愚昧な性質一種の素朴ナイヴネスに在る。總じて「宿屋の亭主」といふものは一種滑稽的人物の型を成してゐる。「思ひ出」のもその一例である。

ワルレンシユタインの中の曹長は傑れた滑稽的人物に乏しい獨逸の戯曲に於て貴重なる性格の一つとなつてゐる。この男もベダンチックで、迷信家で、法螺吹きであるが、前の藥種屋ほど多數の弱點は有つてゐない。この男を滑稽に見せるのは、彼がワルレンシユタインを氣取つて、重々しい、尊大な態度を取るところに在る。吾々が彼を諷刺の眼で見ずに、寧ろ厚意と温情とを以て彼に對することが出来るのは、所謂「獨逸的忠實」が彼の心を充たしてゐるからである。「ハムレット」の中のポロニアス(Polonius)も亦ベダンチックな俗人の好標本である。この老人は所謂健全な常識といふものを振り廻はして、人生の事は何でも飲み込んでゐるやうな顔をしてゐるところが、物を深く徹底的に考へる懷疑的な佯狂の皇子と鋭い對照を形くつてゐる。

## 五

次に偽善者に就て云へば、これも虚飾家の一種ではあるが、普通のベダントと異なる點は、ベダントの活動範圍は智識や才能の方面であるが、偽善者のは道德、宗教の方面であること、ベダントの方では多少自惚、自欺と云ふやうな無意識的要素が混入して來るが、偽善者の方では凡てが悉く意識的の虚偽から出てゐることである。それであるから、純諷刺的人物の代表者としては偽善者が最も適してゐる。シルレルの所謂「懲罰的又は熱情的諷刺」の好個の對象なのである。茲では最も明白に、感情の高度の嚴肅或は詩人の「道德的理想」が發揮せられる。所謂「情性の滑稽的解放」が行はれる。即、諷刺的喜劇はその絶頂に達し得るのである。そして、モリエールの「タルチュ、ケスフ」は疑も無くこの種の性格の白眉である。この「偽善者の元祖」に於て詩人の諷刺的筆鋒は銳利を極め、この人物を詩人は最も嚴肅な道義的情操と精妙な戯曲的技巧とを以て描き上げた。吾々は羊のやうな溫良な、殊勝らしい外貌の下に豺狼のやうな劇しい情慾と貪婪とを裏む恐ろしい偽善者を見る。

そして、この獸性が徐々と表面に出て来る、その過程を緊張した心で眺める。と云ふので、この大偽善者も畢竟酷く面皮を剥がれて、加之牢獄へさへ抛り込まれる——尤もこの解決は作劇法から云ふと所謂機械仕掛の神様式の無理を免がれないが——ともかく充分罰せられるのであるが、さらば吾々の道德的情操は充分詩的に解放せられたかと云ふと、必ずしもさうでは無い。そこに苦いものが依然として残つてゐる。ベルグソンの波の譬喩の様に、指の間に泡沫は消えても、苦い鹽の味が残る。ユーモアの場合のやうに葛藤の融和的解決を見ることが出来ない。さうかと云つて悲壯美のやうに超然的解決も得られない。諷刺の苦味は永く舌端に残つてゐる。シルレルは「吾人が高い批判的見地に立つ限り、如何に對象物が卑小で、下等であらうとも一向差支無い」とは云つてゐるが、タルチュッフの様な陰險な偽善者に對すると、どうしても吾々の道德的情操は衝撃を感ぜざるを得ない。超然として客觀的態度を保つてはゐられなくなる。全曲を通じて苦澁な感情に支配せられる。タチツスの羅馬頽廢史などを讀むときは自ら心持が異はざるをえない。血と肉とを備へた道德上の罪人が、殆ど現實と假象との區別

を忘れさせるほど自然に描かれてゐるのであるから、冷かな眼を以て眺めることはできなくなる。吾々は直に劇の主人公と個人的關係に入る。従て道德的情操の鋭敏な者は誰でもタルチュッフに對して嫌厭の念を懐くやうになる。タルチュッフの場合には「滑稽が醜惡に、弱點が罪惡にまで誇張せられてゐるからである。そして假令結末に至て喜劇的和解(人工的ではあるが)成立しても、吾々の情性の完全な詩的解放は爲し遂げられない。情性の解放と云へば單に道德的情操の解放ばかりで無く、吾人の全感情生活の解放を意味するのである。この解放は矢張有情滑稽を疎たなければならぬ。諷刺は其性質上悲喜劇的效果を生ずるのである。そして、偽善者が好個の諷刺的性格である限り、彼は喜劇に悲劇的要素を齎らすと同様に一方には悲劇に喜劇的要素を輸入する。だから、偽善者を悲劇の敵役として用ゐる場合には餘程注意しないと折角人に恐怖を惹き起さしめやうといふ場合に却て滑稽になつてしまふことがある。シルレルの處女作「群盜」(Die Räuber)に現はれる惡人フランツ・モール(Franz Moor)の如きはその一例で、極惡無道の偽善者なのであるが、その偽善的行爲が餘りに誇張せられてゐるので、往々

滑稽になり、人を嘖飯させるやうなこともある。これは詩人の年少の時の作として無理も無いことである。また之と正反對の例は、喜劇の主人公として偽善者を取扱ふ場合に餘りに陰險な人物に仕上げた結果、悲劇的分子が過重になつて充分に喜劇としての効果を挙げえない場合である。タルチュエフの如きは幾分この弊が認められる。

## 二 愚人—守錢奴—偏執者

次に、惡漢、偽善者等の好餌になる一群の「愚人」がある。これ等は、懲罰的諷刺の對象と迄はゆかず、寧ろ揶揄的諷刺の的となるに過ぎない。畢竟消極的の役廻りで、到底一つの戯曲なり、小説なりの主人公となるだけの力量も貫目も無いのである。「群盜」中の馬鹿な公達ヘルマン(Hermann)はこの種類の成功した性格の一つである。「偽る者は禍なり」の甘かされた、軟弱な甥アタルス(Atalus)は稍不自然ながらまづ可なりに描かれてゐるが、同じ劇の愚鈍な花婿ガロミール(Galomir)に至つては假令如

何に作者は辯護しても、全然白痴で、非審美的の、醜怪な畸形兒に過ぎない。かういふ低能兒乃至白痴者は特に病的人物として取扱ふならば格別、喜劇の一要素として行動せしめることは餘程考へものである。丁度「片輪」、「老人」などの場合と同様の危険を伴ふことを忘れてはならない。

次には、生來の愚人といふ程では無いが、惡漢や、偽善者に欺かれて悟性の力を失ひ、深い惑溺、迷信の淵に陥つて、殆ど常識で判断することのできないやうな狂愚を演ずる輩がある。これ等は、その恐ろしい頑迷固陋の爲めに人の笑を買ふのであるが、假令盲目的でも、大抵強烈な意志や、確乎不拔の信念を有つてゐるので、屢々戯曲の主人公などにせられることがある。ベルグソンの所謂「凝固」から來る笑は最もこの種の人物に當てはまる。

例へば「タルチュエフ」のオルゴンと、氣は病のアルガンの如きはかういふ、欺かれた人物の好標本である。そして、この兩人とも殆ど病的といふところまで誇張せられてゐる。アルガンが申分の無い健康體を有しながら瀕死の病人だと思ひ込んでゐるのはまだ説明がつく、といふのは彼の周圍には恐ろしい詭辯家が澤山

に控へてゐるし、殊に女房のペリイヌといふ恐るべき毒婦が附いてゐて傍から色々の事を吹込ふきこひるのであるから、愚昧で小心の彼が神経を起して大病人だと思ひ込むのも無理は無い話である。また、オルゴンの母のマダム・ペルネル(Pernelle)の惑溺も老人で且女性といふ理由で説明がつかないことも無い。然し平生賢いといふ評判の、立派な分別盛りの男であるオルゴンが忽ちタルチュッフの偽善に眩惑せられて夢中になり、この似非聖者を現在の母や妻子よりも可愛がるといふのはどうも少し腑に落ちかねる。彼のタルチュッフに對する愛は全く男女間の戀愛のやうに熱烈で、殆ど病的と云つて可い。

同様に解し難いのは、やはりモリエールの描いた「守錢奴」(L'Avare)の心理状態である。どうしても新たに「拜金狂」とでもいふ病名を作らなくては説明がでない。この男にとつては金錢は手段では無く、全く究竟の目的なのである。金錢は彼の最も神聖な偶像で、彼は文字通に黄金神ゴッド・オブ・ゴールドの熱烈な宗徒なのである。尤もこれほど誇張した程度で無ければ、かうして手段と目的とを顛倒した物慾の奴隷は世上に尠くは無いのであるが、モリエールの描いた守錢奴はどうしても病人と云ふよ

り外は無し。

## 二

さて、これ等の「欺かれた又は迷へる人々」の行動は何と云つてもまだ消極的であるが、茲にもつと積極的な「偏執者」の群がある。この人々は愚鈍といふ譯わけでは無く、寧ろ多少の智恵と見識を有つてゐるために、一種の偏した人生觀を樹て、それを驚く可おどろきほど頑固に執拗に墨守し、如何なる事情の下にも、如何なる場合に於ても之で押し通さうとするのである。彼等はベダントの様な虚偽と虚榮心をも有たず、又單純な「氣取家」や「自惚家」よりも遙に眞面目で、且堅實な人間である。そしてかういふ流行を追ふ、輕薄な連中を蛇蝎視して之と戦ひながら終に一方の極端に走つてしまふのである。彼等は猜疑心が強く、片意地で、皮肉で、人間や事物を常に裏面から見る傾向を有つてゐる。この點で彼等は「厭人家」(Misanthrop)の先驅者である。

「良人の學校」(L'Ecole des Maris)の主人公スガナレル(Sganarelle)はこの種の標本的人

物である。世間によくある姦通騒ぎや、不貞な妻の醜聞などに氣を腐らし、また非常に臆病になつて、自分だけは如何にかして姦婦の良人にはなるまいと決心する。そこまでは可いが、さてその手段としては一般の女尊男卑の弊風を矯正しやうがために、自分は東洋流の男尊女卑を實行して、飽迄男性の權威を示し、女性には暴君の態度を取り、妻は全く奴隷を以て遇しやうと決心する。けれども、束縛は危険を招くといふ格言を知らぬ悲しさは、自分だけは理想的結婚を夢みつゝも結果は全然失敗に終る。尤も姦婦の良人となる不名譽は望み通りに免かれたが、當人はいつそその方を希望したかも知れない、と云ふのは彼は丸で「良人」にならず仕舞ひだからである。彼の戀人は彼の偏屈に愛想を盡かして、他の男と夫婦になつて仕舞ふ。或程これでは姦通される心配は無い譯である。

「女の學校」(L'Ecole des Femmes)のアルノルン(Arnolphe)は更に一步を進めて、妻に姦通される心配から、美しい女より寧ろ思ひ切り醜い、思ひ切り馬鹿な女を娶る方が安全だと考へる。そして自分の愛してゐる少女をある僧院に押籠めて理想的教育を施さうと試る。即出來得る限り無知の状態に止めて置くのが彼の教育法の

大本なのである。ある時、この少女が「子供は耳から生れるものでせうか」と彼に尋ねたと云つて、教育の効果が現はれたのを大に喜ぶ。この男の「婦訓十條」とでも云ふべきものは頗る妙である。その中の二三を擧げてみやう。

第四條 妻たるものは道路にて常に俯眼たるべき事。妻は夫を見て眼を樂ますべきものにて、決して他人を見るべきに非ず。

第六條 萬一、男子より物を贈らるゝことあらば必ず拒絶すべき事。人に物を贈るは返禮を求る下心よりと知るべし。

第七條 妻たるものゝ部屋に不用なるものは筆墨紙の類なり。よくよくの場合には夫に代筆を依頼すべし。

右の賢者振つた兩人が自繩自縛的に戀人に裏切られ、譏弄せられる経路は頗る痛快に描かれてゐる。

尙、この種の凝り固まつた偏執者の例としては、オットー・エルンストの「教育家としてのフラックスマン」(Flachsmann als Erzieher)がある。此男は潜りの小學校長であるが、天才的の良教師フレンミングに云はせると、幾多の生徒を一つの型の上に載せて、定りだけの釘を頭に打ち込み、他日世間の人に踏み付けて貰へるやうな代物

に仕上げる一個の靴屋に過ぎない。百二十三條から成る校規といふものを麗々しく教員室の壁に貼り付けやうと云ふ形式主義の怪物である。小使と次の様な問答をすやうな一個の木偶である。

校長。俺は黒インキを右に、赤インキを左に置くやうに定めておいた。

小使。はい、左様であります。

校長。ところが、茲には赤いのが右に、黒いのが左に置いてある。

小使。はい、左様であります。

校長。萬一俺が迂濶してゐたら、公文書へ赤インキで記入したかも知れんではな  
いか。

この自動人形の様な機械的のところが生命の感じと反對の現象で、正しくベルグソンの説く「笑」の對象を成してゐる。なほ「凝固」の例としてはかの世界的滑稽的「性格」ドンキホーテを擧げることが出來やう。然しこれは諷刺的に描かれてゐるといふよりも寧ろ次に述べる有情滑稽的の人物に屬する。

### 三 有情滑稽的人物—悲喜劇的人物

右に述べた凝り固まつた人物の缺點が餘りに誇張せられず、一方にまた長所美點が性格の根本に置かれる場合には有情滑稽的の人物又は悲喜劇的の人物が出來る。即、缺點の誇張から來る滑稽といふより、寧ろ長所が過度に走つて短所となつたところから生ずる滑稽であつて、狹義に於ける有情滑稽(Humour)の對象なのである。

狹義の有情滑稽とは如何なるものかといふに、これには種々の議論もあるが、私は姑らくイェーベルホルスト(Uberhorst)氏の簡單明瞭な定義を藉りて置かうと思ふ。

「有情滑稽とは、一方に良き性質を具へつゝ、而も一方に滑稽的要素を有つた人物の叙述である。但、如何に鋭くその滑稽的方面を摘發してあつても依然その人物の美點が明らかに認められる様に描くのである。そして其目的は讀

者をして該人物に對する同情を換起せしめるに在る。

この種の人物は概ね大なる道德上の美點、即、愛情、誠實、義務觀念、正直、公平、着實、公明、眞實、虚心、謙遜等の諸徳を具へながら、一方に世間的知識、特に注意、用心、自制、自重等を缺くもの、又放心、遲鈍、判斷力の缺乏、訥辯、想像力の缺乏、機智の缺乏、沒趣味、外貌の醜惡等の缺點を有つてゐるものである。

私はこの種の滑稽を「狭義の有情滑稽」と名づけたいと思ふ。そして、かの諷刺、即「懲罰的の笑」に對する「好意的の笑」或は「冷笑」に對して「溫笑」と云ふ文字を造つても可いかも知れないが——この「好意的の笑」に當るものを廣義の有情滑稽と云ひたい。即、滑稽的缺點に對して、長所、美點が著しく現はれ、從てその對象人物が可なり道德的又は知的價値を生じ得る場合を狭義の有情滑稽と名づけ、美點よりも寧ろ缺點が多く現はれ、尊敬、同情等の念よりも寧ろ輕快な無邪氣な笑を催させるやうな場合も含んで之を廣義の有情滑稽と云ひたいのである。即、同じく「好意的の笑」であつても輕快なものと、餘程眞面目に近いものとを區別したいのである。

さて、狭義の有情滑稽の對象は滑稽的人物とは云ひながら、美德や、品位を具へて

ゐるのであるから、往々悲劇中の人物として現はれることもあり得るのである。所謂「滑稽的過失」といふものは性質上「悲劇的罪過」と異つたものでは無い。茲には恰も「有情滑稽」と悲壯とは同胞である。しかも往々見分けがつかないほど酷似した同胞である」と云ひ、また「一方に於て有情滑稽と悲壯とは直接に相觸れてゐる。滑稽的葛藤がある程度以上に深刻になれば直ちに悲劇的葛藤に變ずる」と云つたリップスの言葉が當筈である。例證としてはオットー・ルドギヒの「山林官」(Der Erbförster)を挙げれば充分である。尙、有情滑稽に就ては第二章の終りに詳しく論ずる積りである。

## 二

さて、前述の意味に於ける有情滑稽的人物の例としては、レッシングの「ミンナ・オン・バルン・ヘルム」(Minna von Barnhelm)の主人公テル・ハイム少佐(Major von Tellheim)などが適當である。テル・ハイムは徹頭徹尾普魯西軍人の好典型で、古武士の節を備へてゐる。即、極めて鋭敏な名譽觀念を懷いてゐて、往々頑固、片意地といふ程度



までになる。彼の戀人ミンナが、「あの人はどうも少し見識があり過ぎるやうに思はれる」と侍女に語るのも道理である。また「男といふものは、ほんとに片意地で、開けない。名譽といふ幽霊ばかり凝視めて、外の事には一向感じが無いんだ！」と非難してゐるのも、多少の誇張はあるが、テルハイムの弱點を捉へ得た言葉である。つまり、茲では軍人の最高道徳たる名譽觀念、昂然たる不屈の精神が一の弱點になつてゐるのである。逆境のために彼の名譽觀念は痛く傷けられた。傷けられた名譽觀念は自ら過敏にならざるを得ない。彼の唇邊には既にかのレッシングが描いた凄婉な伯爵夫人オルジナ〔悲劇エミリア・ガ〕の不氣味な嘲笑が漂ふ。この「人を憎み呪ふ恐ろしい笑」に對してミンナは色を失ふのである。もう一歩で彼は悲劇の主人公になるところであつたのだ。然し幸な事には、さうなるには彼の人物が餘りに大きく、また最後まで彼を見棄てない少數の味方の情愛が餘りに切であつた。殊に愛人ミンナの熱い愛情と堅い貞節と、また巧みな計略とが、彼を悲劇的人物たらしめなかつた。

もう一つ例を挙げると前に述べたフライタハの「新聞記者」の中に出て來る非職

大佐ベルクも同型の人物である。この老軍人は疑も無く廉直な、高尚な人格で、貧民の恩惠者、孤兒の父とまで云はれてゐる。人を愛し、また人から愛せられる性質である。ところが古武士の風格のあるこの老人には勿論軍人としての自尊心と名譽觀念とが多分に備はつてゐるが、これが彼の長所であると同時にまた短所になつてゐる。この點は前のテルハイム少佐と同様であるが、違ふのは周圍の影響である。テルハイムの場合には不遇逆境が彼の折角の美點を却て缺點にして仕舞つたのであるが、大佐の場合には反對に餘り境遇が好すぎたのが當人の毒になつた傾がある。悪い煽動者の口車に乗せられて政治界へ乗り出して死に花を咲かせやうといふ野心が起ると同時に思慮分別とか克己心とかいふものが失はれて仕舞ふ。第一編の「老人」の項に述べたやうに所謂「年寄の冷水」といふ弱點に陥るのである。殊に大佐の場合に滑稽に感ぜられるのは、口では盛んに虚榮心といふものを罵り、野心の唾棄すべきを滔々と述べ立て、人に説教して聞かせながら、その舌の根の乾かない中に自分がさういふ淺慮な弱點を暴露することである。この邊の描寫に於て作者は確に成功し、充分喜劇的効果を收めてゐる。大佐はかうい

よ稚氣を帯びた人物なので、彼の性格は純有情滑稽の對象として最も適當なものになつてゐる。反之ナルハイム少佐の方は悲劇的性質を餘程持てゐて、折々感傷的印象を與へる。

けれども、「野心」とか「虛榮心」とかいふものが特に喜劇の契機だといふ譯では決して無い。それどころか、これ等は悲劇にとつても重大なモチーフになつてゐる。近い例を挙げれば、シルレルの「フイエスコ」曲の如きは、野心の作用と、その失敗との活畫といふ註が加へてある。

## 三

そこでこの大佐は獨逸の世話劇によくある「父の型」の中で、感傷的の傾向を脱却した純喜劇的人物といふことが出来る。さらば、この「父の型」といふのはどんなものかといふと、真正直な人間で、平民としての名譽を誇りとし、凡て當世風の新流行や、所謂上流の紳士連に對して疑惑の念を抱き、表面は粗つぽくて嚴めしいが、實は子供に眼が無い方である。この嚴格な名譽觀念と、深い愛情とを兼ね備へた「父」は

普通喜劇的人物に出來上つてゐる。レッシングが「エミリヤ・ガロッタイ」の中で描いた、オドアルド (Odinro) は云はゞこの「父」の祖父と云つても可いと思ふが、寧ろ眞面目な、嚴格な、性急な方面を示してゐる。けれども彼も亦ナルハイムと同じ様に凡ての美しい、優しい感情を受け入れることは出来るので、決して頑固一點張の武辨では無い。劇の性質上徹頭徹尾嚴肅な悲劇的の効果を與へるが、實はシルレルが「戀とたくみ」の中に描いた市の音樂師ミルレル (Miller) と共通の性質を多分に持つてゐる。この音樂師は滑稽的性格として餘程貴重なもので、クローノライッセルが、この樂師とその妻君との間の會話を、古來劇作家の描いた場面の中で最も生氣あるもの、「一つ」と評したのも道理である。彼は始めの中は純滑稽的印象を與へるが、曲の悲劇的進行に連れて漸々悲喜劇的性質を發揮して來る。この最後の傾向はシルレルの模倣者に依て繼承せられ、情緒劇 (Das Bühnenspiel) の主要要素となつた。かういふ譯で樂師ミルレルはオドアルドに對して獨逸世話劇に於ける「父」の父と云ふことが出来る。この獨逸喜劇に於ける感傷的の傾向はその源を尋ねるとレッシングへ戻る。彼は「茶番 (Possenspiel)」は唯笑はせるのを目的とし、哀憐喜

劇(Das weinerliche Lustspiel)は唯情に溺んで泣かせやうとするが、眞の喜劇は双方を目的とする」と云つてゐるが、この原則を「ミンナ」に實地應用したので、實際この劇では感傷的分子が滑稽的分子と餘程接近してゐる。感傷といふことは一方に喜劇を粗野な茶番式の探りから救ひ出し、一方には又鋭い、苦い諷刺から解放した功績はあるが、然し感傷それ自身は眞の喜劇的情操では無い。完全な滑稽的解放を缺いてゐる。ベッチングンが「ミンナ」を評して、この劇は唯「弱々しい、哀れつばい情調を喚び起こすだけで、溢れ出るやうな、対象物を勢よく超越するやうな強い喜びは薬にしたくも無い」と云つてゐるのは稍々酷に失するやうだが、道理の點もある。少くとも所謂哀憐喜劇「Comédie larmoyante」に於ける悲喜劇的「父」は眞の喜劇にとつても、眞の悲劇にとつても餘り適當の性格とは思はれない。感傷的分子を除去するか、或は可成抑壓することが必要である。さうすると一方にはフライタハの描いた非職大佐ベルクが出来、一方にはルードギヒの「山林官」や、ヘッベルの「指物師アントン」、「マリア・主人公」が出来上るのである。ハウプトマンの喜劇「同僚クラムプトン」(Kollege Crampton)の主人公は喜劇拂底の獨逸文學にとつては中々貴重な

滑稽的の「父」の型ではあるが、惜いことには餘り飲酒家になり過ぎてゐる。ハウプトマンがこの劇の喜劇的效果を主人公の性格の發展からばかり導き出さうとしないで、酒精の助けを借りたのは最も惜む可しである。酒のために主人公も劇そのものも大分損められた形である。主人公の心理的描寫は随分精緻ではあるが、劇の主人公としては餘りに病的人物に出来上つてゐる。

## 四

價值ある人物が自分の持つてゐる理性や美德のために却て笑の對象となることがある。即その美點が背理な或は偽善的な周囲と調和しない場合である。リッブスはかういふ場合の例としてモリエールの「厭人家」(Misanthrop)を擧げてゐる。この厭世的な人間嫌ひの要素は既に前に述べたスガナレルやアルノルフなどに多分に認めることが出来るし、また多少ともにテルハイム、オドアルド、アツピヤニ、一般にかの定型的「父」に於て認め得るが、この厭世的氣分の透徹した、最も眞面目で、最も深みのある人物はやはり「ミザントロップ」の主人公アルセスト(Alceste)

である。モリエールの描いた性格中最も主観的のものだと云はれるだけ、そこに缺點もあるが、一方に動もすれば苦い諷刺に傾く作者の滑稽が茲では深みのある眞のユーモアの味になつてゐる。喜劇の主人公としては餘りに眞面目過ぎ、餘りに悲劇的だといふ批評もあるが、彼の極端まで行く正直一方の性格と、戀人に對する熱烈な愛情とがこの「無滑稽の滑稽劇」(Comédie sans Comédie)に一種感傷的に陥らない程度の滑稽的情味を與へる。

## 五

さて、自分の過激な、或は周囲と不調和な性質に依て無意識的に笑を買ふ限りに於てアルセストはユーモアの客體であるが、茲にかういふ種類の人物がある、それは意識的に人の笑を買ひ、態と自分を滑稽的に見せやうとするので、云はゞ反語的滑稽の主體たる人物である。この反語といふものは種々の動機から生れるもので、ソクラテスの反語は高尚な目的を持つてゐると同時に崇高な有情滑稽の性格の發現であり、メフィストの反語は惡魔的陰謀の假裝である。そして粗野な反

語的滑稽を用ゐてしかも一種獨特の妙味を持ち同時に純滑稽的印象を與へる人物の例としては、私は沙翁の「悍婦馴らし」の主人公ペトルッチョ(Petruccio)に及ぶものは無いと思ふ(第一編「女」の項参照)。彼は男性的の力と才智とで勝利を得る。そして笑ひながら「バツワ第一」といふ悍婦の狂暴を壓迫してしまふ。「狂ふ悍婦を狂ひ負かしてしまふ」のである。即、他人の痴愚を矯正せんが爲に自分で痴愚を裝ふのであつて、しかも純滑稽的印象を與へる。その根底に樂天的の氣分が流れてゐるからである。

然るに、之に反して、心中には深い悲痛とか又は燃えるやうな情熱を懷きながら、しかも表面には愚かな笑ふべき態度をとり、之を以て云はゞ一種の精神的安全瓣としてゐるやうな人物があるとすればこれは眞正の悲喜劇的人物であつて、往々悲劇の中で重要な役を演じてゐる。かういふ性質の人物は好んで他人に對して辛辣な諷刺や、反語や、皮肉を用ゐ、一方に自己優越の意識は充分に持ちながら、一方にまた好んで自嘲を加へる。要するに分裂した性格で意欲(Wollen)と能力(Können)との矛盾から生れる悲痛が胸に喰ひ入つてゐるのである。この傾向は地獄の眷

族の血の中にも在る。メフィストを見ればそれが明かに分かる。しかし、もしこの情熱の體現を世界文學の中に求めれば誰でも第一に沙翁の「ハムレット」を挙げずにはゐられまい。そしてレッシングの描いたオルジナも凄婉無比の悲喜劇的女性である。佯狂の皇子は半狂の伯爵夫人よりも一層知的で、また懷疑的であるが、その代りに是は彼よりも情熱に於て勝つてゐる。

悲喜劇的性格に於て滑稽と悲壯と喜劇と悲劇とは相接する。滑稽的人物の解剖も茲で筆を止めなければならぬ。

## 第二章 笑と人生觀

第一編及第二編第一章に於ては滑稽が性格の上にどういふ風に現はれてゐるかを觀察し、特に心理的及審美的解剖を試みたのであるが、この章では純ら人生觀上の問題として滑稽を研究してみたいと思ふ。即、滑稽的に人生を觀るといふのはどういふことであるか、更に同じ滑稽的の觀方と云つてもそこに態度の上に多少の差違はあるまいかといふやうな問題を取扱ふのであつて、便宜上三人の詩人を取て、三つの態度を代表せしめ、それを中心として自分の考を述べることにした。即、ヴェデキント (Wedekind)、トーマスマン (Thomas Mann) 及ケルレル (Keller) の三詩人の作品を通してその人生觀を覗ひ、之に論評を加へやうと思ふ。そして滑稽的人生觀に對する一般論は最後の主としてケルレルの世界を中心として論ずる項に結論として收めた。

### 一 譏諷と自嘲

諷刺及自嘲の何物であるかは殊に序論で詳述した筈であるが、この方面を人生觀上に強烈に發揮してゐる詩人を現代に求めれば、第一に獨逸のゲエデキントに指を屈しなければならぬ。シヨイも諷刺の筆の犀利なる點ではゲエデキントと並び稱せられるが、其態度はむしろ積極的、肯定的であつて、自嘲から來る自己分裂の消極的方面は著しくないやうに思はれる。

諷刺と自嘲の風は實にゲエデキントの長所であつて又彼の病弊である。ある評家が彼を最上の悲喜劇家と云つたのは當つてゐる。彼には確に滑稽の才があるけれども、その滑稽は動もすると惡辣、卑猥のものになつて作品全體の調子を攪亂する虞がある。此の點は彼自身も充分自覺してゐて、議論や作物の上で屢々辯護を試みてゐる。自分の態度は決して不眞面目な滑稽的のもので無く、極めて嚴肅なものである。自分は道德家であると聲言してゐる。如何に嚴肅な態度を取つても理解の無い世間は之を滑稽視してしまふ。「ヒダラル」の主人公の運命はそ

れである。「人生此の如し」の主人公は最も深刻な悲劇を演じつゝ、哄笑を以て迎へられる。「人生此の如し」と觀ずるのは實にゲエデキントその人なのである。

又「バンドラの筐」の中でもある人物を藉り來つて無知なる世間の嘲笑を具象化してゐる。「檢閲」は最も露骨に自家辯護を試みたものである。然しながら果して彼の態度は彼の主張するが如くに嚴肅なものであるか。彼自身と雖も危まざるをえない。それは彼の劇「不思議な石」を讀むとわかる。劇の主人公なる魔法師は自分の使ふ「フモール」(Humor)の爲めに自分の武器で射殺されてしまふのである。「フモール」の歌ふ歌は卑猥輕佻のものである。自分とは正反對の現象である。それに彼は武器を奪はれ、靈石さへ取り去られて、その射る矢の下に斃れる。彼は云はゞ自殺したのである。彼の誇としてゐた「フモール」は彼の死敵だつたのである。

又彼の自嘲的態度は「道化役者」(Bijazzo)といふ詩にも現はれてゐる。これは作者が「人生此の如し」の中から抜いたもので、「移り氣の運命の心は誰にも分らない。自分は唯驚くばかりで、泣くことも笑ふことも出來ぬ。いつそ人間は毎日筋斗返へりでもしてゐるのが、可いのだらう。手足が利く中は不幸も幸福に變るものだ」

といふ意味を歌つてゐる。又「貨幣」(Der Taler)といふ詩では、「錢は美だ。錢さへあれば好きな亭主も持てる」と云ふやうなことを述べてゐる。日記體の小説「退屈」(Ich langweile mich)「市場にて」(Bei den Hallen)にも彼の棄鉢の態度が現はれてゐる。人生が退屈であるといふことは他處にも見えてゐる。ある男は退屈の餘り、睡眠中に死ぬ虞があると云つて臥床の中へ硝子粉を撒いたといふ話である。ヴェデキントは無事平凡を忌み、常に奇抜な痛快な事を求めてゐる。彼の作にエキゾチックの分子が豊かなのもその結果であらう。然しこの奇抜な思想の大建築も多くは鋭い自嘲の斧で無残に破壊せられる。美的生活の鼓吹も、肉慾の崇拜も、ニイチエの影響の著しい超人的思想も皆幻滅と自嘲とに終つてゐる。そして新らしい作ほどそれが著しくなつて來てゐる。以下少しく個々の作品に就て觀察してみやう。

## 二

● ヴェデキントの出世作として有名な「春の眼覺め」(Frühlings Erwachen)は一方に青

春の止みがたい衝動の發露と、その悲劇的結果とを描いて成功したものであるが、一方にはかういふ危機クリシスに臨んだ少年に對する教育家の無知を痛烈に諷刺し、冷嘲してゐる。中學校の教員會議の場の如きは皮肉を極めたものである。會議中一教師が起立して發言を求め、空氣の流通が悪いから窓を一つ開けて貰ひたいといふ動議を提出し、反對論や、修正論などが出て、結局校長が決を取るといふが如き、最も惡辣な筆法である。オットー・エルンストの「教育家としてのフラックスマン」などよりも餘程諷刺の筆が深刻である。

「骸骨踊」(Totentanz)といふ一幕物は性慾の讚美とその幻滅とを中心思想とし、妓樓の主人なる公爵「カステピアニ」といふ男は「誕生の苦、存在の苦、死苦を通じてかの唯一の明星が輝かなかつたならば自分は五十年前に自殺してゐたらう」と云つてゐるが、その「明星」とは何かといふと、即所謂「太陽のやうに輝き笑ふ官能の快樂」であつて、肉慾は地上唯一の濁らない、純な悦であるから人生の光明であり、天國の花である。この快樂が他の苦痛を償ふが故に彼は短銃を握らなかつたのである。ところが一人の受働的、顛倒性色情狂(Masochistin)とも云ふべき娼婦の告白に依ると、快

樂は燒石に一滴の水を注ぐやうに消えてしまふ。彼女は性慾の苛責に驅られてこの家に来たのである。彼女はあらゆる残酷な虐待、肉體的苦痛を與へて呉れと客に切願する。それに依て暫時性慾の悩みを忘れやうといふのである。これを聞いた娼樓の主人は自己の信念の破産を眼前に見せつけられて、あゝ肉慾も終に人間の虐使に過ぎないのか!と絶叫して自殺してしまふ。肉慾を宗教化するといふこと自身が既に滑稽であると共に、その悲劇的破裂も餘りに大袈裟で、悲壯といふよりも寧ろ奇怪な感<sup>グロテスク</sup>を與へるが、因襲的な結婚觀や、廢娼運動などに鋭い諷刺を沿ひせかけながら、忽ち矛を逆まにして自説の根底を衝き崩すところにヴェデキントの特色が現はれる。

「海山千年」(In allen Wassern gewaschen)の女主人公も肉慾崇拜者で、肉慾は太陽の如く彼女の世界觀の中心を形つくつてゐたが、偶々醫師の診斷に依ると彼女は元來病氣なので、彼女の誇とする鑿く無き性慾といふのは實は慢性消化不良の結果で彼女の武器たる男性を擧殺する眼中の潤<sup>ツミ</sup>みは肝臓病の結果だとわかる。彼女の世界觀は無殘に破壊せられたのである。

## 三

また一名「美的道德」と銘を打つた「ヒダラ」(Hidalga)といふ劇では「優良人種養成所」の秘書役「ヘトマン」は堂々と其主義なるものを説いてこんことを云ふ。美に對する渴望は世界苦克服の衝動と同様に神聖なる掟である。さて、一般道德の最高幸福は家族であるが、吾々は第一の犠牲として家族を要求する。美を財産、生命よりも重んずれば一段神に近づくのである云々。それから、所長は美人撰擇の權利を有し(一)黨員の間には結婚と家族とに關する一般の法律は破棄せられ、(二)嚴肅なる宣誓の下に相互に他の愛を斥ける權利を拋棄し、愛に於て凡ての女は凡ての男に、凡ての男は凡ての女に服従する。だから、自由戀愛では無くて、愛は權利であり、服従は義務である。之を拒む者は除名せられるのである。——かういふ主義規定の下に活動したヘトマンも六ヶ月間の入獄中に自分の二年間の勞作が根底から覆つたことを悟る。彼の考へは誤謬であつた。活動力と健康とが生目的となつてゐる處には自然に美が生れる。美は美しい花として咲き出で、その結ぶ美果は



更にまた活動力と健康との源となる。彼は收穫せずして收穫の祝ひをせよと説き家を建てずして上棟式を行へと勧めたのである。人間の一生を祝祭の連続としやうとした。この誤謬のために今彼の生活は労働者も堪へがたいほど美に貧弱なものとなつた。かういふ風に彼は主義宣傳の上に失敗したが、人に促されてまたある機會に自説を述べる。それは因襲的の蠻的生活の三形式といふので、人間が自分の感情を恐れ、自分に對して秘密を有つのは笑ふべき迷信で、巫女を焚き殺したり、鍊金術を學んだ頃の遺習である。性慾生活が隠蔽せられるのはそれが醜いためだといふのは賤民の妄想である。神や國君に對して眼を上げないやうに人は性慾に對して眼を外らすのである。性慾を醜惡とみる迷信からして三つの野蠻な生活の形式が生れる。第一に野獸の様に社會から驅逐せられる娼婦。第二に身心不具の宣告を受けて永久に愛情生活を失ふ老嬢。第三に最も利益ある結婚の爲めに保存せられる、所謂少女の純潔が是れである。自分はこの點に於て洞察の眼ある子女を促して美の國を建設しやうとしたが、その豫期は外れた。女子は道德上低い地位に立ち、美は唯目的に達する手段としてのみ認められる。

美そのものゝための美は女子にとつては一の嫌忌である。また、自分は特に青年をして現代人が「貧」を恐れるやうに「醜」を恐れしめやうとした。然しこれも失敗した。青年は唯生活の不測の深みから逆巻いて来る荒浪に對して出来るだけ早く安全な隠家に入らうと望んでゐる。自分は全然失敗した。然し敢て自分の運命を訴へない。唯「退屈」が恐ろしく嵩じて来るのを如何ともすることが出来ない。「ヘトマン」は盛んに市民の「醜」を罵つたが、誰も眞面目にとる者が無い、といふのは講演者自身が頗る醜男子だからである。のみならず、彼は狂人である、自分の狂氣を神の啓示として讚美する憐れな犠牲を慰みものにしやうとする惡魔であると罵られる。そして結局警官が出張して彼を精神病の醫師にみせ、その結果三個月間程の幽閉に處せられることになる。そして、最後に彼の處へ現はれるのが、フロックに高帽乗馬洋袴に、乗馬靴といふ扮装で鞭を手にしたメフィスト的の男で、これはある曲馬師であるが、ヘトマンを一座の道化役に雇ひ入れやうと云ふのである。それを聞いて思はず電氣に撲たれたやうに身を震はすと相手は手を拍つて、この身振りだけでも毎晩大喝采を博するに相違ないと云つて大喜びをする。へ

トマンが道化役としての自分の技能を疑ふと、いや、何わけは無いですよ。——道化役といふものは何にでも躓つまずいて矢鱈に倒れる、いつでも一足遅れる、自分より十倍も心得てる人々におせつかいに手傳はうとする、殊にですな、殊に何故見物が自分の事を笑ふのか丸で解わからない。だから貴下あなたは別に見習みまひも何もいらぬ！」と云ふ。結局一晩五百馬克といふので手を打つが、その男が歸つて行つた後で、トマンは首を縊つてしまふ。この結末の如きは作者一流の最も深刻な自嘲を發揮してゐる。

## 四

「人生此の如し」(So ist das Leben)では暴徒のために王位を篡奪せられたウムブリエンの國王が、もと屠肉屋の主人なる新王に、王位を棄て、我を認めなば赦されんと云はれ、また新王の子に王女を嫁せば養つてやらうと云はれたのを、それは釜中の鯉に魚たるをやめよと望むが如しと云つて、終に十五歳の王女を連れて、乞食になつて流浪する。この劇は廢王の數奇を極めた生涯を描いたものであるが王は

その生活に適當な唯一の態度として、自嘲を擇む。このまゝでは餘りに尊大で乞食にふさはしく無い、さりとて餘り慇懃にすると却て人の疑ひを招くであらうし、さうかと云つて唯質樸な謙遜的態度を取つていつたのでは世渡りが出来ない。自嘲をやるに限る。かくして後には琵琶を抱いて放浪の人となり、道化役者のやうなものになる。眞面目に「我は王なり」と云ふと見物はどつと笑ひ、滑稽の才があると喝采する。自分の經驗した悲惨な運命を熱心に物語ると、誇大妄想狂者を見るやうに見物は腹を抱へて笑ふ。乞食の服を纏つた眞正の王者は終に宮中御抱の道化役として終るのである。この悲喜劇的情調はかのエルンスト・ハルトの書いた「馬鹿のタントリス」(Tantris der Narr)と同様であるが、ヴェデキントの方は殊に自嘲の氣が人を刺すやうで、殆ど面を向けがたいやうな感と與へる。

「檢閲」(Die Zensur)はヴェテキントが自作「バンドラの筐」の發賣禁止事件に就て、自己の藝術的態度を辯疏したもので「辯神論」(Theodizee)と銘が打つてある。檢閲官は劇の主人公なる文士を罵つて「汝は惡魔の凱歌、歡樂の疫病の如くに我々の時代の上に來る。汝、刻薄なる人類の侮蔑者が、我々の住む國に憚るとは僞なり。既に

近頃も一人の若き男が汝の作物を一瞥したる後最も戦慄すべき死を遂げたり。汝がそれを一つの悲劇の材料に利用せざるが不思議なり」と云ふ。之に對して文士はその青年の死は家庭の事情から來たのだと云ひ、美と神聖とを再び融合して敬虔なる信仰の偶像とするのが自分の献身的努力の目的であると云ふ。すると官憲は、汝が讚美する美の神卓の上に汝は人の兒を屠るなり。汝が美とは曲馬なり、綱渡りなり、放蕩なり。汝の藝術は猛獸と人間との争闘なり、グラヂャトルの戦なり。未曾有の神の冒瀆なり」と云ふ。文士は、余は半生を藝術無くして暮らしぬ。されど宗教無しには一分も生き能はざりしならん」と應ずる。すると、汝の宗教とは教會と娼樓とを合併せんとするなり」と冷評せられる。この作はヴェデキントの自家辯護なると共に藝術家と官憲との相互的の無理解を比較的眞面目に描いたものであるが、果して彼の藝術的態度が彼の云ふが如く嚴肅なものであるか否やは少くとも其作物の上では疑問である。彼自身と雖も實はこの點に不安を懷いてゐることは次の作を見るとわかる。

「不思議な石」(Der Stein der Weisen)と云ふ劇は、伯林日報の一記者がヴェデキントの

議論を冷評して、憐むべき程批判力と社會的教化を缺き、その代りに異常の自惚を以て充たされた頭腦から出た言葉」と云つたのが動機となつて、半生の間社會から誤解せられたが、なほユーモアを失はず、また自己のユーモアの特性並に缺點に對して可なりに公平な批判をなすことの出来る文學者を示さうと企てたのである。これは作者の告白であるが、前述の如く劇の主人公なる魔法師は終に自分の使役してゐた「ユーモア」の放つ弩に中つて斃れる。ユーモアの歌は卑猥を極めたもので、只腹の皮を縫らせるだけの能力を有つてゐる。彼は *Nerchellschütler* であつて、眞面目な自分の態度を裏切るものである。このユーモアに魔法師は「不思議な石」を奪はれ、その矢の下に斃れる。この作は、矛を逆まにして自己を傷ける」といふ自嘲の本體を最も明瞭に具象化したものと云つて可い。

## 五

なほ、ヴェデキントの特色を發揮してゐる作としては、彼の「ファウスト」と呼ばれる「フランチスカ、五幕の神秘劇」といふ劇がある。これは結構がゲーテの「ファウス

トに似てゐるのでさう稱せられるのであるが、その中心思想は矢張宗教と肉慾とを結びつけやうとする努力と其失敗とに在る。

女フアウストなるフランチスカ(Franziska)は兩親の營んだ、理解の無い、争闘の絶えない「地獄」の「家庭」に對する恐怖を小さい時から經驗して、自由な世界に出て、「愛」を總ての種類、總ての強度に於て享樂し盡さうとする。メフィストに當る怪しい男クンツ(Kunz)は自ら「星を導く人」と云ふが、その意味は任意な人間を養成して藝術界の明星とし、全世界を連れ廻はつて諸星の光を奪はふといふのである。即一種の興業師兼音樂師である。なほこの男の自白に依ると彼は保險業者、奴隷賣買人、女術、外交家、道化役者、文學者、野師、強請者、結婚詐偽師、ボン引、惡徳記者、大道藝人等をやうて來た。フランチスカはこの男と一の契約を結ぶ。即、男は二年間全然女の奴隷となり、専ら音樂者としての教育を施し、彼女を一個の男子に仕立て、自由に人生の歡樂を味はせる、その代りに期限後は終生女を妻とし、戀人とし、奴隷とする。「妾がならうと思へば！」とフランチスカが云ふのに應じて、「ならざるをえない。自然の法則が命ずるのですと云ふ。この自信は後に脆くも碎けて絶望の餘

り自ら縊れるのであるが蘇生して敗殘の生を繋ぐことになる。これは惡魔に共通の運命で、この點は第一編の「惡魔」の項に詳しく述べてゐいた。

ゲエデキントの「フアウスト」には「魔女の厨」は無い。然し、若い、十八歳の女フアウストは更に若返へる必要は無いのである。その代りに彼女は男になつた。又「アウエルバハの窖」に相當するのは伯林の酒場「クララ」である。こゝは「文學者と娼婦」と、賤民と男爵と隣り合つて座り、肉を鬻ぐ者が知識を切賣するものを見下ろして微笑するところである。この夜の歡樂の一場は最も傑れてゐると評せられ、「フアウスト」の「鼠の歌」や「蚤の歌」に對して「筵棒の歌」(Dinnerwetter)といふ餘程變つたものが入つてゐる。又七階の屋根裏に住んで月桂冠を夢みる「文士の歌」は譏諷骨を刺すものがある。さて、グレエトヒエンは何處にゐるかと云ふと、ゾフィー(Sophie)といふ無邪氣な娘がそれで、男になりすましたフランチスカと結婚するのであるが、ゾフィーの悲劇は彼女が子を儲けたからでは無く、却て夫が懷妊した結果である。フランチスカはいつかクンツの種を宿したのである。ゾフィーは夫が變裝女子であることを知つて自殺してしまふ。こゝで、ゾフィーの悲劇は終りを告げ、フア

ウスト第二巻に移るのであるが、こゝはとある公爵家で、茲にフランチスカとクンツの兩人が劇中の劇を演ずることになる。この公爵はやはりヴェデキント宗の信者で夫人と別居して、寵妃を引き入れてゐる。夫人は世界を漫遊して日本へまで来る。この公爵の發議で、赤裸の愛の神聖なることを舞臺の上で公衆に説かうといふのである。

この邊から劇は漸々神秘、象徴の色を帯びて来る。劇中の劇の舞臺面は、かのチアンの名畫、天上の愛と地上の愛の畫面その儘を現するので、公爵の寵妃は腰のあたりに布片を纏うたばかりで、所謂赤裸の愛を表はし、フランチスカは衣を着けて、地上の愛を表はす。無邪氣な小兒は直覺的に神聖な、天上の愛、赤裸の愛を認めて、その前に跪くが、忽ち森林から兩頭蛇體の怪物が飛び出して二人の女性に吼えかゝる。一頭は豚で、一頭は犬である。こゝへ聖ゲオルグに扮した公爵が劍を持って現はれる怪物を退治するといふ趣向である。即、天上及地上の愛は姉妹の如きもので人間渴仰の中心となるべきであるのに、無知なる世間はかの豚犬兩頭の怪物のやうに牙を鳴らして迫害する。依て自分が聖ゲオルグになつて之を退治

するといふのである。

犬の頭は吼え哮つてフランチスカに迫りつゝ

「汝は淫猥、惡習、異端を器に盛つて

道德を毒し、犯罪に誘ひ、

羞恥と名譽とを失はしめやうとするのぢや——

いで喰はう！」

と云ふ。豚頭も亦「青年を毒し、善良の風俗を紊すと云つてギスリント(寵妃の名)に吼えかゝる。之に對して公爵の「ゲオルグ」は、苟も赤裸を見ることが出来ない者は眞理を聞くことが出来ぬ」と絶叫する。又、フランチスカの言葉に依ると、宗教の方で人間の赤裸の愛を嫌忌するのはそれが卑しいからでは無く、却て神聖犯すべからざるものであるから、その些細の冒瀆をも許さないのである。即、ヴェデキントの持説なる宗教と肉慾とを結び付けるといふことに歸着するのであるが、この世界觀は例に依て無殘に破壊せられる。即、公爵の「ゲオルグ」が惡龍と奮闘最中に公爵の使つてゐる警視總監が「ロック」に勳章着用といふ扮裝で現はれて演劇中

止を命令する。若し背けば公爵自身を拘引するといふ勢で、終に公爵も止むを得ず幕を下ろさせてしまふのである。例に依て作者の譏諷と自嘲の態度が強く出てゐる。

なほこの外にもう一つ劇中の劇が演ぜられる。神秘劇(Mysterium)と銘を打つたものである。その趣向は、基督が下界へ行つて過去の亡霊を解放する。救はれる霊の中にシムソン、ソクラテス、ベルゾイス、ヘレナ等がある。異端にして罪障の深いヘレナは今後二千年の中に救済せらるべき運命を荷つてゐる。然るに今直ちに救はる可きシムソンはヘレナに執着して彼女と一緒に死んで下界を去るまいと云ふ。ソクラテスが仲へ入つて説得し、終にシムソンは地獄の友ベルゾイスにヘレナを預けて、アダム、ノア、ソクラテス、プラトオン、アリストテレス等と共に基督に従つて美しき生に入るといふのである。基督の役はクンツが演じ、フランチスカはヘレナの役である。二千年後の救済は即かの契約年限の二箇年を暗示し、クンツはフランチスカに對して自ら救世主を以て任じてゐたのであるが、幕間にヘレナのフランチスカはシムソンの役を演ずる俳優の抱擁に逢つて、最高

の快樂を最も強烈なる肉慾に發見し、終に心はクンツから背き去るのである。されば舞臺で灰色の衣を纏つて凄愴陰鬱の悲歌を歌ふべき亡者の一群に扮した少女達はいつか髪を解き、虎豹の皮を腰に纏ひ、蕙や花の冠を戴いて樂器の響きにつれて、ものに憑かれたやうに踊り狂ふ。フランチスカは狂亂の姿で先頭に立つて最も熱烈に踊り廻る。よくイブセンなどの取扱ふ基督教と異端との葛藤が此處にも描かれてゐるやうに思はれる。そして「皇帝とガリレア人」中の「囚はれ人の行列」と「アポロの行列」とが想ひ出される。

然らばヘレナが基督に勝つたのであるか。強烈な官能の美を求める異端は終に犠牲的愛を生命とする基督教の精神を克服したのか。ゲエデキントの意の在るところは俄に知ることがたい。兎に角フランチスカは最後に善良なる一畫家に手を與へるのである。その畫家は「神の慈悲を信じ、世の中は世間の不吉鳥が繰り返すやうにそんなに悲惨にできてゐるものぢやありません」と云ひ「足ることを知れ」と説き、日々新しいものを求めないで、運命の與へるものを感謝して受けたならば、後悔に心を悩ますことはあるまい」と慰め、最後に「汝は愛せらるゝが故に榮え

あらん！」と云ふ。

この女ファウストはやはり「永久的女性」に依て救はれたのであらうか。新たに造らるべき「家庭」は天國であるか、或は彼女が兩親のを名づけたやうに「地獄」であるのか。全體が諷刺か眞面目か、遽かに定め難い。或は今迄ヴェデキントに缺けてゐると云はれた「愛」が新たに生れて來たのかも知れない。然し、それは畢竟彼が朝つてゐたハップトマン一派に降服することにはなるまいか。異端ヴェデキントは果して終に神の前に跪く心になつたのであらうか。

それはともかく、最後にもう一つ彼の作を紹介して置きたい。前の「劇中劇」にシムソンが出てゐるが、彼は比較的最近に「シムソン、一名羞恥と嫉妬 (Simson oder Scham und Eifersucht)」と云ふ三幕物を書いた。これは怪力を以て世界に知れ渡つた傳說的の勇士シムソンが妖婦デリラに譎弄せられて、終にその怪力の源泉たる髪を刈り取られ、兩眼を焼かれて盲目となり、野獸のやうに苦役に服すといふ悲惨な運命を描いたものである。そして盲目のシムソンが自分を賣つた妖婦に執着してどこまでも欺かれ、言語に絶えた屈辱をうけつゝも、なほ女の愛を生命として、苦役の

重い臼を挽きつゝ、悲しい、楽しい歌をうたふところに深刻な諷刺がある。最後に國王や、臣下や、人民の集まつた饗宴の場へ慰み者として引き出されるシムソンの姿は、「深く身を屈めて、跛足をひき、髯は地に觸れんばかりに生ひ下がり、一見畸形なる侏儒の如き印象を與へる」とある。デリラに踊りを所望せられて、石臼を挽いた疲労がとれるまで暫時の休息を許して呉れと云ひ、街學者に「シムソンよ、汝の堪へがたいその滑稽な様子の秘密は何處にあるのだ」と問はれて、「怪力に依て不滅に、運命に依て永久の物笑ひとなつた俺は、不滅でしかも笑はれながら、不滅に物笑ひとなるといふ呪咀を背負つて歩くのだ」と答へる。かの「美の道德」の鼓吹者なる「ヒダルラ」の主人公は「侏儒の巨人」と呼ばれるが、シムソンもやはり一の侏儒の巨人として描かれてゐる。そしてこの「自嘲」を具象化したやうな姿はやがて作者その人の俳を思はせる。ヴェデキントは一の Zwergriese である。

## 六

ヴェデキントの譏諷と自嘲とは最も露骨で、殆ど奇怪の感をさへ與へるが、イブ

センなどになると、その反語は極めて隱微の間に用ゐられ、讀者や看客は往々之に氣が附かない。その結果作の眞意を捕捉するのに苦しむことがある。然し仔細に觀察すると反語の深さと鋭さとに於ては遙にヴェデキント等を凌ぐものがあるのである。

例へば、人形の家を取つてみると、ノラの夫ヘルメルは一見したところでは立派な紳士であつて、理屈も分かり、潔癖で、虚偽を蛇蝎の如く忌み嫌ひ、又美的趣味も相應にある。之に反してノラは子供らしい偽言を吐き、偷食ひをし、平氣で私書偽造をやる。世間一般の常識で見たならば寧ろヘルメルに同情すべきであつて、最後にノラが家出をするなどは甚だしい心得違ひと云はねばならない。然し深く考へてみると所謂紳士たるヘルメルは根本的に虚偽なる生活を営み、徹頭徹尾己的の動機で動いて來たのである。その醜い本性は處々に暴露せられるが見物は氣がつかない、ノラすら餘程後まで氣がつかない。そこに作者の靈妙な技巧が作用してゐるのである。最後に至つてノラは倏忽に自覺し、夫の核心を洞察するが、それでも公衆はまだ解らずに呆氣に取られてゐる。茲にイブセンの大なる反語

が潜んでゐるのである。

かういふ似而非悞の常識一點張りの俗人を嘲つたものには、例へばチエホフの「燐寸」といふ短篇がある。ある若い探偵が一本の燐寸を現場から拾ひ上げて、それを手蔓に殺人犯の下手人を探り出すといふ筋で、殺されたといふのは飲だくれの放蕩な紳士で、死骸は窓から運び去られたものらしく、寢室内には靴が一足と燐寸が一本、銀貨と、銀時計といふやうな物が残つて居り、臥床の褥は格闘の痕を止めて、皺くちやになつてゐる。窓の下の草には足跡があつて、糸を引いたやうに血痕が庭の接骨木の叢まで續いて居り、そこに長靴の片方が發見せられた。尤も下男の云ふところに依るとその血痕は鶏を屠したのだといふことである。とにかく、かういふ現場の光景を見て若い探偵はその明晰な推理力をはたらかせて、犯罪の模様を眼に見るやうに説明する。窓の下から發見した藍色の綿毛から犯人の上衣の色合まで分つた。

けれども中々下手人は分らない。少くとも三四人でやつた犯罪らしく、已に二三の有力な嫌疑者は上つてゐるが、主謀者と云ふべきものがまだ出ない。そこで



若い探偵が智慧を絞つて、その土地では餘り使ふ人が無い、かの「瑞典製の燐寸」一本を手蔓にして苦心に苦心を重ねた末、終に犯人は女で然かも驚く可し、地方長官の若い夫人その人であるといふことを突き止める。この夫人は被害者に戀着してゐた、ところが被害者は他に情婦をこしらへた。即、嫉妬の殺人である。かう分つたから今は少しも猶豫すべきに非ずとあつて、若い探偵は上官を促して、夜中馬車で長官を訪れる。長官は留守で、夫人が莞爾に出迎へて用事を訊く、馬車の弾機が爆たのだと云ひ譯して中へ入り、さて突然被害者の名を云つて、何處にゐますかと詰問すると、若い夫人は俄かに眞蒼になつて、どうしてそれを？と震へながらさく。「證據はみんな上がつてゐますぞ」といふやうなことを云つて、被害者を何處に隠したかと迫ると、どうぞ後生ですから夫には秘密にして下さい」と拜ひやうにして、二人の探偵を案内する。奥庭の蒸風呂の中に隠してあるといふのである。蠟燭を點けて風呂場の二階へ上つてゆくと、その臥床の上に大きな羽毛枕をして動かない大きな男の體が横たはつてゐる。近寄つてみると、その體は幽かに軒をかいてゐた――

これから、この男の體がむく／＼と起き上がつて、伸びをして、唸れた、太い聲で、そこらを這ひ廻る奴は誰だ？と云ふのであるが、その時の若い探偵の顔はどうであつたらう！

女が男の薄情を怨んで、男の家へ呼び出しにゆき、掴み合ひの喧嘩をして、無理に自分の家へ引摺つて来て、蒸風呂へ押し籠め、夫の眼を忍んで食事などを運び、秘密の歡樂に耽つてゐたのであつた。

なほ、自嘲の方面も、イブセンの作中隨處に之を求めることが出来る。イブセンの書いたものゝ中で最も厭世的の作だと云はれてゐる「野鴨」の如きはその適例であつて、恰も詩人は自分の懷抱してゐる凡ての理想に對して絶望したかの觀がある。彼が畢生の努力なる虚偽の暴露と眞實の追求とはグレイゲルスの所謂「理想的要求」となつて、却て人の家庭に不幸を齎らす結果となる。「生活の虚偽」といふものは終に平凡人には缺く可らざるものなのである。おせつ、か、いに他人の生活の秘密を暴いて、その醜い「眞實」をさらけ出さうとするのは決して社會に幸福を與へるものではない。又イブセンの主張する、相互に充分理解し合つて、聊かも裏み隠

す事の無い理想的結婚といふものも、この作では老獺極まるヴェルレと淫蕩放縱の女執事との間の結婚となつて現はれてゐる。お互に相手の醜さを理解し合つてゐるのである。この他「犠牲」とか「孤獨」とか「太陽の憧憬」とかいふものも悉く反語的に用ゐられてゐる。この劇でイブセンは最も苦い、最も鋭い自嘲を用ゐてゐる。自分の「ユーモア」の矢に中つて斃れる魔法師とは全くその辛辣の度を異にしてゐる。ヴェデキントにあつては譏諷と自嘲の筆が極めて露骨で、譬へば棍棒を無暗に振り廻はすやうな態度であるが、イブセンのは凡てが反語的に用ゐられ、鋭利な解剖刀を執つて自分の生身を寸々に切り刻むやうな趣がある。

自嘲的人物をイブセンの作に求めれば多数にあるが、例へば「ロスマルホルム」の中のウルリヒ・ブレンデル (Ulrich Brendel) の如きは其著しき例である。彼は一個の敗残者として、自己の理想の破産者として現はれ、自分に對して苦い自嘲を浴せかけるが、この人物の蔭にはやはりイブセンの姿が潜んでゐるのである。また「ホルクマン」とその老友フォルダール (Foldal) との對照にも作者の苦い自嘲を味はふことができる。

## 七

譏諷と自嘲とは「滑稽」の主要素たる「自己優越感」の作用であつて、自嘲は一方に自我を卑小にし、自我を破壊して快とするものであるが、その分裂した自我の一方が他の一方を見下して、冷笑つてゐる限り、やはり一種の「自己優越感」がはたらいてゐるものと見なければならぬ。かの獨逸浪漫派の特色となつてゐる「イロニー」(Ironie) といふものも矢張この優越感から來る譏諷と自嘲とに外ならない。當時浪漫派はあらゆる形式、あらゆる法則を無視して、詩的空想の奔放に任す可しといふ主張から、自己を作品の中に没入することは一種の束縛であり、囚はれたやり方であるとして、思ひ切り自作に對して客觀的態度を取らうとした。それにはまたフイヒテの「自我」の哲學なども據り處となつて、自我は非我に對して絶對の權威を持つが故に、自己の作品なりとも、之を客觀視して、思ひの儘に破壊することが許されるし、またそこまで行つて始めて眞の藝術的自由に到達するのであると考へた。それであるから、作の中へ讀者を引張り込んで議論をさせたり、作者が顔を出して

ものを云つたりする位は常套手段で、甚だしきに至ると作物自身に口をきかせ、作物が作物を嘲弄し、批難するといふやうな事まで敢てした。ヘーゲルは浪漫派の「イロニー」を評してかう云つたさうである。「對象の意識的の破毀で、事物に即せず、神のやうに厚顔しく批評し、判決することである」と。この對象に即せぬところが即「自己優越感」の作用であつて、事物に没入せず、冷かに鳥瞰視するところに「イロニー」の本體が在る。この事は猶後に詳論する筈であるが、浪漫派の詩人テイク、ハイネ、ブレンタノ、ホフマン等の作品にこの「イロニー」は著しく現はれてゐる。ハイネの譏諷は有名であつて、その祖國を罵つた點で屢々非難せられるが、イロニーの鋭さを示す一例として「ハルツ紀行」から一節を抜く。ゲツチンゲンの婦人を擲擲した文で、ハイネの諷刺的及肉感的傾向を遺憾無く現はしてゐる。

「私はその深遠な論文で(第一)に總じて、足を論じ、(第二)に古代人の足を、(第三)に象の足を、(第四)にゲツチンゲンの婦人の足を論じ、(第五)に「ウルリヒスガルテン」で婦人連の足について噂された事を綜合し、(第六)にこれ等の足の關係を觀察し、この機會を利用して更に胼、膝等に及ぼし、最後に(第七)萬一そんな大判の紙を手に入

れることが出来たら、附録としてゲツチンゲンの淑女達の足の模寫を二三葉銅版にして添へやう。……」

さて、この節に論じた「譏諷と自嘲」とは前述の如く「自己優越感」を基礎とするものであり、又、殊にヴェデキントやイブセン等の場合にあつては、その譏諷の態度は社會的革命的であつて、「笑」を「社會的矯正」の具に用ひ、所謂「懲罰的の笑」をなしてゐる限りに於て、積極的活動的と稱する事が出来ると思ふが、次に、同じく譏諷と自嘲ではあるが、一層消極的、傍觀的、觀照的、或は藝術的と云つても可からうと思ふが、とにかく積極的に社會の缺點を嘲り、懲らすといふ態度では無く、さういふ背理に充ちた社會から離れて、側面から、或は下層から、時としては又上方から觀照して獨り冷かな笑を洩らし、或はさういふ傍觀者たる自分を嘲るといふ様な種類のものがあり得る。即、傍觀的、觀照的態度であるが、かういふ態度を取る者には、積極的の笑罵から生れる情熱が缺けてゐるために、そこに一味の「寂し味」が附いて来る。そして、この寂寥の感、孤獨の意識から、一種の憧憬が生れる。一種の「人懐かしさの感」と云つたやうなものが湧き出る。即、ヘーゲルの云ふところの「事物に即せず」といふ態度

を保ちかねて、對境に近寄りたくなり、對象に没入したくなる。一言すれば、同感の欲求が起つて來るのである。

私はこの態度を説明するために、トウマス・マンの作品を紹介することにした。

## 二 人生の傍觀者

人生の傍觀者と云ふ意味は活動しつゝある人生、即普通云ふ社會から離れて立ち若しくは社會から齒せられないやうな人々を意味するのである。通俗の意味で云ふ生産的で無い人間、遊民、浮浪者、劣敗者なども入るが、假令社會上相當の地位を占めてゐても社會の活動の中心から遠ざかつてゐる人々、即社交界から無視せられてゐる人も含んでゐる。更に多少社交界から認められてゐても精神的には相容れることが出來ないやうな人も傍觀者の仲間に入る。要するに活社會から排斥せられたもの、そこを逃れて來たもの、そこから意識的に離れて立つてゐる者

を云ふのである。かういふ傍觀者も無論廣い意味の人生の一員であるから、所謂社會といふものと全然交渉を絶つことはできない。交渉はありながら然かも水面に浮ぶ油のやうに永久に融け合ふことができない。こゝに傍觀者の悲哀があり又憧憬がある。即ち「人生」とか又は「市民」(Bourgeois, Bürger)とか「民衆」或は「群衆」(Volk, Masse)とかいふものに對する反抗、侮蔑、憎惡、愛着、憧憬等の念が常にこれ等の傍觀者の胸に潜んでゐるのである。この事は殊に藝術に身を委ねるもの、誰でも感ずるところであるが、トオマス・マンの小説を讀むと不思議に深く、鋭く、痛切にこの問題を考へさせられる。トオマス・マンは兄のハインリヒと共に現代獨逸文壇の青年作家の双壁と稱せられてゐる。彼には出世作「ブデンブルク家」(Buddenbrooks) 及「殿下」(Königliche Hoheit)等の長篇小説があるが、私は彼の短篇小説集「小さなフリーデマン君」(Der kleine Herr Friedemann) 及「トリスタン」(Tristan)に就て前の問題を考へてみやうと思ふのである。この二集中の小説は殆ど皆「傍觀者」を取扱つてあり、又疑も無く、一個の傍觀者の書いたものだといふことが首肯せられる。胸に喰ひ入るやうな傍觀者の寂寥と、明るい、温かい人生に對する侮蔑と憧憬とがどの

篇にも漂うてゐる。作者はリュベックの生れで父からは北方の嚴肅な沈鬱に傾くやうな氣質を傳へられたが、音樂を嗜むブラジル産れの母からは熱い、空想的の血を受けたのである。恐らくは猶太人の血も混つてゐるのだらうと云ふ。さすれば人生を忌避するやうな暗い気分と、明るく光を欲する憧れとが彼の胸に潜んでゐるのも怪しむに足りない。

彼の小説に現はれたる傍觀者の中にはかの「小さいフリーデマン君」のやうに乳母の不注意で生れもつかぬ不具者になつた蒼白い顔の尙僕もある。又は「幸福を求むる意志」(Der Wille zum Glück)のみで生きてゐる心臟病者もある。又は萬事を誇張する教育法の犠牲となつて現實から常に「失望」(Enttäuschung)のみを興へられる永久の放浪者もある。又は少年のとき父から「道化役者」(Der Bajazzo)と呼ばれたのが圖らずも一生を支配する呪咀となつて、求むる幸福から益々遠ざかつてゆく藝術家もある。又はわづかに古い「フロックと尻尾の下つた舊式の絹帽」とに市民生活の名残を止めやうと努めつゝ、童蒙の笑を買つてとぼく／＼と街を忍び歩く鰥夫の「トビアス・ミンデルニッケル」(Tobias Mindernickel)や「墓道」(Der Weg zum Friedhof)

の主人公がある。トビアスは一疋の獵犬を買つて來て、人生が彼に拒んだ凡てのものをこの憐れな動物から取り戻さうとして、終には思ひのまゝにならぬ怒りの餘りに愛犬を刺し殺し、その痛ましい、自分と同じく無力な不幸な「人生」の屍の前に聲を放つて泣き、墓道の主人公は先き立つた妻子の墓參にゆく道すがら、墓道に自轉車を乗り入れる「人生」に似た元氣な青年と格闘して終に憤死して仕舞ふ。更に又妖艶にして残酷な若い妻の歌ふ戯れ唄と、その情人の奏する音樂に合はせて會衆の面前でその病的に肥満した體軀を動かし、醜怪な顔に粉黛を施し、少女の彩衣を纏つて「ルイス・ヒェン」(Luise Hen)の一曲を舞ひ、舞半ばにして始めて彼等の辛辣な侮辱を悟り、忽ち顛倒して悶死する不幸な法律家もある。そして「飢をたる人々」(Die Hungernden)の主人公は正に作者自身の倂である。「鐵道事故」(Das Eisenbahn-  
-Unfall)では人生の勝利者の如き紳士が一旦思ひがけぬ事故に遭遇して俄かに狼狽し、屏息する様を冷かな笑を含んで眺める文學者がゐる。病院に隠れた敗殘の詩人は「トリスタン」(Tristan)の一曲に依て「人生」の手から「美」を奪ひ取るが、「美」はその爲めに紅血を吐して果敢なく消え、時處を超越した「箏笛」(Der Kleiderschrank)の主人公はあ

る夜ある街外れのある古家の二階で始めて筆筒の中に立つ赤裸の少女に遭ひ、夜毎にその口から悲しい人生の話を聴く。「Gladius Dei, super terram……」と神罰を説いて美術商の窓から不敬虔な聖母の像を撤せしめようと息巻く一書生は人生の暴力の化身とも云ふべき荷造人の爲めに苦も無く街道に突き出されて仕舞ふ。而て「藝術家」と「市民」との矛盾に悩む「トニオ・クレゲル」(Tonio Kröger)は正に作者その人に外ならない。さてこれ等の傍観者に對する「人生」の象徴ともいふべき者を見ると、それは青い眼をした男や、紅い唇を有つた帯褐色の女で、多くは尊大で又残忍である。吸ひ寄せられるやうに燈火を望んで飛んで來る夏の蟲にも比すべき憐れな傍観者は、人生の熱い無慈悲な焰に翅を焼かれ身を焦して斃れるのである。

## 二

たとへば、小さきフリーデマン君の運命はどうであつたか。飲酒癖のある乳母の不注意から生後一箇月ばかりで生れもつかぬ尙儂となり、ひたすら静かな享樂の生活を送つてゐた彼は、ふと新任中尉の夫人を見るに及んで忽ち心の平靜を失

ひ、怪しい思ひに悶え苦しむ身となる。茶褐色の眼をしたその美しい夫人は、憐れむやうな又嘲るやうな残忍な謎のやうな態度で彼の心を責め苛む。

「いつからさういふ御不自由な御身體にお成なさいました？ 御生得なのですか？」

彼は咽喉を締められるやうな心地がして、唾を飲み込んだ。

「いえ子供の時に床の上へ落されたのです。それが原因です。」

「して幾歳におなりですか？」

「三十歳になります。」

「三十歳に？」と彼女は繰返へして

「この三十年間といふもの嘘御不幸でしたらうね。」

フリーデマン君は頭を振つた。唇がブルブル震へる。

「いや不幸だつたといふのは虚偽です、想像です。」

「では幸福だと御考へになつたのですか？」

「私はさう考へやうと試みました。」

「それは雄々しい御心がけです。」

一分ばかり経つた。唯蟋蟀の啼く音ばかりして、二人の後ろの樹の間に幽かな葉擦れの音がする。

「妾も少しばかり不幸といふことが解るので御座いますよ。それには水際のかういふ夏の夜が一番よう御座いますのね。」

哀れなフリーデマン君はもう堪へられなくなつて、女の両手を執り、慄へながらその小さな體を女の足下に抛げて、顔を女の膝に埋めて、そして喘ぐやうに

「あなたは御存じです……もう許して下さい……私はもう堪へられせん……」と云ふ。すると今までぢつと動かずに胸を反らして座つてゐた女は突然身を動かして高慢げな短かい嘲笑を漏らしながら振り解き、男の片膝をつかまへて側へ押し倒し、立ち上つて並木道の方へ姿を隠して仕舞ふ。水際に倒れた男は女から犬のやうに取り扱はれて、憤怒と慚愧とに胸は燃えるやうになり、自分といふものに對する嫌厭の念に打ち勝たれて其儘身をずらして水の中に音も無く沈んで仕舞ふ。水の跳ね上がる音で蟋蟀の啼く音は一しきり途絶えたが、また唧々と啼き續けて、廣庭には囁くやうな風の音が聞こえ、永い並木道を抑へたやうな笑聲が

響いて來た。——嘲笑を唇に浮べた高慢な美しい女の前に犬の様に轉がされた蒼白い佝僂の男、それは人生に散々弄ばれて揚句の果に突き放された敗殘者の姿で無くて何であらう？

「ルイスヒエン」の主人公が醜怪な偉軀を血のやうな紅い少女の服に包み、不貞の妻とその情人の唱歌と音楽とにつれて、卑俗な舞踏をする悲喜劇的光景も深刻に人生のアイロニーを具象化したものである。彼は舞踏半ばでふと若い二人と、聲を吞んで見物する會衆とを見比べ、電氣に打たれたやうにこの場の恐ろしい意味を悟る。その刹那満身の血は逆流して、彼の巨軀は床板も震動する程の勢で顛倒し、その儘息が絶える。かくてこゝにも吾々は人生に弄殺せられた敗殘者の屍を見るのである。妻子の墓詣りの途中で自轉車乗と格闘する「墓道」の主人公なる大酒飲みのビーブザムも同じく一の黒い塊のやうになつて物好きの見物人の中に倒れ、竈へ麵麩でも押し込むやうに無造作に衛生局の赤十字馬車に抛り込まれて運び去られる。彼が勝ち誇つて走り去つた「人生」の後ろから上げる絶叫には劣敗者の反抗と憎惡と羞耻と絶望とが籠つてゐる。





色の敗残者の姿を認めることができるのである。

「幸福を求むる意志の主人公のことを思ふと私はどこかで見た『死の接吻』といふ彫像を眼の前に思ひ浮べる。それはスフィンクスと接吻してゐる男の像である。唇が甘い接吻を交はす間に女面獅子の鋭い爪は男の心臓を深く刺し貫いてゐる。パオロ・ホーフマンの運命もそれに似てゐる。彼は重い心臓病に罹りながら一少女を戀ふる力にのみ生き、少女も亦彼を措いて他へ嫁することを拒み、多年流離の後二人は終に宿望を果して結婚の式を擧げる。然しその夜が明けぬ中に男は冷たい屍と變つて仕舞ふのである。あの肉食獸が餌に飛び懸からうとするやうな様子で女を眺める病的の男は人生といふスフィンクスに抱かれて、その甘い唇を吸ひつゝ死ぬる宿命を持つて生れて來たので、女も亦この哀れな犠牲と離れない宿命を擔つてゐる。即この篇は人生との恐ろしい惡因縁を描いたものと見られるのである。

## 三

次には狭い意味で云ふ傍觀者が來る。これは自己或は社會の罪又は先天的の缺陷のために人生から壓迫せられ、又は驅逐せられた劣敗者又は敗残者とは少し趣を異にする。自己の性情が自ら「民衆」又は「群衆」との調和を缺き、孤獨の位置に立たせるのである。人生の下に壓せられるのでは無くて寧ろ超然としてその上に出で、上から人生を俯瞰するのである。或は少くとも人生の活動中心から外へ出て側面から人生を眺めてゐる人々である。思索家、藝術家の多くは之に屬する。自他を客觀的對象として考察し又は觀照する者は勢ひ傍觀者の地位に立つのである。人生の真相を洞察しやうとするものは又人生を味はねばならない。享樂の無い觀照は空虚である。然しながら又享樂に没頭してゐる間は哲學や藝術は生れない。享樂の醉が覺めて觀照の眼が開くとき始めて事物の實相が明瞭に映じ來るのである。従て思想家や藝術家の生活は何等かの形に於ける享樂と觀照との錯綜で無ければならない。然るに人は常にこの兩界に平等に住むことは不可能である。官能の喜びに耽る者はいつか觀照の世界を忘れ、永く觀照界に住む者は單なる官能の快に満足し難くなり、常に強い刺戟を求めつゝ終には官能の麻

痺官能の嘔吐を招き、果ては一轉して禁慾者の境遇に入る。傍觀者として生れたものは享樂の中にも常に覺めてゐる。甘い人生の味を充分味はふ事が出来ない。温かい人生の光に充分浴することが出来ない。常に冷かな理知の泉に飲み、薄暗い思索の道を歩まねばならぬ。これが傍觀者の呪咀である。人生の冷い、暗い小徑から足を爪立てて、明るい、温かい、平凡な無邪氣な、群衆を眺める人々の眼には熱い涙が宿り、その唇には冷かな微笑が浮んでゐる。これが傍觀者の悲哀と憧憬である。全く人生の上に超然として儼然たる自己の世界に安住しうる哲人か、或は全然感情の泉が涸れて冷靜枯淡な科學者の態度を取りうる者で無くては悲哀と憧憬から免れることは出来ない。苟も自嘲の念が胸裡に萌すときその人は最も深刻に傍觀者の苦痛を味はねばならない。トオマス・マンは正にその一人である。そして彼の描いた「トリスタン」、「トニオ・クレゲル」、「道化役者」、「飢えたる人々」の主人公は畢竟作者それ自身に外ならない。

私は又かの一見奇怪を極めた「箏筒」といふ物語に於ても傍觀者と人生との交渉が象徴的に描かれてゐるやうに思ふ。時計も暦も持たぬ、時と場處とに超越した

アルブレヒトといふ、もう幾個月を數へる命の、若い男が、まづ秋らしいある月の夜伯林からフロレンスへ行く夜行汽車の中で睡眠からよと覺めて名も知らぬある街で下車し、その街外れのある古家で魔法使のやうな老婆に遇ひ、その荒れ果てた貸間に落ち着いたが、眞夜中にふと箏筒の中を見ると片腕をあげ、金髪を若々しい兩肩に垂れた眞裸の少女が立つてゐた。この少女から彼は毎夜々々悲しい物語を聞いた。大抵は相愛する男女が甘い接吻を交はす時一方が刃の廣い短劍を相手の胸に突き通すといふやうな話であつた。男は美しい裸體の少女を眺めつゝ時々血が湧き上り我を忘れて手を少女の方へ延ばすこともあつた。少女は敢て拒まうともしなかつた。然しさういふことのあつた後幾晩といふものは姿を見せなかつた。しばらくしてまた現はれてもなほ幾晩かは口を緘ぢて語らなかつた、それからやう／＼又徐かに悲しい物語を始めた。かくして男が再び我を忘れるまでは語り續けた。——これは夜汽車の夢だつたかも知れぬ。夢か事實か誰か知らう、又何の知る必要があらう、この男の命も長いことは無いのであると作者は結んでゐる。私も亦この物語を一々茲に解剖して説明を試みる必要は無いや

うに思ふ。

「トリスタン」の主人公スピネルは多少腦がわるい文學者で病院に閉ぢ籠つてゐたが、ある日人生の勝利者とも云ふ可き實業家が肺を病む美しい夫人をその病院に連れて來たのを見てから、彼の心はこの蒼白い夫人に對する渴仰の念とその夫なる男に對する憎惡とに燃える。卑しい物質界から自分の住む美の世界へその美しい人を取り戻さうといふのである。その金髪の上に美の王冠が輝いたのを幻に描くことができるやうな美しい少女をこの一個の俗人が無理に物質界に引き摺り込んだ。そこで若い夫人は健康無比の子供を生んだ。この子の爲に彼女は若い血と活力の凡てを犠牲にしたのである。スピネルは肥りかへつた夫と活氣に溢れた子供の姿を見ると身の内が慄へる程腹が立つた。彼は心からその子と、その父と、野卑な、嗤ふべき、而も勝ち誇つた「人生」を憎んだ。「美」の永久の反對者にして死敵なる「人生」を憎んだ。而もスピネルは畢竟弱者である。彼の面前にその實業家が立ち、彼の無禮な書面を突き付けて詰問すると、彼は只當惑、狼狽して譴責を受けた子供のやうにそこに立つてゐるのみだ。極端な罵詈を浴せられても一

言の返答も出來ぬ。彼は只言葉の上の勇者で實行上の怯者である。只彼はせめては夫人の最後を淨めんがために彼女を美神の接吻の下に逝かせた。即彼は醫員や他の患者等が權遊びに出た隙を見て病夫人にピアノの彈奏を強ひ、トリスタンの一曲に多年の渴望を癒したが夫人はその爲めに發熱して間もなく死んで仕舞ふ。敗北者たる彼は然し終に欲するものを取り戻しえたのである。よし屍となつても兎も角「人生」の冒瀆の手から美しい犠牲を奪ひ返へしたのである。

「道化役者」には主として傍觀者の自嘲の方面が強く出てゐる。そして「トニオ・クレゲル」及「飢えたる人々」の中には傍觀者の絶望的の憧憬が最も著しく現はれてゐる。彼等の胸中には「人生」と「藝術」と「藝術家」と「人間」とが常に闘つてゐる。藝術家は如何に變装しても、覆面しても、眼の色や唇を洩れる一言で直ぐ「人間」で無いことを看破せられる。一種見慣れぬ、訝かしい、變つたものとして映る。彼等空想的の傍觀者、人生の廢嫡者は到る處に疎外の氷の様な冷たい空氣を伴ふ。智識と怯懦の烙印を捺した蒼白い顔が現はれると世間の人々は恐れ憚る様な敬遠の態度を取り、成る可くその傍から離れ、そつと一人にして置かうと力める。人生の幽靈が

その窪んだ眼で世の歡樂を妨げることを恐れるのである。「汝は存在してはならぬ、觀照すべきである。汝は生きてはならぬ、作らなければならぬ。汝は愛することを許されぬ、知らなければならぬ。」これが藝術家の宿命である。彼等は實に「人間」として感じ、味ひ、生きることが出來ぬばかりで無く、又許されないのである。何故なれば温かい、切なる感情は常に平俗な、無用なものである。唯糜爛した鋭敏な神經組織の興奮と冷かな恍惚のみが藝術的である。藝術家たるには何等か非人間的のものを要する。文章、技巧、表現の才能は結局この一般人間に對する冷かな、撰擇的の關係に歸し、一種人としての貧弱、枯淡を前提とするものである。健全な強固な感情の如きは斷じて無價值である。藝術家が人間になり、人間の感じを懷くや否やその藝術家は失はれたものである。然しながら——噫然しながら、彼等の胸には身を喰ふやうな憧憬が潜んでゐる。無邪氣な、單純な、生きた物に對する止み難い憧憬が潜んでゐる。少許の友愛と献身と信頼と人間の幸福とを求むる念が隠れてゐる。彼等は決して「失望」の主人公が求むるやうな異常な、偉大な、絶美な人生を描いてそれに憧がれるのでは無い。彼等は自分が排斥せられたその

平凡な、しかも誘惑的の人生を愛するのである。精神や藝術と永久に對立するその平俗な人生を愛するのである。平凡の愉樂(Die Wonne der Gewöhnlichkeit)に對する熾かれるやうな、身を喰はれるやうな憧憬を彼等は如何ともすることが出來ない。彼等は、飢えたる人々である。デイトレーフがかういふ痛ましい思ひを胸に抱いて劇場を出て馬車に乗らうとすると、一人の頬の殺けた眼の落ち窪んだ乞食が薄暗がりに立つてゐて嘲笑を帯びた探るやうな、貪るやうな眼つきで彼の姿を隈なく見まはしたが、やがて寒さにぶる／＼と身を震はせた。すると頬は一層落ち込み、眼瞼は慄へながら閉ぢ、口端は醜く又悲しく引き下がった。この敗殘者の眼は何を語つたらう？ 彼はデイトレーフの幸福さうな外貌を見て非難と嘲笑の心を知らせやうがために其處に立つてゐたのでは無いか。この飢えた劣敗者は貪慾と憤怒とを以て、嫉妬と憧憬との集まつた強い侮蔑とを以て彼を眺めたのではないか。それは然し大なる誤謬である。彼はその的を誤つた。デイトレーフは幸福な人では無くて乞食の仲間である。同じく飢えたる人である。「仲間よ、こゝがこの胸の上のところ、が苦しいか。焼けるやうにあるか。俺はよく知つてゐる

ぞ！なぜ又お前は此處へ來たんだ？なぜ意地づくでも暗闇に止まらずに、後ろで音楽や人生の笑ひ聲が響くこの明るい窓の下へ立つてゐたのか。その理由も俺は知らないと思ふのか。お前をそこへ引張つて來て、愛とも憎みとも云へるお前のその苦患を一層増させるやうにする、その病的な願ひを俺が知らないと思ふのか。藝術家は乞食と同じ苦患の道連れであつた。同じ傍觀者の群に入つてゐた。同じく飢えたる人々であつたのだ。

## 四

この藝術家の苦悶を描いたものにはなほマンの近來の傑作と云はれる「ヴェニスに於ける死」(Der Tod in Venedig)がある。これは恐ろしい疫病と、肉も魂も憔悴させるやうな熱風とに苦んでゐる水の都である名譽ある詩人が畫に見るやうな美少年の姿に怪しく心を捉へられて、終に不思議の死を遂げるといふ物語で、主人公が美を求める藝術家だけに極めて複雑な心理解剖が試られてゐる。

苦しい努力で贏ち得た文壇の地位も、社會上の特權もこの孤獨な詩人の心を満

足せしめることは出來なかつた。ゴンドラの快い動搖に身を任かせて波の運ぶ儘に何處までも漂ひたいやうな彼の心であつた。この心が終に禍なる美の幻影に捉へられて破滅の淵へ沈んでゆくまでの経路は讀者の心に戦慄を傳へなくてはゐかない。二度までも彼をして病み疲れしめた毒を包む瘴氣に侵されたやうな水の都の不健全な美は抵抗す可らざる魔力で彼を引き寄せる。市の衰頽を懼れて印度から傳はつた疫病の蔓延を姑息の手段で隠蔽しやうと努めても、熱風に交る消毒劑の惡臭は日に月に旅客の嗅覺を刺戟して止まないのである。彼も終には危険を悟つて、この毒せられた都を去らうとするが、不思議な執着はこの孤獨の旅客の眼に熱い哀別の涙を浮ばせる。彼の眼前には毒を含む妖姬のやうな水都の姿と、その灰色の海の水平線の單調を破つて少女の様な媚やかな身を比ひ無く美しい曲線にくづして、嫣然と微笑む波蘭士の貴公子の姿とがある。この十四五歳とも覺しき、柔かい房々した髪と希臘美の理想に近い端麗な容貌を備へた少年は美に飢えた詩人の心の渴仰の對象となる。そしてこの敬虔なダンテの愛の様な静かな憧れは何時か怪しい不純な慾望に變つて、老境に近づきつゝある

詩人はかつて戦慄の眼を以て汽船中に眺めた、化粧した老人の奇怪な、不快極まる姿に不知不識近づいて来る。五十歳を越えた男が香料を用ひ、寶石を飾り、クリイムを塗つて皺を延ばし、唇を染め、紅い襟飾を着け、華やかな色のバンドを闊廣の麥稈帽に纏はせた姿は自然の不可抗力に對する人間の憐れな無益な努力を示す深刻な反語である。かくして秘密な沈黙の中に夜な、夜な幾拾幾百と云ふ死體を避病院の死亡室から運び出しつゝある、蒸暑い、息苦しい、悪臭の充ち満ちた水都の狭い小路を物の蔭に身を潜めながら、いづこまでもと少年の姿を追うて行くのである。かくて獨逸文壇に盛名を馳せ、貴族に列せられた詩人は日々憔悴困憊して、或はワルブルギスの夜の怪夢に襲はれ、或は白晝鏡裡に映る淺ましい自己の姿に戦慄しつゝ、終に海濱に不測の死を遂げるのである。觀照の世界に安住し得ずして享樂の園の果實を味はんとし、忽ち其毒に中つて斃れた傍觀者の運命とも觀られる。

なほこの作で注意すべきは、作者が好んで取扱ふ、道化役者の自嘲的態度の深刻なる描寫である。それは流浪の大道音樂師で、瘦せ細つた蒼褪めた顔をして、無髯

の唇邊に嘲笑を漲らせ、喉佛の著しく飛び出した頭をぬつと延ばして、通り魔のやうに現はれる。彼の「笑の反唱」(Lach-Refrain)は人の腸を抉る鋭さを持つた、物凄いまで病的な、狂氣染みたまものである。彼は筋肉を緊張させ、脇腹を抱へ、手を拍ち、足を摺り、蛇の様に體を捻ぢ曲げて、咽喉の裂けるまで、涙の流れ出るまで、殆ど悶絶する迄笑つて笑つて笑つて笑ひ抜くのである。天を笑ひ、地を笑ひ、山川草木を笑ひ、鳥獸魚鼈を笑ひ、自己と共に笑ふ聽衆を笑ひ、更に笑ふ聽衆を笑ふ自己をも笑ふのである。帽を持って小腰を屈めながら僅の報酬を集めつゝあつた彼はやがて一行と共に立ち去るが、其際態と一人遅れて、後向きに歩きながら、故らに街燈の柱に衝突ぶつつて、痛さうに顔を擧めて見せ、跛足を曳きつゝ辛うじて門に達する。門を出るや忽然として身を起こし、滑稽諷刺を装つた容貌は厚顔老獺の表情に變つて、遙かに紅の舌を聽衆に示して夕闇に消えるのである。この道化役者の描寫はこの種類の諸藝人、落語家、幫間、野師等の心理状態を極めて鮮明に描き出したものだと思ふ。

## 五

さてこれ等の「傍観者」これ等の「飢えたる人々」はどうなるのであらうか。一生反抗と侮蔑と愛着と憧憬との間を彷徨して終るのであらうか。「傍観者」といふ呪ひの烙印は永久に彼等の額から消えないのであらうか。

「飢えたる人々」の主人公デイトレーフが家に歸つて静かな書齋に獨り坐つたとき「子供等よ、爾曹互に愛せよ」といふ慈悲深い言葉が彼の心を動かした。實にかの平凡な人生を愛する心は即この大なる愛とその源を同じうするのではないか。この「市民」に對する愛こそは文學者 (Literary) を詩人 (Poet) にする力を有つてゐる唯一のものでは無いか。凡ての温味、凡ての仁惠、凡てのフモール (Humor) はこの愛から來る。この愛こそは、これ無きものは、鳴銅や響く鉞の如し」と聖書にある、あの大きな愛でなければならぬ。

私は最後にこの愛を認めたところにトーマス・マンの詩人としての特性が在ると思ふ。マンはその繊細な筆と鋭利なアイロニーとから見て英のサッカルレに比せられ、一般に英文脈があると認められ、又一方に愛と情味とを缺くといふ非難もあるが、然し彼が「愛せん」として愛しえざる苦惱を痛切に味はつてゐることは到底見

遁することができない。そしてこれがサッカルレと異なる重要な點だと思はれる。サッカルレは「笑」に就て次の様に云つてゐる。

「——かの信なく、希望なく、慈悲なきの徒、あゝした輩に對しては、諸子、もう精一杯痛棒をくらはさにやならない。世にはまた欺瞞者や、愚劣漢の輩がある、然かも、彼等も相應に成功してゐる。かうした輩を暴露してやつて、思ひさま彼等と戦ふやうに、抑も世に「笑」といふものは出來てゐるのに違ひはあるまい。」(平田

「虚榮の市」上巻  
一五九頁参照)

サッカルレにも「愛」が無いとは云は無い。「虚榮の市」の中でもドッピン中佐の如きはユーモアを以て描かれてゐるが、茲に引用した様に彼の「笑」の取扱方は、懲罰的であつて、ヴェデキントやイブセンの「笑」と同様である。殊にサッカルレには獨逸浪漫派に通有の遊戯的傾向が認められる。

さて「愛」の閃きはマンのみに特有の現象では無く、あれほど強烈な個人主義を標榜してゐたイブセン自身も、小さきアイヨルフに於ては那威の國旗を高く掲げて祖國に和解の意を表し、「濱の子等」の養育に餘生を捧げやうと決心するアルメルス

夫婦に於て博愛的思想と犠牲的精神とを暗示してゐる。一般にイブセンは現代に對して厭世的態度を取つてゐるが、未來に於ける眞理の勝利を確信する點に於ては大なる樂天主義者だと評せられてゐる。またかの異端ウエデキントでさへも「フランチスカ」及他の二三の作で「愛」の閃きを示してゐるのである。

さて、一度「愛」が生れて來ると、諷諷的、自嘲的、乃至傍觀的態度は忽ち面目を一新する。即次に説く光明的な樂天主義に變るべき可能性を帯びてくるのである。

### 三 樂天的人生觀

#### 一

樂天と厭世といふことは滑稽に取つて重要な關係を持つてゐる。この點に就てまづフォルケルトが「美學大系」の第二卷に於て論じてゐることを大略紹介しておきたい。

その前に注意しておくべきことは、フォルケルトの「フォーム」(Humor) 即「ユーモ

ア」の意味は私が本書で用ゐる「ユーモア」よりも餘程廣義になつてゐることである。フォルケルトに従ふと「ツァイジング」(Zeising) は「滑稽」(Das Komische) と「悲壯」(Das Tragische) との内的混和をユーモアと名づけ、ハルトマン(Hartmann)は更に「哀憐」(Das Rührende)を加へて滑稽、哀憐、悲壯の三者が種々に結合して雜多のユーモアを形つくと説き、リップス(Lippes)もユーモアを超滑稽的のものとした。フォルケルトは之に反してユーモアを主觀的滑稽の極致と見たいといふのである。概言すれば、ユーモアは「省察的態度」であつて、自由な、放縱な遊戯的態度と深刻な省察との綜合である。そして此處から更に幾多の種類のユーモアが生れて來る。

因にリップスの「フォーム」も歸するところフォルケルトのと大差無いやうに思はれるが、唯「滑稽」に於ては、その滑稽の對象が無に歸すると同時に偉大なるもの、崇高なるものに對する吾々の期待と信仰、吾々の思惟の法則と習慣等も亦ある方法で「無」になるが、この自己の消滅を超越したものがユーモアだと云ふのである。ユーモラスのものに對する場合にも、又自身がユーモアを有する場合にも、このユーモアは「精神的自由」に存する。即、凡ての自我的又は客觀的價値の「無」なるに拘らずそこ



に存在する、或は恰もその「無」に於てはじめて承認せらる可き、自我、理性、善、崇高等に對する確信にユーモアが存するのである。こゝまでは私の所謂「ユーモア」と略同様のものであるが、然し、リップスは更に言葉を續けて、けれどもユーモアは必ずしも凡てこの最高階段に達するものでは無く、そこには一層低い程度のユーモアもある。また茲に前提した積極的のもの、傍に消極的のユーモアもある。和解的のユーモアの傍に分裂的ユーモアもあると云つてゐる。即、ユーモアを廣義に解して、その中に分裂的な、諷刺的のもの (Der satirische Humor) と、自己破壊の滑稽なる反語的のもの (Der ironische Humor) とを含ませてゐる。フォルクケルトは、専ら譏諷、侮蔑、非難を旨とする諷刺をユーモアと區別して、未だ自由を得ざる滑稽の中に入れて論じてゐるが、ユーモアに與へた定義の上から見ると、省案を伴つた諷刺は當然その中に含まる可きものであつて、フォルクケルト自身もユーモアの一種として之を認めてゐる。即、この點でリップスと一致するやうに思はれる。滑稽そのものゝ發達の上から學術的に論じたら、かくユーモアを廣義に解するのが正當であらう。元來ユーモアは「濕氣」の義で、古代の醫師は體内の濕つた要素と乾いた要素との調

節で身心の健康状態を判斷した、從てユーモアといふ言葉は「氣分」といふ意味に用ゐられるやうになつたのだと云ふ。「氣分」には好い氣分も悪い氣分もあるのだが、狹義に於ては好い氣分の意味に用ゐられる。即、諧謔、滑稽の意味になるのである。そしてかの心理學で云ふ「氣質」の基礎となつてゐる體液もユーモアと呼ばれる。元來かく廣い意味の言葉であるから、この中に高級な好意的の笑と、同じく懲罰的の笑とを含ませるのは蓋し正當であるかも知れない、しかも、リップスの説に依ても、現はれるやうに、純粹の、或は狹義のユーモアは眞善美に對する信念、一種の調和的氣分を前提としてゐるやうに思はれる。リップスはやはりこの積極的のユーモアをユーモアのプロバなるものと見てゐるらしいのである。そこで、元來私にとつては「滑稽」の學術的定義よりもその表現、及滑稽の主體の取る態度の問題が重要なのであるから、滑稽的態度の上から「笑」又は「滑稽」を好意的と懲罰的、調和的と分裂的といふ様に二大別したのである。即、ユーモアと「サタイア」との別であるが、ユーモアに對して從來の「有情滑稽」といふ譯語を用ゐた理由は、その對象に即し、それと交感するといふ意味で「有情」と云つたのである。即、感情の移入が行はれることを

暗示するので、精密に云へばある種の諷刺も有情滑稽と稱しえらるべきであるが、大體に於て、對象に即するユーモラスの態度は同感、同情の分子が多分に交り、主として優越感に立脚する諷刺は無情、冷靜、傍觀の態度になるのである。即、狹義の「有情滑稽」に於ては「情」は略、溫情の意味に解せらるべきものである。因に、諷刺といふ語は拉丁語では「飽滿」、「豐饒」の義で、種々の菓實を盛つた皿を意味し、「雜多」の意に轉じ、「混和詩」の義に用ゐられ、紀元前一八〇年に生れた羅馬の詩人ルチリウスに依て創められた諷刺的詩歌を名づけるやうになつたのである。時代の暗愚と罪惡とを膺懲するのを目的とした機智に富んだ詩歌で、好でアイロニーを用ゐた。ホラーツ、ベルジウス等が出てこの詩風は更に發達したと云ふ。

なほ「ユーモア」と「サタイヤ」との別については「グアイトブレヒト (Weithrecht)」が「獨逸戲曲論」に於て明快に論じてゐるから、其要點を次に紹介して置かう。

「悲劇的矛盾に於けると同様に滑稽的矛盾に於ても審美的和解の契合點がある。吾々が世間の錯誤、背理を見たとき、俗人（Folksleute）や術學者（Gelehrte）が爲るやうに不快氣に又は冷淡に顔を背けてしまはないならば、忽ち吾々の心の中にはその明瞭な矛盾に對して

個人的の優越感が生ずる。そして、この優越感が直に心理的快感を伴ひ、一種快適の氣分でその中に低徊するやうに吾々を刺戟する。即、吾々を誘つて矛盾の直觀に入り込ませるのである。唯、その際に吾々の意識が直觀そのものに集中するといふよりも寧ろ個人的優越感に集まるいふことがあり得る。この場合には不快感是一般に除去せられるが、しかもそれはまだ事物それ自身に對する、審美的直觀それ自身に對する眞の快感では無い。これは嘲弄、揶揄、侮蔑の快感であり、單なる「イロニー」の快感であつて、一面に於て大抵利己的のものであり、他面に於ては結局純粹な審美的直觀の態度に非ずして、寧ろ實際的、或は理論的態度である。反之、矛盾を發見した際に發せらるゝ例の「はゝあ、成程」といふ言葉が、云はゞ人の好い、ある意味に於て沒我的な、一般に審美的直觀に傾いた心、或は少くとも心的情調に對して、自己をその明瞭なる錯誤又は背理の中へ觀照的に没入する橋渡しとなる場合に、始めて滑稽の完全な効果が現はれ、滑稽に對する純粹な審美的快感が生ずるのである。

茲に至て吾々は「悲壯」の場合と同様に心の中で對象と一緒に動くのである。唯、

悲劇的意味に於ける同情を以ては無く、人生及人間の不可避的愚昧に對する快適な個人的同感を以てするのである。吾々は笑ひながら、或は少くとも快活な氣分で、人間として自分達にも意義を持てゐるその對象の中に入つてゐる——が然し同様に快活に其上に立てゐるといふのは吾々はその背理を意識して居り、それに對して内的に解放せられてゐるからである。吾々は自己の中に人間の背理に對する接觸點を持てゐる。唯、俗人と術學者とはそれを知らない。背理の直觀へ個人的に没入し、同感し、しかも同時にその上に超然たるところに滑稽に對する審美的快感が存するのである。

グアイトブレヒトが區別した二様の態度は、私の屢々云ふ「諷刺」と「有情滑稽」とに當る。サルリが「サタイヤ」を定義して、「笑と眞面目な攻撃的態度との結合」とし、「ユーモア」を「笑と洒脱なる感情 (mellowing feelings) との結合」と云つてゐるのも同じ心である。勿論、實際の場合には純粹の「ユーモア」や、純粹の「サタイヤ」は尠く、種々の要素が入り交つてゐるのが普通であるが、それでも態度の上で大體二つに分つことが出來やうと思ふ。

さて、「ユーモア」の論はこの邊で止めておいて、樂天的及厭世的態度の説に移らうと思ふが、右に述べた「ユーモア」と「サタイヤ」、同情と憎惡、調和と分裂、和解と乖離との對照を仔細に考察すれば、そこに自ら「樂天」と「厭世」との相違を認めることが出來やうと思ふ。

實際フォルケルトがこの問題に就て述べてゐる事はグアイトブレヒトの説に一步を進めたに過ぎない。

滑稽の主體、即ユーモリストが人生の矛盾を眺めながらも、結局人生そのもの、意義と祝福ある目的とを承認し、善の價值と勝利と、純な幸福と、光明的調和と、崇高な愛の可能とを信じてゐるか、或はさういふ矛盾は究極的のものであつて、到底克服し難いものと見て世界を苦痛又は諦觀の場處と考へ、善きものや、高尚なものは虐げられ、滅亡する運命を荷ふものと極め、更に一步を進めて、善そのもの、内的價值をさへ疑つてゐるか、この二つの態度、即樂天と厭世とはユーモアにとつて極めて重大な關係を有つてゐる。

云ひ換れば事物の假裝、虚飾といふものをどの邊まで深く考へるか、その爲に根

本の眞善美まで動搖し、破滅せられると見るか、或は虚飾は畢竟表面的の惡に過ぎないと見るかに依て二つの態度が分れる。

なほ云ひ換へればユーモリストが卑小、貧弱、醜惡なるものゝ中に幸福と善と愛とを認めるや否やに依て右の二つの態度が分れて来る。

要するに樂天的態度のユーモリストには信頼、愛、感謝の念が主調となり、愚かなる世相を笑ひつゝも、自然と運命との賜物に對する愛と感謝の情とを失はない。

ヤン・パウルの云ふやうに彼等にとつては、地獄の道は天國の道を拓くのである。而て樂天的のユーモリストは世の中を和解すると同時に彼の情意生活はそれ自身の中に調和を得てゐる。だからこの種のユーモアを和解的又は調和的ユーモアと名づけることができる。

之に反して、悲觀的のユーモアに於ては、猜忌、憤懣、嫌忌、憎惡等の情が勝つてゐて、幾分の愛情は認められても結局不満と煩悶の情とに壓倒せられてしまふ。何處へ行つても迫害せられ、排斥せられ、挑撥せられ、虐待せられ、傷けられるやうに感ずる。凡ての偉大なるものと善きものは假面に過ぎずその蔭から空虚と腐敗とが

醜い笑顔を見せてゐるやうで、この世は一の矛盾であり、生の基礎は大なる虚無に掘り崩されてゐる。悲觀的ユーモリストはかく世の中と不幸なる乖離をなすと同時に、彼の情意生活はそれ自身の中に於て不和で分裂してゐる。そしてこの矛盾と分裂とを絶えず表現する。故に悲觀的ユーモアは又分裂的、不調和的ユーモアと名づけることができる。

そして、フォルケルトは前者の例としてはケルレルの「緑衣のハイインリヒ」とフィールディングの「トム・ジョーンズ」とを挙げ、後者の例には沙翁の「ハムレット」を挙げている。

## 二

ハムレットの事は悲喜劇的性格の項で述べた。ケルレルに就ては序論で一言して置いたが、ケルレルの世界は快活な、愛に満ちた光明界であつて、しかも重厚な悲劇的の嚴肅を缺かない。彼の稟性には人生の慘苦に對する深い同情と盡きざる生の喜びとが結び付いてゐる。私の云ふところの「樂天的人生觀」とは恰もかう

いふ境地を指すのである。そしてこの態度は換言すれば「ユーモラスの態度」であつて、私の所謂「ユーモア」の發現と見られるのである。狭義の「ユーモア」に於ては樂天的「ユーモリスト」だけがあつて悲觀的「ユーモリスト」はありえないことになる。さて「樂天」と云つても色々の階段があり、種類がある。

無反省に生活の渦中に飛び込んで取り得らるゝだけのものを取り、與へられた範圍内で及ぶ限り本能の満足を図り、榮辱も別に意に介せず、只管刹那を樂み、精神上のその日暮しをする一種の享樂主義者も亦樂天的と呼ぶことができやう。かの「フォルスタフ」や「破壺」の主人公の如きはこの類である。享樂の中に絶えず省察が働いて、飽く無き慾望と限りある能力との矛盾を自覺するものは最早單純な樂天主義者になり切ることにはできない。そこには自我の分裂から來る苦惱が生れ屢々悲喜劇的性格を形つくる。

尤も極めて強烈な個人主義の上に立脚した氣力の旺盛な、活氣の横溢した人物になると必ずしも無反省といふのでは無く、人生の慘苦をも可なりよく知つてゐるが、さういふ消極的方面に對する同情は動もすると感傷主義センチメンタリズムの病に墮し易きものとし、女々しいもの、個性を稀薄ならしめるものとして排斥し、止むをえざれば弱者を犠牲にしても自己の華やかな、輝いた道を進まうと決心する。愛の教へを奴隸の道德と罵つて別に強者の道德、超人の道を説いた「ニーチエ」の如きは少くとも思想上に於ては一種の樂天主義者と見ることが出来る。

かういふ態度は實は「天を樂む」といふよりも更に積極的で、天命に對する敬虔な感情の如きは寧ろ弱者の事として輕蔑し、自ら自己の運命を築き上げやうとするのである。「イブセン」は個人主義の代表者のやうに云はれてゐるけれども、一方に於て宿命論者「フアスト」である限り、消極的の分子があつて屢々自己分裂に陥り、悲喜劇的印象を與へる。彼の血の中には基督教の思想が深く潜んでゐたのである。又、余は一個の樂天家なり」と云つてはゐるが、その「樂天」の意味は、未來に對する信仰を基礎とした樂天であつて、現在に對しては寧ろ著しく厭世的である。一種の禁慾家とも見られる。屢々生の喜び、太陽の憧憬を説いてはゐるが大抵の場合それは反語的に表現せられて、性慾の如きは寧ろ罪惡のやうに取扱はれてゐる。「死者覺醒の時」に於てはこの禁慾的傾向に對する悔恨のやうなものが現はれてゐる。觀照

者として人生を通り過ぎ、人として生きなかつた憾が老年の悲哀と共に暗示せられてゐる。

反之、シヨールとかヴェルハールとかリリエンクロンとかデーメルとかいふ人には「生を盡す」といふ強い肯定的の態度が現はれてゐる。その笑は朗かにして大きい。イブセンの描いた牧師「ロスマル」は「笑はぬ人」である。彼は眞理を見て生の革新を決心したが、彼の心は強い因襲の絆で繋ぎ止められてゐる。彼は基督教徒的の過敏な良心を傳へられた。「良心こそ最もコンヴェンショナルなもので、トラディションの中に、凡て過去なるものゝ中に深く根ざしてゐる。此處から矛盾葛藤が生ずる。」とイブセンが云つてゐるやうにロスマルも亦この矛盾の中に仆れた。彼は思想上の勇士、實行上の小兒であつた。彼は一のハムレットであつた。彼は笑はなかつたのでは無くて笑ひえなかつたのである。かの月夜ツアラッストラが出逢つたといふ若い牧人の咽喉には深く黒い蛇が喰ひ入つてゐた。聖者は顔を歪め、身悶えして苦しむ憐れな者に向て「噛め」と命じた。牧人は終に噛んだ。そして黒蛇の首を遠く吐き棄てた。そして今迄地上の人が嘗て笑つたことの無

いやうな聲で笑つた。今はもう牧人でも人間でも無く、一種光明を放つ者であつた。「この笑に對する憧憬わが心を噛む。噫、われなほ生くるに堪へんや。而て今死ぬるにあゝわれ忍びんや」とある。

この笑は唯我獨尊的の超人の笑である。ユーモアといふ名を與へるには餘りに強すぎる。「悲壯」といふ言葉に對しても、し許されるならば「喜壯」とでも名づけたいやうな態度である。それほど強い態度で無くても、何事にも、めげない、泣言を云はず、また泣言をきかない性質の人の笑は石を轉ばして滾々と流れる溪流の聲に似たものがあり、又枝から取つて直ちに刀を加へた果實の薄紅い肉から迸る香の高い新鮮な汁のやうな味がある。然し、山間に藍を湛へる湖水の面に寄せる幽かな小波の囁きに似通ふやうな微妙な聲は無く、また噛みしめるに従て津々と湧き出るユーモアの滋味は無い。

とにかくこの種の笑はそれが著しく譏諷の風を帯びない限り、感傷を交へず、自嘲に陥らない純粹な笑と云ふことが出来る。然し、前にも云ふ通りこれは、強者の笑である。弱者がこの笑を眞似やうとするといつか欲求と能力との矛盾を生じ、

自己分裂の苦い經驗をして、自嘲に傾き、悲喜劇的性格になつてしまふ。

そこで、自己分裂の苦惱を味ひ、自嘲の態度を取るものは前章に述べた「傍觀者」の群に入るのであるが、「傍觀者」の中の最も消極的なるもの、斷念と諦觀の境地に達したものの、枯淡な生活に安住しうるものは、これも亦一種の「樂天家」である。所謂「一簞食一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂」といふ境界であつて、かの犬儒學派の態度に於ても之を見ることが出来る。天命を樂むといふ意味ではこれが最も「樂天」の本義に合するものと云つて可いかも知れない。しかもこの態度は往々餘りに消極的に流れ、枯淡に陥り、人事を盡して天命を待つ、のでは無くて人事を盡さずして早くも退隱を思ひ、遁世を希ふ者の避難所となる觀がある。即ちこの態度を取る者には一方に自嘲から轉化した者があり、一方にはまた最初から生活力が稀薄で人生を正視するに堪へず、進んで傍觀者の群に入つたものもあるのである。かうなると成程その生活が内的に一種の調和を得てゐる點で「樂天」と云ふとができるやうなもの、生活を忌避する點に於て「厭世」と相觸れてゐるのである。唯、眞の厭世と異なるのは、たとひ現在の人生を厭ひこそすれ、人類又は自然に對して少くとも

積極的に敵意を懷かず、焦慮せず、煩悶せず、迫はず、拒まず、云はゞ行雲流水の如く、敢て世相を惡とも善とも觀せず、草木のやうに生き、草木のやうに枯死しやうと希ふ消極的態度に在る。そこに一の内的調和があり、靜寂な平和がある。出家、俳人、隱士等の生活がそれであつて、「樂天」とは云ふものゝ消極的厭世の一種とも見られるのである。その笑はユーモアと云ふには餘りに寂しく、餘りに冷たい。譏諷の風は無いが、一方に同情の溫味も無い。病葉を誘ふ秋風の囁きのやうである。

## 三

ケルレルの世界はもつと溫い、もつと明るい世界である。彼は人生の歡樂に耽溺するには餘り聰明で、また餘りに敬虔であつた。飽まで人生の快樂を攝取して陶酔的生活を送らうとするのは、狼が小羊を愛するやうに、人生を愛する者にとる態度であるが、幼時から宗教的情操を涵養せられたケルレルの愛はダントの愛のやうな敬虔の趣を持つてゐる。然し人生の快樂を嫌惡する禁慾的態度は彼に於て見る事ができない。寧ろ、有りまゝの人生、背理と矛盾とに充ちた、しかし誘惑

的の魅力を有つてゐる、平凡な人生そのものを抱擁するやうな態度である。人生はある時は非常に美しく、或時は非常に醜く、恐ろしく機嫌買ひで、冷熱常ならぬ妖婦にも比べられるであらうが、彼はこの人生の美も醜も移り氣も、ひき括めて愛することを知つてゐた。

彼が官能の喜びを解してゐたことは、淫蕩な妖婦の描寫にも非凡の手腕を有し、又飲食物や衣服などの描寫にも多大の趣味を持つてゐるのに徴してもわかる。一方に官能の喜びを解しつゝ、一方に深い宗教的憧憬を失はないところから、私の云ふ意味のユーモラスな樂天的態度が生れて來るのである。ケルレルのユーモアは彼の殆ど凡ての作品に現はれてゐるが、渾然たる大作「緑衣のハインリヒ」(Der grüne Heinrich)の基調をなすものは矢張このユーモアの流れである。而てその最も鮮明に現はれてゐるのは蓋し短篇集「ゼルドゲイラの人々」(Die Leute von Seldwyla)であらう。

中にも「櫛屋三人男」と題して日本にも傳へられた短篇の如きは固陋な利己的な三人の職人を捉へ來つて、利慾一點張りの俗人氣質を遺憾無く描寫し、その鄙吝な

性格から來る憐むべき競争と苦惱とを極めてユーモラスな、戯れ樂むやうな筆致で描いてある。そして最後にこれ等の固陋な人物に妖婦型の女性を配して、一層諷刺を辛辣ならしめ、性格を躍動せしめてゐる。ホフマンの「マルチン親方」と共に「職人」描寫の双壁と云つて可い。そしてこの作は一面から見れば利己心に立脚した「着實」とか「勤勉」とか「常識」とかいふものを揶揄翻弄したものとみられる。しかも作者の態度は何處までも餘裕を存して激せず、怒らず、いつも唇邊に微笑を漂はせてゐるやうである。この態度は「馬子にも衣裳」にも「猫」といふ童話にも保たれてゐる。前者は貴族と間違られた貧乏な仕立屋の若者を主人公としたものであるが、普通の作者ならばこの假裝した貴族とその暴露とに諷刺冷嘲の鋭鋒を向く可きところをケルレルはこの若者に同情して、却てその外貌に偽かれる慾の深い、惡戯好きのゼルドゲイラの人々を嘲り嗤つてゐる。「猫」では動物に憐愍の眼を向けて、その膏血を絞らうとする魔法使ひを冷笑の槍玉に上げてゐるのである。然し、ケルレルの「笑」の特色が最も好く現はれた作として私はこの短篇集から、失はれたる笑「Das verlorene Lachen」の一篇を抜かうと思ふ。



## 四

話の順序立つた梗概を語る必要もあるまい。唯、繪から抜け出たやうな、姿の好い快活な若者と、美神のやうな少女との顔からどうしてその双生兒のやうに相背した、内心の幸福の光り輝くやうな笑が失はれたか、そして如何してその笑が再び二人の頬に復つて來たかといふことを話せば可い。

市の祝祭に旗手の役を勤めて、勝利の歌を歌つた若者は薔薇の冠を戴いて、雪白の服に紅の帯を締めた少女から勝利の花環を受ける。この若い男女が始めて相見たとき二つの美しい顔には不思議にも同じ華かな、明るい、幸福の笑が輝いた。この瞬間から二人の心は離れ難く結び付けられたのである。

祭果て、後歸つて來た息子の顔を満足氣に見まもつた母親は不圖わが子の快活な笑の中に、哀愁に似た影が少し混つてゐるのに氣が付いた。恰も、郷愁か、憧憬を懐く人のやうである。そして一方にかの少女の母もやはり幽かな憧憬の同じ影を優しい笑顔の中に見出したのである。

終にこの甘い哀愁の影が消えて、二人の笑が無上の歡喜に輝く時が來た。二人の笑は一つに融合したのである。

然し歡樂の笑の命は短かい。男が材木及薪炭の事業を始め、利に敏い商人等が森の濫伐を始め、若木の幹にさへ鋭い鋸の齒を加へ出したとき、森を愛する男の顔にはいつか憂鬱の陰が宿り、かの快活な明るい笑は漸々失はれて行つた。ことに土地の誇りとなつてゐる數千年を経た椋の老木が伐り倒される運命になつたとき、彼は終に堪へ切れずに自分でその木とその周囲の地を買ひ取り、四邊を清めて、眺望の好いその木の下に腰掛を据ゑ、行人の休息所にあてた。人々は彼の殊勝な心懸けを褒めたが、一方にこの時から人々は彼を與し易しと見て取て、商賣上様々の不正手段で彼を欺き始めた。材木商に嫌氣のさした彼は土中の寶なる石炭を採掘して薪に代へ、土管や鐵管を製造して木製の桶に代へ、煉瓦を建築材料に用ゐることを奨勵した。然し彼の家産は漸々傾く一方になり、終には破産の悲運に陥つた。正直な明けつ放しの彼の性質は元來商法には適しなかつたのである。永い間貧苦と闘つて來た彼の老いた母は、貧を研ぎ澄ました刃のやうに恐れた。

彼の若い妻は、貧をそれ自身惡しき卑むべきものゝ如くに憎み疎じた。貧民の茅屋を訪ねて施物を頒つことを辭せない彼女も一度、貧が自分の家族親戚朋友の中に入り込むときには疫病に對するやうに忌み恐れ嫌ふのであつた。

清貧を樂み、獨立して家運の挽回を計らうといふ男の決心は母と妻との反對に逢つて鈍り、終に妻の勧めに従つてその富裕な生家に寄寓する身となつた。

茲でも彼の公明なやり方は店の損失を招くことが屢々あつた。彼の位置は苦しくなつた。

是より先き彼の愛してゐたかの樫の老木も終に賣られて、無情な商人の手に伐り倒される日が來た。千歳の齡を重ねた老木は幾重にも索をかけられ、鋭い鋸の齒に肉を噛まれて、梢を震はし、幹を揺り、終に地響を打つて俯向けに倒れた。

山一つ向ふの妻の生家にゐた男は丁度その時山に登つてゐたが、一本樫が動く、嵐でも始まつたのかといふ聲に驚いて故郷の方を眺めるうちに、ふと樫の木の姿が見えなくなつて、その跡に齒の抜けたやうに淋しい空虚が残つた。

こゝにまた若い夫婦にとつて不祥な事が起つた。それは妻が無限の信頼を置

いてゐる村の牧師と夫との間の信仰上の意見の衝突である。教義とか學問とかいふものから獨立した純真なる信仰は、革新を標榜して宗教を生きた科學としやうとする氣鋭な牧師の説とは根本に於て相容れない。従て教會に對する喜捨の勧誘も斷然拒絶する。この方面に献身的に奔走し、それを失意の境遇に於ける唯一の慰藉として來た妻は夫の冷淡な態度を見て一時に赫となつた。それには又成り上りの富豪連に共通な粗い血も手傳つて、終に妻として夫に云ふまじき言葉を吐いてしまふ。その一言を聞くと夫の顔色は蒼くなつた。即夜母を連れて、樫の木の代償として受け取つた僅ばかりの金を懷中にして暴風雨を冒して立ち退くのである。

この時以來夫婦の顔からかの優しい、樂し氣な笑は消え失せた、影だに止めず、恰も嘗て一度も其處に無かつたやうに。

笑を失つた男女は別々の道を辿ることになつた。男は不圖舊知に逢つて今度は與へられた範圍内で自由に憚ること無く欺く必要も無く、欺かれる虞も無く、公明正大に働くことができ、漸々順境に向つてゆくが、女は獨り淋しい朝夕を送り、食

事も進まぬ勝ちに垂れ籠めてゐるうち、思ひがけず家業に一大蹉跌を來し、昨日に變る今日の佗住居に唯一つの靈魂の慰藉を宗教に求めやうと、かの牧師を訪ねると、巖のやうな信仰を懐いてゐた筈の神の僕は絶望の淵に陥つてゐる。仔細を尋ねると彼は人に向て熱心に新らしい信仰を説いてはゐるものゝ、それは單に喝采に酔ふ虚榮心の作用で、自ら安住の境地を見出しえず、常に空虚の心を抱いてゐた。そのうちに、富豪の生活を見て忽ち煩惱を起し、自分も乏しい資財を投じて一攫千金の利を圖らうとしたところが、彼女の父と共に一大打撃を受けて、今や精神上にも物質上にも破産してしまつた。今日もある老婆の臨終の床の邊で得意の説教を試みたところ、途中で老婆は寝返りを打つてしまひ、親族達は氣毒さうに彼を別室に連れ出した。彼の説教は全く權威を失つてしまつたのである。彼はこの新らしい精神的打撃に堪へかねて男泣きに泣くのであつた。慰藉を求めに來た彼女は却て慰藉を與ふべき人となつた。彼女は云ふ可き言葉を知らなかつた。黙々としてそこを立ち去つた彼女は生活の凡ての支柱が目前に頽れ倒れるのを見た。富と愛と信仰との殘墟に彼女は寂しく立つた。この時ふと嘗て彼女の

家に仕へてゐたある敬虔な女のことを思ひ出して、その信仰を求めなるべく彼女はある日心ばかりの手土産を携へて遠い路をひとり巡禮者の心を懐いて辿つた。敬虔な母娘の者は首府外れの小やかな家の明るい部屋に住んでゐたが、隣の暗い濕々した陰氣な部屋には「油婆さん」と綽名のついた巫女のやうな惡婆が住んでゐた。蜘蛛のやうに暗い片隅に蹲つてゐながら、世間の噂は細大洩らさず耳に入れ、人々の缺點や醜聞を嗅ぎ出して吹聴するのを唯一の樂みにしてゐるといふ物凄しい婆さんで、角張つた大きな黄色な顔には嫉妬と復讐心と、人の不幸を喜ぶ皮肉の色とが破れた虚榮心の周圍に、丁度チゴイネルが荒野の上で消えた焚火を圍むやうに横はつてゐた。

彼女はこの老婆の部屋を氣味悪く通り抜けて明るい敬虔な女達の部屋へ入つて、色々信仰上の話をきいてゐると、忽ち尾を踏まれた猫のやうな、ギャツといふ厭な叫び聲が次の部屋から起つた。驚いて女の一人が走り出てみると立派な紳士が「油婆さん」の咽喉をつかまへて壁のところへ軽く押しつけてゐたのであつた。人の姿を見ると耻ぢたやうにその紳士は手を放したが、今度は客の女の口か

ら驚喜の叫びが洩れた。その紳士は彼女の別れた夫であつたのである。

彼は其後下層社會に對する同情から一派の社會主義者の群と交際したが、かの定見も無く、唯上流社會の人々を憎んで、その私行を摘發し、その名譽を傷けて痛快とするやうなやり方を見て内心不満と寂寥とを感じてゐたが、群衆の心理の根底を極めるべく、彼等が悪口の間屋としてゐる「油婆さん」のところへ來たのである。そして婆さんの卑むべく恐るべき誹謗譏諷の惡魔的態度に憤慨のあまり思はず手荒な事をしたのであつた。

永い別離の後終に二人はまためぐり合つた。暗い部屋を通つて明るい部屋で相對した。

その後間も無く改めて會見したとき、朝日を浴びた二人の男女の顔にはかの失はれた明るい幸福の「笑」が歸つて來た。互に相手の顔にこの「笑」を認めるとき、彼等は言葉も無く相抱いて、接吻したのである。

失はれた笑は終に復つて來た。然しそれは果して舊のまゝの笑であつたらうか。

始め若い男女の顔に輝いた笑は純眞な、單一な、生を樂む笑であつた。小兒が紅の花を見て笑ふのと同じ笑であつた。その「笑」は戀を知つたとき憧憬の影を帯びて來た。そこに不純な、あるものが混つて來たが、同時に笑はその深さを増した。戀てそれが強烈な歡樂の笑に變はるときが來た。しかし、その笑は丁度劇しい金屬性の光のやうに眩い光を發して、ふつと消えた。消えた跡には曾て無い程の暗さが残つた。笑は永久に失はれたやうに見えた。男は失意の人となつた。女もやがて落魄の身となつた。愛も信仰も笑と共に失はれた。今や二人の頬に「苦がい笑」が浮ぶべき時となつた。實際、男にはその機會が眼前にあつた。自己の譏諷の犠牲の流す血を啜つて生きてゐるやうな社會主義者の群は彼を取り卷いた。しかし、その惡魔的の笑に感染するには餘りに彼の信仰が自然であり、純一であつた。誹謗と皮肉との化身ともいふべき「油婆さん」は彼の力強い腕にその咽喉を扼せられて醜い叫びを發した。

然し種々の經驗は彼の信じ易い、子供らしい心を深刻ならしめた。されば再び歸つて來たか、かの明るい笑は、その深さに於て、その複雑さに於て、暗昔の笑と同一で

は無い。

その中には幾多の涙が潜んでゐる。悲哀と絶望との「淨罪火」を潜つて來た眞の意味に於ける樂天的の笑である。狹義に於けるユーモラスの笑である。女の場合も殆ど同様である。女の信仰は男の、やうに自然的な純眞なものではなかつたが、牧師の告白と敬虔な女達の言行と、またある加特利教の女順禮の姿とが彼女の心に新らしい光を投げた。彼女の頬にも終に冷冽な苦がい笑が浮ばずに、昔の明るい笑が、その深みを増して復つてきたのである。

また、この話で注意すべきは自然に對する愛である。樂天と自然の愛とは密接の關係を持つてゐる。人間に對する愛は自然をも、また動物をも抱擁せねばならない。再會して明るい笑顏を見せ合つた男女は朝の涼しい、新鮮な氣の満ちた森の中を逍遙した。ふと明地のところへ出た。そこには美しく手入れをした養樹園があつた。三四寸位の小さい白樺や、赤樺や、松や杉や、落葉松の苗木が何千本となく規則正しく薄縁の小さな頭を並べてゐた。恰も幼兒の列のやうである。それから膝の高さの、次に胸の高さの一群は少年に比すべく、高い山毛櫸、樺、楓の群は

青年であつて、その後ろに保護するやうに枝を廣げてゐるのは、森の老木の群である。

嚴肅な森の静寂はこの珍らかな光景の印象を一層高めた。そこには自己の生にはあらで次代の子や孫や曾孫に對する深い愛が現はれてゐた。

頃刻あつて男は女の手を執りながらかう云つた、――

「かうしてまたお互に顔を合はせてみると、この世の中は世間の人達がよく云ふやうにそんなに悪くはないといふことが直ぐわかる。ねえ、さうぢやないか。噪急しい、無情な、利己一邊の人達も結局は唯自分達の子孫のために骨を折つてゐるんだ。それのみか自分達の識らない次代の人々のために心配するといふ義務をさへ充たしてゐるんだ。」

この自然と人生とを貫く久遠の愛の方を認めるところにユーモアの泉がある。瑞西の美しい自然の中に生ひ立つたケルレルにこの自然の愛が特有なのは敢て怪むに足りない。樺の老木に對する主人公の愛着は直ちに作者の愛の反映と見るべきであらう。丁度同じやうな愛の光を私はアルプスの詩人ペーテル・ローゼ

ツゲル(「天邪鬼」の作者)に見る。

## 五

かれの短篇樹木の死(Der Baumtod)一名樹木の生死と他の悲しき物語は丁度ケルレルの作の椶の老木の挿話と同じ様な筋である。そこには伐り倒される老木に對して自己の生の衰へを思ふ老人の悲哀が描かれてゐる。そして、如何に詩人が自然生活に對して深い同感を持つてゐるかは既に冒頭の一節にもあらはれてゐる。

「山の森の高い梢に微風が渡る。群を離れた二三本の大枝は徐かに揺めいて、人間の耳に聞こえないやうな幽かな囁をかはす——木が木と話をしてゐるのである。深く地中に埋もれた共同の力は色々の幹に分れ、上方の枝となり、梢となつて互にまた相見えるのである。

遠くから樵者の挽く鋸の音が聞こえる、大病人の迫れる息づかひのやうに、瀕死者の咽喉に絡む喘ぎのやうに。どの木も葉摺れの音を止め、森は沈黙に陥る。

——親戚の臨終の床の邊に集まる家族のやうに。  
樹が死ぬのである! ——

老人には二人の息子と三人の娘とがあつた。——今は末の息子しか残つてゐない。長男は樹の枝を拂ふとき過まつて墜ちて死んだ。十六と十九になる二人の娘はある秋の日薪を採りに行つたが、夕方死骸になつて歸つて來た。木に押し倒されたのである。また、六歳になる小兒は炭焼竈の上で遊んでゐたが、竈が崩れて、娘は骨になつて火中から引張り出された。虐殺せられた大小の樹木に對して森が復讐したのである。外にも何か意趣があつたのかも知れない。——

重なる不幸に婆さんも醫師に見放される程の大病をし、終には老人も半狂亂の姿となつた。七十年来我子のやうに愛しみ育んで來た最後の杉の木を伐り倒す羽目になつて、老人は枝を下ろす若い者達の方へ踏み寄つて——

「やめて呉れ、切るのを止めてくれ! 汝達は俺の手足を切り取るのだ! ……それは俺の足だ! 鋸を! 鋸をどける! さう深く、木の髓まで切り込むな、助けて呉れ、俺の足だ、赦して呉れ! ——俺が死ぬまで、我慢してくれ!!」

と泣き叫ぶ。

「俺が快くなる？」老人は悲しうに笑つた——

「あの木がまた立つて生きて、元氣よく、若返へつたら、俺もまた壯健になるかも知れぬえよ。ところが木はそこに倒れてゐる、汝達は枝を切り拂つてゐる——この年寄の父親も一緒に切つてゐるんだ。」

かう云つて兩手を組み合はせて神に祈る老人の潤んだ眼には蒼穹が映つた。

しかし、切り倒された樹木の生命は、切られて薪となり焼かれて炭となつても滅びはしない。熔爐の下に燃えて金屬を熔かし、淨め、二つのものを結び合はせ、金屬の力となつて生き、そして人類を益するのである。

それのみでは無い。老人の絶望的の假定が實現せられるときが來た。老人夫婦が杖に縋てかの老木の切株を訪づれたとき、思ひがけずも、その極く傍に、殆ど一體となつたやうに、杉の嫩芽が生々した小さい緑の頭を擡げてゐた。柔かい細そりした枝を微かに震はせて心から老人夫婦を歓迎するやうであつた。

「カタリイネ！」とその名を呼んで、老人は泣きながら老いた妻の頸に縋つた——

「あれを見る！若い、勢の好い芽生を！俺はまた壯健になるぞ！」

老人の獨息子のザインセンツは黒い眼と金髪を持つた、仔鹿のやうに飛び廻はる、薔薇の蕾のやうに匂ひこぼれるザリリと呼ぶ少女と芽出度結婚し、間もなく二人の間には男の子が生れる。その子は祖父さん生寫しだと云ふ。

ローゼンゲルに於ては、悲しき物語も悲しくは終らない。彼は悲しい世相の底を流れる久遠の愛の力を認めてゐるのである。この點に於てモーパッサンの「女の一生」の結末、ツルゲーネフの「父と子」の最後の墓參の一節の如きも亦同じ人生觀を示してゐる。欺かれ、捨てられ、虐げられた女は孫の體の温味に愛の餘燼を感じ、無情な剛愎な子の墓に咲き出でた一莖の花には博大なる神の愛の光が宿る。「この世は人の云ふやうに好くもまた悪くも無い」といふのは一面に寂しい諦觀を語ると同時に、大なる愛に縋つてそこに安住を求め、敬虔の心を現はすものである。

## 六

自然に對する愛と並んで、或はそれに附屬して、動物に對する愛がある。これも

亦ユーモアを生むべき同じ愛の泉である。「猫」の童話の事は前に述べた。「犬」を描いた有名な小説にエッシュエンバム(Ebner-Eschenbach)の「クラムバムブーツ」(Krambambuli)や「シュビッチン」(Spitzin)がある。犬の忠實やその愛情を描いたものである。そしてこの當今獨逸閑秀作家の随一人と云はれるエッシュエンバムも特にユーモラスな作家として聞こえてゐる。尤も動物の愛は必ずしもユーモアの深い泉から湧き出るものとは限らない。前に紹介したトオマス・マンの「トピアス・ミンデルニッケル」が犬を愛する心の中には著しく利己的動機が入つてゐる。また世間には動物を熱愛して人間に冷刻な者が多々ある。これ等は全然愛の泉が枯れてゐるので無いが、概ね破られた虚榮心や傷けられた自尊心や失つた戀の悩みなどを動物の愛で取り戻さうとする利己的動機から出てゐる。自我を對象に没入し、對象の中に自我を見出す犠牲的の眞愛では無くて、飽迄對象を自我の中に攝取しやうといふ破壊的の愛である。ダンテの愛ではなくて、クライストの愛である。かういふ愛には往々病的な慾望と感傷とが交つて來るものである。しかもエッシュエンバムの愛はさういふ肉感的の分子はなく、又女性的の感傷的なものでも無い。ケル

レルの愛もまた根本に於て同様である。ゲエテのユーモアも同じ愛から生れてゐる。その愛は自然と人類を抱擁する大きな強い愛でなければならぬ。ケルレルの詩に次のやうなのがある――

## 春の信仰

Frühlingsglaube

菫の香のごとくほのかに

Es wandert eine schöne Sage

美しき傳説さまよふ、

Wie Veilchenduft auf Erden um,

日ねもす夜もすがら

Wie sehnend eine Liebesklage

憧がる、戀のなげきか。

Gehst sie bei Tag und Nacht herum.

それこそは人類の窮極のよろこび、

Das ist das Lied vom Völkerfrieden

いつかは夢ならぬ事實となりて

Und von der Menschheit letztem Glück,

復り來べき黄金時代、

Von goldner Zeit, die einst hienieden,

世界平和の歌のひびき。

Der Traum als Wahrheit, kehrt zurück.



その時は四海の民唯一の  
 主なる神に祈り  
 豫言者の尊き言葉  
 日月の如く輝かむ。

Wo einzig alle Völker beten  
 Zum ein'n König, Gott und Hirt.  
 Von jenem Tag, wo den Propheten  
 Ihr leuchtend Recht gesprochen wird.

そを狂妄の夢とみる  
 利己心の反抗ぞ  
 聖き世に残る唯一の  
 恥辱と罪惡なる。

Dann wird's nur eine Schmach noch geben  
 Nur eine Sünde in der Welt:  
 Des Eigen-Neides Widerstreben  
 Der es für Traum und Wahnsinn hält.

この希望を失ひ、更に  
 惡意もて棄てし者は  
 生れ來ざりしこそよけれ

Wer jene Hoffnung gab verloren  
 Und hässlich sie verloren gab,  
 Der wäre besser ungeboren:

生きながら墓穴に住めばなり。 Dann lobend noch, t er schon im Grab.

又エッセンバハの警句集(Aphorismen)の中には、例へば次のやうなものがある。  
 共に彼等の愛とユーモアとの性質を語るものと云つて可い。

信頼は勇氣にして忠實は力なり。  
 今の人々は唯非難するために生れ來ぬ。アキレスの全身に於てたゞ踵のみを見る。  
 幸福なる厭世論者よ。いかなる歡喜を彼等は感ずるならん、この世に歡喜無しと證  
 明すること。

人に向つての最大の寛容はその人に對する絶望より生まる。  
 勝て、されど凱歌を擧ぐるな。  
 伶俐なる人間が最も劇しく嘲笑するは彼が不得手なる「雅量」なり。  
 汝自身を愛すれば愛するほど汝自身の敵となる。  
 山を移すに足る信念ありとせば、それは自己の力に對する信念なり。  
 凡庸人の好意は鬼火の如し。試にその輝く光に従へ、必ず沼澤に陥らん。  
 世の中には自分の良人を、尼が僧院を愛するやうに、盲目なる、感溺的の、謎めいた愛情  
 で愛する女あり。

同情とは略服を纏へる愛情なり。  
 所有して少しも與へざるは往々盗むより惡しきとあり。

弱者の同情は熱無き焔の如し。  
無限ならざる慈悲はその名に値せず。  
大多数の人の同情は好奇心と勿體らしきとの混じりしものなり。  
早過ぎる諱たがひより慙あはれむべきは無し、  
子供等の面前にて嘲弄又は虚偽の言葉を吐くは死に當る罪を犯すものなり。  
寡言なるものは常に人を威壓す。自己の無價値といふ秘密より他の秘密を懐かず  
とは信じ難ければなり。  
甘やかされたる子供は最も不幸なる子供なり。幼にして既に暴君の苦みを知れば  
なり。  
弱者の勇氣と強者の仁慈——兩つながら崇拜に値す。  
吾々の不良なる性質に對しては永久の調か恥づべき和議かの二途あるのみ。  
利己主義者との交際は、吾々もいつか自衛上相手と同じ缺點に陥るが故に甚だ有害  
なり。  
高き歡喜には感謝の情交り来る。  
能力と實行との間には大洋ありてその底に難破したる意力横はれり。  
偉大なる男子は必ずしも偉大なる人間にあらず。  
他人に對する同情より、熱き、勇ましき慈悲生れ、自己に對する同情よりは優柔怯懦な  
る感傷生る。

棕櫚は曲がれども杭は曲がらず、  
吾々は苦みに對して反抗すれども、誰か過去に苦しみを持ちしを希はざるものあら  
ん。

頓智家は智慧の國に於ける乞食なり。僥倖が投げ與ふる思ひつきといふ施物にて  
命を繋げばなり。

無知なる陽氣は快活の歪よこしまみ面おもてなり。

愛は惱みなり、無情は死なり。

凡ての人を愛せよ、さて、惱める者は汝が子の如くあれ。

この博大な愛の發現はまたドストイエウスキなどに於て著しい。彼の作にも  
人類に對する深い博い愛と共に動物に對する温い同情が見られる。例へば、虐げ  
られし人々の中の犬、死人の家の中の犬、山羊、鷺などがそれである。

ドストイエウスキの愛はケルレルやエッセンバハの愛と同質のものであるが、  
然し彼には餘りユイモアは認められない。然らばユイモアは愛を前提とするが、  
愛は必ずしもユイモアを生まないものであらうか。この問題及一般に滑稽的人  
生觀とは何であるかといふことを最後に論じやうと思ふ。

## 七

フォルケルトは笑に對してそれ〴〵利害關係を異にする氣分、態度、人生觀等を擧げて次のやうに論じてゐる。

ユーモアはこの世の種々の内容及價值との自由な放縱な戯れであるから、人生に對して純ら或は主として生眞面目な態度を取るやうな傾向はユーモアにとつて不利な關係をなす。義務觀念一點張り、凡ての自他の行動を悉く道德的標準で律しやうとする人はユーモアを生み出す氣隨と自讃 (Willkür und Selbsherrlichkeit) を持つことは不可能である。

そして、かういふ窮屈な道學者流と同様に峻嚴な合理主義も亦ユーモアには不利である。物や人に對して几帳面な論理的眼光をのみ働かせ、認識、説明、論證の態度から如何にしても脱却することが出來ずに、この世を只管論理的に組立てられたものと思ふ者は自由な主觀主義の氣隨な振舞を喜ぶことは出來ない。

世界觀が如何なる形を取らうとも、ユーモアにとつて有利なる爲には個性の權

利、主體の自由に對して理解を持たなくてはならない。強い個人主義的傾向を持たないものはユーモラスな人物になるには不適當であらうし、又他人のユーモアを充分理解することもできない。個人の自由觀念に廣い活動範圍を與へ、個性そのものゝ高き價值を認めるのはユーモアにとつて有利な地盤を作るものである。個人を凡ての方面に於て峻嚴な規範の下に置き、常に個人に於て一般的に通用するもの (allgemeingültig) をのみ承認するやうな人生觀はユーモアの生活の根元を斷ち切るものである。滑稽的氣分とか、我儘とか、遊戯とかいふものを單に餘事と見、或は一步進んで排斥すべきものとみるやうなことをせず、そこに偉大なる光輝ある或物を見出さなくてはユーモアに對して刺戟となり又之を生み出すことはできない。スピノーザの哲學は自我の沒却を説く故に自我の無限の自由を萬象に對して置く可きユーモアには不利である。しかし、嚴格なスピノーザ派の學者が強い無滑稽の人物たるを要しない。その人の感情、實際生活、行動等の中には必ずしもスピノーザの哲學から導きえられない、往々之と矛盾すべき種々の方面があるであらう。フィッセルが美學を書いたときに彼は嚴格なヘーゲリアンで

あつた。唯理的な個性を宇宙精神の犠牲とすることを説く哲學からは彼の美學に現はれた深い滑稽の理解は出て來ないであらう。彼の人生觀、生活氣分、生活態度がしかく徹底的にユーモアに浸透する能力を助長したのである。シルレルの「ワルレンシユタインの陣營のユーモアがカントの哲學から出たので無いことも同様に明らかである。

又、生の矛盾拮据に對する理解はユーモアに有利である。ヘーゲルの所謂否定力ネガティブの秘密の仕事に對する眼光、積極と消極との間の對立的遊戯に對する犀利な眼は有利である。従つてユーモアに取つてはこの世の厭世的、悲觀的方面に對する理解と眼光とをもつ世界觀は有利である。ユーモアの背後に立つ樂天觀が淺薄なればなる程、そのユーモアは皮想的になる。世界觀が強い悲觀的傾向を持つ場合に於てのみ、世と戯れ、同時に世の矛盾と缺陷の淵とを千里眼的に掘り探る深刻なユーモアが生れるのである。そして此の種のユーモアのみユーモアてふ概念を充たしうるのである。沙翁の「ハムレット」、ゲーテの「メフィスト」、ジャン・パウル、バイロン、フィッシュェルの「Anch Einem」等を觀ればこの間の消息が分かるであらう。

フィッシュェルはユーモアが「意識の甚深な不幸を前提とする」とを説き、また、ユーモリストの無限の苦痛感といふことを述べた。しかし、厭世主義はユーモアに於ける究意的なものでは無い。厭世的のユーモアもあるが、その中に於てもなほ厭世的世界觀に對立して優越感が存立する――。

然らば前に述べたドストイエウスキの如きはどの態度に屬するかといふに、敢て道學者流の嚴肅主義でも無く、又乾燥無味の合理主義でも無く、人生に對して充分の理解と同情とを持つてゐる。それにも拘らず彼がユーモラスな作家で無いのはどういふ理由であるか。

そも滑稽的に人生を觀るといふことはどういふ意味であるかといふに、同じ滑稽にも幾多の種類があり、階段があると同時に滑稽的的人生觀といふ意味も亦多様である。即ち「譏諷と自嘲」、「傍觀的態度」、「樂天的態度」といふやうに前に説いて來たのであるが、今、その共通な點を挙げると、いづれにしても、多少人生を傍觀するやうな態度がある。最後の樂天的態度に至つては人生に對して充分な理解と同情とを有つてゐる限り、可なり嚴肅なものと云はねばならないが、滑稽そのものゝ性質上

矢張そこに多少とも優越感の作用を否認することが出来ない。藝然と人生の中へ突進して、其奥義を探り、人と共に泣き、笑ひ、怒り、闘ひ、救ひ、慰め、勵ますといふやうな眞剣な態度で無く、多少上から、又は傍から人生を眺め、人様々の運命に對して敢て自ら手を下して之を動かさうとはせず、寧ろ手を拱いて微笑してゐるといつた趣がある。約言すれば、實行的で無くて觀照的なのである。實際的で無くて審美的なのである。事物に即して、しかも離れたところがある。「生活は嚴肅にして、藝術は快活なり」とシルレルが云つたのもこの間の消息を傳へてゐる。觀照的態度は一種の享樂的態度であり、又動もすれば利己的態度に陥る。

ドストイエウスキの如く徹頭徹尾利己的、沒我的、犧牲的態度の作家に於ては、たとひ藝術家たる限り充分觀照の眼を持ち、人生を客觀的に眺める餘裕を存しても、猶ユーモアを生むには餘りに切實に、餘りに對象に即してゐる。貧しき、又は虐げられた人々に對する彼の同情は、笑を容れるべく餘りに熱烈なのである。彼の態度は笑ふには餘りに切迫詰つてゐるのである。如此滑稽的態度は多少遊戯的、傍觀的のものではあるが、然し前にも述べた通り、滑稽が深さを増すに従ひその背

後には沈痛な、嚴肅なものが潜むやうになる。この點を看過すると大なる誤解が生ずる。眞面目と不眞面目といふこともその一例である。世人がよく藝術家又は藝術的傾向の人々の觀照的、審美的、享樂的又は滑稽的態度を難じて一口に不眞面目だと貶するのは實は唯實際的、實行的、或は功利的で無いといふことを意味するに過ぎないことがある。

所謂「不眞面目」な人々の中にも却て所謂「眞面目」な人々より眞の意味に於て眞面目な人が澤山ある。「眞面目」に機械のやうに働く人は一方から云ふと人生に對して極めて不眞面目な人と云はなければならぬ。何故ならば、自己及人生に對して無反省に、唯牛馬のやうに活動し、口腹の慾を充たして能事終れりとなす醉生夢死の徒は、假令陽に「國家のため」を標榜してもそれが本心の聲で無い限り、結局人間としての眞面目を發揮せず、天分を自覺せず、從て眞の責務を果さないものだからである。又一見「不眞面目」な人間でもそこに絶えず反省の作用のある限り、案外に眞面目な方面のあることを思はなければならぬ。苦がり切つた人物が眞面目で笑つてゐるものが不眞面目だと速断することは出来ないのである。

況や、觀照的態度の者を「遊民」として社會から排斥しやうとするものは只管實利的眼光で、入生を見るもので、所謂「笑つて損をした」といふやうな相貌の俗人、術學者、偽善家の類である。甚深熾烈の愛は終に人を驅つて觀照から實行へ移らせるものではあるが、しかも人各々その天分を異にする限り、必ずしも各人に「實行」を強ふることとは出來ない。そして、吾々は觀照するもの、靜的な「愛」と背後に潜む「眞面目」とを洞察し、理解する眼識と雅量とを持たねばならない。

笑はなくても生命に影響は無いから、笑は無用のものであるといふのは、花を贅物として直ちに菓實ばかりを得やうとするものである。

試に花の無い野を眺め、笑の無い家を想像して見るが可い。「笑」を解するのはやがて「藝術」を解する所以である。緊張した近代生活は漸々「笑はぬ人々」を作つてゆき、一方にはまた「苦がい笑」、「卑しい笑」を生んでゆく。「失はれた笑」は何時復つて來るであらうか。

## 附録

### 笑の生理及心理

#### 一 ヘツケルの笑及滑稽の生理

##### イ 揶の及ぼす生理的影響

肉體的原因から來る笑は、揶 (der Kitzel) に依て惹き起される。揶は皮膚神經に對する急速の、極めて輕微なる反復性刺激から成り立つ。シッフ (Schiff) の報告に依ると、絶えず刺激の強度が變ること、又は中絶することが肝要であるらしい。何故なれば、彼に従ふと、指頭で急速に皮膚の異つた部分を可なり強く衝く時にも笑が惹き起される。笑の目的觀を試る場合に、まづ之を咳嗽及嚏と比較してみると、後者は刺激物を直接に排斥する目的であるが、笑にはこの事は無い。即、吾々は先づ他の反射的運動に依て、揶られる部分を刺激から遠ざけやうとする。故に笑は揶と

は直接の關係が無く、間接に擽に依て惹き起された有機體の或變化と關係を持つてゐるやうに思はれる。從てこの變化を考察する事が當面の問題である。

ナウマン (Dr. Oswald Naumann) が脊柱を切り離した蛙に就て實驗した結果に依ると、輕微な電流の刺戟に對して結腸間膜肺臟及蹼に於ける血管内の血行が著しくその速力を増し、又各血管が著しく狹窄せられたのを認めた。この現象は全血管組織に互つてゐることが可なり確實に推定せられる。なほ、生きた蝙蝠の翅及人體の一部に於ける反復した實驗も同様の成績を擧げた。そしてこの刺戟に對する反應は結局交感神經の反射的刺戟に伴ふ現象と同様である。即ち血管、殊に平滑なる筋肉纖維に富む小動脈の狹窄がそれである。ノートナアゲル及ハイデンハイン等の實驗に依て證明せられたやうに、やゝ強い皮膚刺戟は交感神經の反射的刺戟と腦膜血管の狹窄とを伴ふ。然し擽のやうに輕い、一時的の皮膚刺戟が果して交感神經に反射作用を起させ得るものであるかどうかは疑問である。殊に動物は人間の笑に相應する擽の反應を餘り知らないから、實驗材料として不適當である。ところが幸にも私は人體に於て適當の對象を見出した。それは瞳孔で

ある。

交感神經は瞳孔の擴大筋にも通つてゐるのであるが、交感神經の直接又は反射的刺戟は血管狹窄の外に、瞳孔の擴大を伴ふのである。また之を逆に證明することも出来る。さて擽に際しての交感神經の刺戟を知る實驗は至て簡單である。

先づ被實驗者に或一點を凝視せしめて、柔かい刷毛の類で特に感覺の鋭敏な場處、即ち耳とか、上搏の内側とか、踵とかいふ處を擽りつゝ、瞳孔を観察する。勿論前以て瞳孔の大きいさと、呼吸の變化に對するその反應力とを確かめておく必要がある。すると、有效な擽の後直ぐに、僅少ではあるが、明瞭に識別し得べき瞳孔の擴大を認めるのである。被實驗者が若くて神經が鋭敏であればこの實驗は殆ど常に成功し、屢々反應する中に始めて無反應になるが、この際には一方に擽に對する感受性も鈍つてゐるのである。老人になると最初から瞳孔の反應が鈍いので成績の擧らぬことが度々ある。

右の實驗に依て擽が交感神經の反射的刺戟を惹き起し、從て血管の狹窄をも伴ふことが分かる。そして、擽に特有の斷續的刺戟に應じて、瞳孔の擴大に動搖を呈

し、従て又血管の狭窄にも動搖を來すことが豫期せられる。

前述の如く、血管の變化は特に小動脈に著しいのであるから、小動脈を豊富に備へてゐる脳は殊にこの變化を蒙るわけである。さてまた血液循環の變化は特に腦に於ては事情に依て重大なる結果を生ずることは誰も知る事實である。そしてその際短時間を隔て、間歇的に反復せられる刺戟と之に依て生ずる血管の緊張力の可なり大きい動搖とが上記の危険を更に大にすることも明かである。皮膚の特別に鋭敏な部分を比較的長時間擦ると容易ならぬ侵害を神経中樞に與へることは何人も經驗上知つてゐる事であつて、宗教裁判の行はれた當時往々囚人を撲り殺したことがあるといふ事實が更にその證左となる。

何故特に腦が壓力變化に依て危険を受けるかといふと、その理由は、第一この器官は最も高等なだけに又最も脆弱であるのと、第二に硬い頭蓋骨で包まれてゐるので、他の器官の様に増大した血管の壓力を避けることが出來ないうで、自然種々の要素の壓縮を惹き起し、一方には、反對に血管組織に消極的（ネガティブ）の變化がある場合には壓力解除に伴ふ種々の危険が起り得るのである。そこで、自然は之に對して様々

の保護手段を講じてゐる。第一に頭蓋窩に於ける廣大な靜脈組織に依て血液の流出が非常に容易にされてゐるので、血管の壓迫が加はるときには比較的迅速に調節が出來、反對に壓力が減少するときには靜脈血の阻止に依て血液の補充が容易に行はれる。即、頭蓋窩の靜脈には瓣が缺けてゐるからである。次の保護機關は特にヒルトル(Hyrtl)が説明してゐる血管の聯絡であつて、之に依て腦の靜脈と脊髓の靜脈とが交替的に血液の充實を營んでゐるのである。然し最も重要な機關は所謂「腦脊髓液」と稱する液體の作用であつて、この液は腦と脊髓とを包む二つの軟膜の間に貯藏せられて獨特の作用を營んでゐる。即、腦血管の壓力が加はるときには脊髓の蜘蛛膜腔に退き、壓力が減ずるときには頭蓋窩へ流れ込んで危険な變化を調節し、依て以て腦と脊髓との機能維持に必要な中庸を得た壓迫状態を確實ならしめるのである。

さて、問題は、以上の保護手段が果して擧に依て惹き起される血管變化に伴ふ腦の内部の壓力變化を調節し得るや否やといふことである。この問題を解決する爲には、循環機關に於ける變化と腦の蒙る壓力との關係を更に精密に研究しなく



てはならない。

搏に依る交感神経の刺激がある程度に達すると血管の著しい狭窄を惹き起すが、軽い搏の際に起る可き軽度の刺激に際しては僅少の血管狭窄の外にもう一つ一層重要な徴候として擧ぐ可きものがある。それは脈管壁に於ける筋肉組織の緊張力の増大である。

この緊張力の増大はたとひ血管の狭窄を伴はない場合でもそれ自身腦の壓迫状態に重大なる影響を及ぼすものである。何故なれば、脈管内を流れる血液が腦に加へる壓力は管内の血液が有する緊張力とは全然同一で無い。寧ろ緊張した脈壁に依て血壓の著しい部分が腦白質から抑制せられ、云はゞ阻止せられる。壁の緊張が増せば、増す程腦白質の受ける壓力減退の度も増して来る。ところが前記の機械的保護機關は單に血量の増減を目的とするのであつて、單獨には搏の際に増加する脈管緊張の結果たる壓力變化を調節することは出来ない。

この側から來る危険に對する保護機關は別にある。それは種々の方向を取て作用する呼吸の調節力である。呼吸が血行に對して如何に大なる影響を與へる

かは人の知悉するところである。而して穩かな、淺い呼吸に際しては、伴生する複雑な事情に依て、動脈及靜脈に對する呼吸の種々の影響も調節せられ、除去せられるが、強制的の呼吸運動、特に呼吸の自由が妨げられる場合には、血行状態に重大な變化が起る。即、息を吸ふ時には横隔膜の下降と肋骨舉上との爲めに胸廓が擴がり、その内容、即肺臟、心臟及心臟へ出入する大脈管は、より少き壓力の下に置かれる。之を調節するために、第一に外界の空氣が肺臟に流れ込んで之を擴大し、第二には同時に大脈管の血液が心臟の方へ引き寄せられ、それに依て一方には靜脈の血行が多少妨げられるが、他方に於て遙か大なる度合で動脈内動脈壁は薄いので壓力のネガティブの變化には遙に反應し易い)に於て心臟へ向つて進む普通の血行が著しく容易になり、輕快になる。息を吐き出すときには丁度反對の現象が起る。肋骨下降と横隔膜の壓迫とに依て胸廓は狹められ、著しい壓がその内容に加へられる。従て空氣は氣管を通つて肺臟から逃れ出るが、同時に同じ原因から心臟へ向ふ動脈血の流れは著しく困難になる。この血行障礙は靜脈内の血行がかの壓力増加のために得る些少の利便では償はれない。殊に非常に劇烈な加之聲門の

完全又は不全閉鎖例へば、笑聲を發するときに、必要のやうな依て著しく高められた呼吸的壓迫に際しては、心臓右室に向ふ血液の逆流が大に妨げられる。その結果として第一に心臓に最も近い動脈へ血液が逆流する。特に頸動脈などが著しく膨れ上り且緊張する。この動脈血の過剰が脳にも及ぶことは明かである。脳からも血液の流出は妨げられてゐるからである。之に依て勿論脳に著しい壓迫が加へられる。脳静脈からの血液流出が困難になり、自然脈管の膨脹が起るからである。

さて吾々は、笑の影響として交感神経の反射的刺戟とその結果たる脳に對する血壓の急劇なる減退とを豫想すべきであるといふことを想起してみると、今述べた脳の壓迫を増大する強制的の呼吸運動は、笑に依て起るべき危険に反抗する最上の手段であるといふことが躊躇無しに認められる。實際自然は自動的作用でこの手段を利用してゐるのである。何となれば、笑とは音律的に斷續する極めて強制的な之に伴ふ音聲に依て困難にせられた呼吸に非ずして何であらう。吾々が劇しく笑ふ者の容貌を見ると、直ぐ紫色を帯びた顔と頸動脈の膨脹とに氣が附

く。これは必然腦にも及ぼすべき動脈の充血を示すものである。

以上の研究の結果を總括すると、

「笑は、笑に依て惹き起された腦に於ける消極的の壓力變化を之に相當する壓力増加に依て調節する任務を帯びた適切な反射運動である」と云ふことが出来る。

この結論に對して可なり有力な根據となるのは刺戟と呼吸運動とがその斷續性に於て一致してゐることである。吾々は笑の特色として皮膚刺戟の絶えざる變化と斷續とを見るが、笑に於ても全く之と一致してリズムカルに斷續する呼吸運動を認めるのである。果して個々の皮膚刺戟にそれぞれ個々の呼吸が相應するか否やは確定し難いけれども、全體としての一一致は餘程著しいものである。殊に之を苦痛の叫喚に際して起る事情と比較して考へ合はせると一層顯著である。肉體的苦痛は、鋭敏な神経を比較的強く、且その效果に於て比較的持續的に刺戟するときに起り、そして、ノットナアゲルとブリーゲルの實驗に依ると血管の持續性痙攣と強い絶えざる狭窄とを惹き起すが、後者はナウマンが證明してゐるやう

に早晩血管麻痺とそれに相應する多少の血管擴大に變ずるのである。最初の連續性血管狹窄に一致するものは連續性呼吸運動なる叫喚であつて、これは笑と同一の目的を有つてゐる(苦しい時に泣き叫んだり又は呻いたりすると樂になるといふ理由は茲に在る)。次に起る血管麻痺(即ち腦壓の増加を惹起する)に相應するものは涕泣の第二階段なる所謂歔歔であつて、これは強制的吸氣運動として前述の如く腦の血壓を減ずるのである。

### ロ 滑稽の生理

前章に於て吾々は笑といふものに、それが慥に依て惹き起される限りに於て、生理解剖的根據を與へる事に成功したが、之に依て少くとも(假令直接の類推は許されなくても)滑稽の結果としての笑を研究する際にどういふ標的に向て進むべきかといふことに就て明かな指針を得た譯である。

先づ滑稽が作用する際には慥られた後と同様の生理解剖的變化が起るのでらうと云ふことは前以て推察せられる。即ち交感神経の斷續的刺戟に伴ふ腦血管の

斷續的收縮である。慥に際しての交感神経の刺戟を證明する實驗は、滑稽の場合には餘程困難であることは見易い道理である。人が誰かに滑稽な話をするときには普通聽者は眼を或一點に据ゑてゐないから、その瞳孔の有様を精密に觀察することは出来ない。一方には又滑稽の効果は、人に觀察せられてゐると感じるときには大抵止んでしまふものである。それにも係らず幾度も失敗を重ねた揚句二三の實驗に於て、實際滑稽の影響として瞳孔の擴大を明瞭に觀察することができた。

ヘッケルは茲て筆を改めて、滑稽の心理的説明を試み次の結論に到達してゐる――  
滑稽の本體は感情の急劇なる角逐(Wetstreit)である、即ち快と不快との間の急速度の轉換である。

ヘッケルは之を「光輝」に比してゐる。彼に従へば、光輝は視野の非常に迅速な錯綜である。そして、かく生理と心理との兩方面から研究した結果を次のやうに綜合してゐる――

吾々は不意の驚きに際してまづ皮膚顔面のみで無く、恐らく全身に互つて蒼白になるのを見る。この褪色は血管の突然の狹窄から起るのであるが、その結果心臓は一瞬間靜止した後、前よりも一層早く一層盛んに收縮する。血管が狭く

なつた爲めに血行が一層困難になるからである。驚愕の際の血管狭窄に次で早晩血管擴大が起ると、蒼白色は多少とも飽和した紅色と代る。けれどもこの紅色は羞恥の場合のやうに一樣でも又強くも無い。その理由は、滑稽の場合には狭窄と擴大とは寧ろ皮膚の静脈に起り、羞恥の場合のやうに毛細脈管の全組織に互らないからである。之を要するに一回の驚喜は一回の交感神経の刺戟を惹き起し、之に相當した小静脈の狭窄を伴ふのである。

従て吾々が滑稽の本體として證明した斷續的の喜悅的興奮は交感神経の斷續的刺戟を豫期せしめる筈である。

ヘッケルの快感不快感角逐説は心理學者の間には異論が多い。リップスは之を「心理學上の荒唐無稽」(ein psychologisches Urtum)と云ひ、フォルケルトは「全然空想の領域に屬するもの」と評してゐる。要するに物理的現象を直ちに心理的現象に比して、容易に類推を試たのを非難してゐるので、感情の競争的轉換といふやうな事實は無いといふのである。然し表象のそれならば可能であるとリップスは説明してゐるが、とにかく誤謬はあつてもヘッケルの説には非常に暗示的の點が多く、滑稽の理論的方面に一光明を齎したことは否定することが出来ない。リップスの如きもその主著に於て劈頭第一にこの人の説の批評を掲げてゐる。そこで、次に参考として快感不快感角逐説に基いた彼の滑稽論の骨

子及滑稽の分類法を掲げる。リップスの滑稽論と對照してみると啓發せられる點が多からうと思ふ――

(A) 快感を生ずる諸條件

1. 滑稽的對象に含まれた表象の一つと論理的、實際的又は觀念的規範との一致。
2. 與へられた二つの表象相互間の一致――即、論理的、實際的及觀念的規範、又は觀念聯合 (Ideensoziation) の規範に關係して生ずるもの。

(B) 不快感を生ずる條件

1. 滑稽的對象に含まれた表象の一つと論理的、實際的又は理念的規範との不調和。
2. 滑稽的對象に於て與へられた二つの表象の論理的、實際的及觀念的規範に關する不調和。

(C) 右の快感、不快感をそれぞれ對照的に結び付けると次の四形式が出来る――

- I. A. 1. — B. 1.
- II. A. 2. — B. 1.
- III. A. 1. — B. 2.
- VI. A. 2. — B. 2.

之に内容を與へると次の様になる――

I 單純的滑稽 (Das einfach Komische)

第二編 附錄 笑の生理及心理

- 1. 低級滑稽 (das niedrig Komische)
  - 2. 外觀的素朴 (das Pseudonative)
  - 3. 素朴 (das Naive)
- \* ユーモア (Humor) は「素朴」が意識的、隨意的になつたもので、笑から涙への過渡を示してゐる。ユーモアに和解的、非和解的、又主觀的、客觀的等の別がある。
- (II) 表象統一の滑稽 (Das Komische mit zwei vereinbaren Vorstellungen) — 正當なる惡意的嘲笑 (gerechte Schalenfreude)

- (III) 表象矛盾の滑稽 (Das Komische m. zwei unvereinbaren Vorst.)
  - 1. 反豫期の滑稽 (das Komische der getäuschten Erwartung)
  - 2. 滑稽的時代錯誤 (der komische Anachronismus)
  - 3. 描寫の滑稽、一名「作り替へ」又は「もどり」(Das Komische der Darstell. Wng. oder das Burleske u. Heroisch-Komische)

- (IV) 表象角逐の滑稽、一名「機智」(Das Komische mit dem Wetstreit der Vorstellungen oder der Witz)
  - 1. 表象聯合の滑稽 (Assoziations-Witze) — 「地口」又は「語聲合」(die Klangwitze)
  - 2. 二重意義の機智 (Doppelsinn-Witze)
    - a. 同語異義の洒落 (das homonyme Wortspiel)
    - b. 語義制限の洒落 (limitierende Wortspiele)
    - c. 兩義的構成の機智 (Witze aus doppelsinniger Konstruktion)

- d. 誤解の機智 (Doppeldentungs-Witze)
- e. 反語 (Die Ironie)
- f. 假作的反語 (der Verierwitz)

序でに簡單な例を以て説明に代へておかう。リップスの滑稽論に評註を加へる機會が來る迄滑稽の分類法として姑く之を擧げておくのである。

(I) 單純的滑稽

- 1. 低級滑稽 肉體的醜(不具者、老衰者、醜婦等)、道德的醜(不道德、虛偽等)、實際的乃至論理的、不調和(未熟、暗愚、背理等)に對する笑。
- 2. 外觀的素朴 「素朴」と酷似して、然も少しく異なるもの。即高尚な觀念と唯外觀的に或は制限的に一致するところからこの名が出てゐる。例、四歳になる牧師の娘が始めて教會へ連れて行つて貰つた。家を出るとき「教會の内ではよく大人しく静かにしてゐなくてはなりませんよ」と云ひ聞かされた。歸つてから「どうでした」と訊ねられると、「え、皆さん大人しかつたけれども、うちの御父様だけが大きな聲を出して騒いだの」と答へた。

- 3. 素朴 小兒の天真爛漫の言行などから現はれる滑稽。一方から見れば不合理乃至非社交的であるが、一方から見れば全く眞理であるやうなもの。ある子供が客にかう云つて分疏をした、「お母さん、すぐ來るよ、今、髪を載つてるところなの」。随分露骨ではあるが、虚飾を知らない無垢な心が現はれてゐる。無論この母は髪を着けてゐ

たのだ。この滑稽から「片眼で笑ひ、片眼で泣く」ユーモアへの距離は一步である。

(II) 表象統一の滑稽 赤い鼻の所有者を笑ふ理由は種々あらうが、「あまり飲むからだ」といふ皮肉な感情も一つの理由になる。「好い氣味だ」といふのがこの種の笑の特色である。然し、自業自得とは云つても應報乃至刑罰が度外れに重い時には笑は出で来ない。茲に一枚の繪がある、一人の百姓が一生懸命に樹の枝を挽いてゐる、その枝の端に自分が腰を懸けてゐるのだ。この繪を見て、この百姓が枝と一處に落ちて尻餅を搦く有様を想像すれば可笑くなる。けれども若しその枝の下に深い壑でも描いてあつたら最早笑へない。

(III) 表象矛盾の滑稽

1. 反豫期の滑稽 大山鳴動して一鼠出づ。道化役者が高く張つた綱を飛び越えるやうな身構へをして、遠方から勢込んで馳けて行き、綱の傍で急に身を屈めてその下を這ひ抜けた時の笑。この場合、實は観客が馬鹿にされたのであるが、直ちに自己の客観化が行はれ、自分で自分を笑ふことが出来るのである。この客観化が成立たない時には傷けられた自尊心の結果として笑の代りに怒が頭を擡げる。

2. 滑稽的時代錯誤 十字架の耶蘇の下で番兵達が骨牌をやつたり喫煙したりしてゐる圖など。

3. 描寫の滑稽 「作り替へ」又は「もちり」には二種ある。「擬形」(Parodie)はある有名な詩文などの形式に滑稽的内容を盛るもので、狂歌、狂詩等に此種のもものが多く見出される。

之に反して變裝(Travestie)は在來の眞面目な材料に滑稽的形式を與へるものである。

パロディの例には、「御客が來りて基で長居」(お經は二階でのべ鏡)、「梅は酸い生姜は辛い世の中に何とて茄子の蔓無かるらん」(梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に何とて松のつれなかるらん)などがあり、又「釣れますかなどと文王傍へ寄り」の如きはトラヴェステイの例と見ることが出来る(尙狂言の文句には謡曲の「もちり」が澤山ある)。

(VI) 表象角逐の滑稽、一名機智

1. 表象聯合の滑稽(地口又は語路合) シルレルの「ワルレンシュタインの陣營」に出て來る有名な僧侶カフチーヤの説教の如きは適切な例である――

Der Rheinstrom ist worden zu einem Peinstrom.

Die Klöster sind angenommene Nester.

Die Bischümer sind verwandelt in Wüstthümer.

Die Abteien und die Stifter

Sind nun Raubstein und Diebesklüfter.

Und alle die gesegneten deutschen Ländler

Sind verkehrt worden in Elender.

又次の例は同時に「パロディ」にもなつてゐる――

「関子十五」(三五十五)、「九月初日命は惜し、(籠は喰たし命は惜し、(日本百科大) 此の「似而非」の滑稽は必ずしも言葉の響きの上の類似に限るのでは無く、更に他の種々

の關係に於て求めることが出来る。一例を挙げれば、ハイネは或恐ろしく醜い女の事をかう皮肉に評してゐる、「この女は多くの點でメロスの美神ケレスに似てゐた——大變時代が附いて、矢張り齒は一本も無く、黄色がかつた皮膚にはぼつ／＼白い斑點があつた」。この種の「智」に正當な惡意的嘲笑(gerichte Scherz)が伴ふものを諷刺的機智(satirische Witze)又は毒口(Sarkasmus)と名ける。

2. 二重意義の機智

a. 同語異義の洒落 一の言葉が兩義、殊に普通の意味と形容的の意味とを兼ね具へてゐる場合に起る洒落である。ハンナがトビーヤスを *Spinnen*(紡績)で養つたと先生が云ふとある女の兒が身震をして「まあ *Spinnen*(蜘蛛)なんぞ喰へたんですか?」と不味かつたでせうね」と云つた。これは元來前述の「外觀的素朴」の例であるが、若し之を大人が故意に云つたとすれば同語異義の洒落になるのである。そして之に人を愚弄する傾向が加はればクローノイ・フィッセルの所謂「語義曖昧の洒落」(Zweideutige Wortspiele)となる。尙次の二例は頗る味はふ可きであるが、翻譯すると妙味が失はれる——

*Welche Ähnlichkeit hat eine Frau mit einer Woge? — Beider Zungen stehen selten still.*

女と天秤は何處が似てゐる? —— 兩方の舌は滅多に休まなう。

*Warum hat Molke keinen Bart? — Weil keiner ihm gewachsen ist.*

何故モルトケ將軍には鬚が無い? —— 生へないから(比肩する者が無いから)。

b. 語義制限の洒落 最初狹義に用ゐられた言葉を俄に廣義に轉じ、又は反對に廣義から急に狹義に移すとき生ずる滑稽。前者の例としては序論に引用したシヨール・ベンハウエルの滑稽論の例の中、「巴里劇場内の逸話」(參照)が之に相當し、後者の例には次の様なのがある——

「こら、染物屋、俺の白馬を青く染めることが出来るか」「へい、煮ましても宜しければ。フレデリック大王がある陰陽師に向つて「お前は惡魔を呼び出すことが出来るさうだな」と訊ねたら、「御意で御座います、陛下、然し先方でやつて参りません」と答へた。

c. 兩義的構成の機智 前節の滑稽が單に個々の「言語」の上でなくて文章の構成上にも及ぶ場合。屢々不用意の滑稽である。ある小國の領主が、自分の玉座に侍従奴がぬく／＼と凭りかゝつてゐるのを見て赫となつて叱り懲らした、「怪しからん奴だ、貴様は殿様にでもなつた氣か、どうせその位の馬鹿だらう」。これは勿論「さう思ふ位の馬鹿」の意味であるが、然し又「殿様位の馬鹿」の意味にも取れる。これは「無意識的機智」(unbewusster Witz)の例である。

d. 誤解の機智 これも文章全體に亘る滑稽で大抵故意の曲解から來てゐる。貴婦人が客車の窓から首を出して通りかゝつた車掌に詰問した、「車掌さん、この車室で煙草を吸つてもいいのですか、車掌はかう答へた、「御同室の紳士方さへ御差支無ければ、貴様どうぞ澤山御吸ひ下さいまし」。

e. 反語 腹で思つてゐる事の正反對を云つて先方をえぐる機智。諷刺家の最も鋭い利器となる。

「ハムレット」の中から次の一節を抜く――

ハム――かういふ折に浮れいで何とせうぞい？あれを見ませ、母君の嬉しさうな顔  
附、父君がなうなつてから恰ど二時間ぢや。

オハ、いゝえ、もう二月の二倍にもなります。

ハム、え、その様になる？なりや、黒は鬼に被せながよい子や、貂皮でも被てくれうわ。

あゝく！二月も前にお死にやつたのに、まだ世間から忘れもせぬ？すれば

権門豪族の名は半年位は死んでも持つと見ゆるなう。――（坪内博士譯）

f. 假作的反語 空とぼける機智で、比較的幼稚な、低級な滑稽である。この場合相手が直ぐこちらの眞意を悟り、その矛盾に氣が附くことを前提とする。例へば、「ハム

レット」の獨白に「To be, or not to be, that is the question――だなどゝ子供でも知つてるやうな

陳腐な文句を使つたのは沙翁にも似合はない」と云ふやうなのがそれである。

## 二 滑稽の諸定義

アリストテレス(Aristoteles) 「滑稽とは苦痛ならず又有害ならざる缺點及醜惡である。(詩學第五節)

レッシング(Lessing) 「各々の不合理、缺陷と實在との各々の對照は滑稽である。(戯論第二十八節)

ジャン・パウル(Jean Paul) 「機智を被直觀的又は美的悟性と云ひ、崇高を被直觀的理性觀念と呼び、滑稽を被直觀的無理解と名づけることが出来る。」

「滑稽は無害なる不合理から生れる。(美學入門)

シヨールペンハウエル(Schopenhauer) 「笑は概念と實體との矛盾が突然認められた時に生ずる。笑はこの矛盾の發表に外ならない。一方に概念の實體包攝が愈々正しく、而して他方に兩者の不調和が愈々著明なれば、この矛盾から生れる滑稽的效果も益々強い。(意志及表象としての世界、第十三節)

フエヒョネル(Fechner) 近代の心理學者の中ではこの人が最初に滑稽の問題に觸れてゐる。彼は「快樂的、滑稽的性質を帯びた事柄を統一の原則」(Prinzip der einheitlichen Verknüpfung des Mannigfaltigen)に歸納せしめた。そして更にかう云つてゐる。「特に地口の様な比較は、一方にその統一が適切で理解し易く、一方にその差異又は統一に依る矛盾が愈々大きく、そして更に統一の方法が愈々意表に出る場合には、益々



愉快に面白く感ぜられる。(美學入門)

ワント(Wundt)の定義は少しく趣を異にしてゐる。滑稽に於ては直観又は思想の總體を形づくる個々の表象が相互に或は彼等の聯合の方法と、一部分矛盾し、一部分一致する。かくして感情の變換が生ずる。然しこの際積極的方面なる快感が勝るのみならず、特に力強い効果を收める。何故なれば、凡ての感情と同様に對照に依て高められるからである。(生理的心理學 綱要第二卷)

既に英國の哲學者ホッブス(Hobbes)が、「滑稽感は劣等なる他人又は自己に對する自我の優越感の結果として突然湧き上がる自己満足から生ずる」と云つてゐるが、この見解を更に詳説したのはグロース(Gross)である。彼は藝術以外に於て吾々が出逢ふ滑稽と審美的滑稽とを區別して、前者を全然錯誤に對する自己の優越感に歸した。吾々は滑稽なるものを見ると、自分はさういふ愚物の仲間では無いといふパリサイ人的の得意な感情を持つ。この感情は又吾々がその愚なるものを理解しやうが爲めに一瞬間その仲間入りをしその中へ入り込むやうに強ひらるゝ限りに於て又吾々自身にも相當する。何となれば美的直観の本質は内的模倣(innere

Nachahmung)に在るからである。そしてこの作用が全過程に於て主要な位置を占めて來ると一層高尚な美的享樂が生じ自己優越感に對する非審美的快感は排斥せられる。吾々の自我感情の向上は最早本來の目的では無くして、唯僅に快活な基本的情調を成す。そしてこの基調を以て吾々は常に悠々と背理の内的模倣に入り込むのである。(美學概論)

カント(Kant)「笑は緊張した期待が突然無に變ずるときに起る一情緒である。」(判斷性批判 第五十四節)

リップス(Lippis)「滑稽感はそれ自身又は吾々に取つて意義のあるもの又は印象の深いものが、吾々に取つて或は吾々の心中に於てその意義と印象の力とを失ふ場合に生ずる。」

「滑稽感はある觀察ある表象ある思想の内容が一種崇高なるものゝやうに振舞ひ、或は振舞ふやうに見えつゝ、然かも同時にその力が無いか、或は無いやうに見えるとき常に生ずる。」(滑稽とモア)

笑及滑稽に關する定義は勿論これに盡きてゐるのでは無く、英佛獨其他諸國の學者間に

種々様々の議論があり、無数の定義が出来てゐるのであるが、それ等の蒐集は之を他日に譲らなければならぬ。レ、イ、マン (Lehmann) はその「詩學」に如上の定義を列挙し、その中の代表的のものとして一方にホッブスとグロウ、スとを置き、一方にカントとリップスとを置いてゐる。然かも双方とも極めて別切な眞理を含むに係らず、まだ完全とは稱し難いと云ひ、要するに滑稽を一つの理論の下に統一しやうとするのは不可能であると云つてゐる。そして「序論」に紹介しておいたやうに、生物學的の觀察から笑の起源を兩方面から論じてゐる。即ち肉感から来る笑と、他人の缺點を喜ぶ笑、即ち優越感から来るものとの二つに歸してゐる。同様の見方をしてゐるのはサルリ (Sully) である。

この人の「笑の起源」についての研究は「序論」で紹介しておいたが、結局滑稽的印象は之を一種乃至二種の原則に歸納することは出来ないとし、大體次のやうに説いてゐる。

「そこには新奇なものに對する小兒の驚喜のやうなものがある。又勝負事を挑まれたときの愉快相な感應のやうなものもある。屢々また若い動物や小兒等が壓迫から免かれて嬉々として盛に手足を活動させる、あの壓縮の後の膨脹から来る無上の歡喜のやうなものもあるのである。」そしてベルグソンも亦笑を一つの定義で律することは不可能だと云つてゐる。(序論参照)

然し、右の定義を考察して見ると、やはり主觀的に「優越感」、客觀的に「急劇な卑小化」、生理的乃至心理的に「緊張と弛緩」といふことなどが笑又は滑稽の重大な契機なることは明かなやうに思はれる。

この「優越感」に就てはリップスは之を殆ど絶対に否認して「滑稽の死敵」とまで極言してゐるが、フォルケルト (Volkelt) は之に反對してこの契機を餘程重んじてゐる。「彼の説に従へば、滑稽は重大なものが突然無に變るとき、即ち吾々の眞面目な眞剣な態度が俄に類して不眞面目なものになるとき生ずるが (Ernst in Nichternst) この眞剣でない」「眞面目でない」といふことの續きとして、一步進んだものとして、そこに「優越感」が結び付いて来るのである。但その優越感にはリップスなどが考へてゐるやうな、情緒に囚はれた感情では無く、超越的の、飄逸な、悠揚たるもので、之を遊戯的優越感 (das spielerische Überlegenheitsgefühl) と名づけたら最も適切だらうと云つてゐる。つまり、對象とは全然離れた態度である。茲で然し第二の問題が起つて来る。それはリップスやコロン (Jonas Cohn) などが主張してゐる「滑稽は非審美的感情である」「いふ説であつて、コロン<sup>の</sup>如きは、この對象と離れるといふ點を論據としてゐるのであるが、之に對してフォルケルトは、美的態度は必ずしも感情移入に限るわけではなく、同感的及狀態的感情からも成立つのであるから、對象と自我との並立は凡ての美的觀照に共通な現象で、唯優越感に於てそれが特に強く現はれてゐるのに過ぎないと論じてゐる。

もう一つフォルケルトの説で注意すべき點は「滑稽的擬情」(das komische Leiden) といふ事であつて、これは既にフェイスヘル (Vischer) が屢々用ゐた言葉であり、またジャン・パウルも同様な意味を「擬人」(Personifizierend, anthropomorphisch) といふ言葉で云ひ現はしてゐるのであるが、フォルケルトは更に深くこの點を考察して兩者の見方の徹底しない點を挙げ、この擬情

は「價值要求」(Wertanspruch)とその要求の瓦解との兩方面に亘つて行はれることを論證した。前兩者は第一の方面だけに着目したのである。この滑稽的擬情とは、簡單に云へば、元來無意識的のもの、又は元來意識を持つてはゐるが一定の場合にそれが作用しないやうなものに對して、自己の感情を擬し、その結果滑稽感が生ずる場合を指すのである。そしてベルグソンも亦この點に着目して「笑は人間社會以外には存在しない」と云つてゐる。即、人は動物を見て笑ふが、それは人間の舉動や表情をそれに擬するからであり、又帽子を笑ふのは一片の羅紗とか麥稈とかで可笑いのではなくて、人間が帽子に與へた形や恰好が可笑いのであると論じてゐる。

なほ笑及滑稽の理論に就ては紹介すべき事が多々あるが、それは他日に譲り、今は、この方面の研究に於て一方の權威となつてゐるリップスの説を紹介するに止める。但これは氏の「美學」(Ästhetik Bd. I)からこの問題に關する項を抜萃したので、詳しい事は、氏自身も度々繰返してゐるやうに、この題目に關する主著「滑稽とユーモア」(Komik und Humor, 1908)を讀んで始めて知ることが出来る。機會があつたらしくともこの書物やフォルケルトの滑稽論(「美學大系」第二卷三四三—五六一)等を参照して詳註を加へたいと思ふ。

尙本書の骨子となつてゐる「ユーモア」と「サタイヤ」との對照は特に、レマンがその「詩學」で試てゐる。氏は主觀的及客觀的滑稽の別を論ずるよりも、「ユーモア」と「サタイヤ」との對照の方が少くとも審美的觀察に取つては重要であると云ひ、滑稽的變換を「偉大の卑小化」(Vom Grossen ins Kleine)と「卑小の偉大化」(Vom Kleinen ins Grosse)とに二大別して、之を發足點として

「サタイヤ」と「ユーモア」とを論じ、各々に就て分類を試みてゐる(「詩學」二三〇—二四一)。最後に斷はつておくべきは、本書に於ては「笑」といふ言葉を或時は廣義に(即滑稽を含んで)用ゐ、或時は狹義に(單に生理的現象として)用ゐてゐることである。

### 三 リップスの滑稽及ユーモア論

#### 一 滑稽論

##### イ 一般的定義(allgemeine Bestimmungen)

滑稽と直接に對峙するものを求めると「崇高」(Das Erhabene)でもなく、「悲壯」(das Tragische)でもなく、寧ろ「喫驚的大」(das überrasschend Grosse)である。滑稽は「喫驚的小」である。一般に云へば比較的大ききもの、印象深きもの、意義重大のもの、代りに現はれる小さきもの、印象淺きもの、意義重大ならぬもの、即崇高ならざるものが滑稽的である。小さいものが大きいものらしく装ひ、振舞ひ、しかも再び小さく、比較的虚無に見え、又はさういふ卑小なものに化してしまふときに滑稽が成立つ。そしてこの幻滅的變化が突然に起ることが肝要である。

この際二つの場合を區別することが出来る。第一には大きいもの、又はより大きいものが期待せられてゐるときに小さいものが現はれ、一見期待を充たすやうであつて、然も小さいが爲めに之を裏切る場合。第二には、より大きいものが期待せられたからといふ理由では無しに、それ自身、即本來の性質上又はある關係上、若くはそのものに結び付いてゐるある概念のために、或は其他の事情で大きいものに見え、又は大きいものとして現はれたものが再び又決して大きくは無く、吾々にとつて一の「無」になつてしまふ場合。けれどもこの別は本質的のものでは無い。大きいものゝやうに振舞ひ、次に小さくみえるといふ事情は二つの場合に共通である。

### ロ 滑稽に於ける快感の契機 (das Instrument im Gefühl der Komik)

滑稽に於ける快感は全く特種のものである。滑稽的のものは高尚な行爲や、立派な情操のやうに悦ばせる (erfreuen) のでは無くて、可笑がらせる (belustigen) のである。

この快感は極めて強度のものになり得るが、矢張眞面目な、深味のある快感とは異つて、軽い内容の貧しい、淺薄な、空虚なもので、皮相に止まり心情とは没交渉の揶揄くちやうに過ぎない。

かういふ軽い快感は、吾々の心の自然的準備の方が對象がその性質上吾々の把捉力に置く要求よりも優越な場合に起る。例へば「大山鳴動」の如きがそれである。吾々は鳴動する山を見て何か非常な事、即吾々の把捉力の作用を高度に於て要求する自然の奇蹟を期待する。吾々は心中それを受け容れるだけの餘地を作り、それに必要なだけの把捉力を準備する。ところが愈々となつてみると自然の大奇蹟の代りに小さなつまらぬものが現はれる。二十日鼠が一疋ちよろ／＼と出て来る。即「大山鳴動して一鼠出づ」(der kreisende Berg hat eine Maus geboren) である。然し兎に角山が鳴動した結果出て来たものであるから、その點だけでは吾々の期待に背かないわけである。そこで自然の奇蹟のために準備した吾々の心的把捉作用は易々として遊び半分にその對象を受け收めてしまふ。こゝから滑稽的快感が生れる。そして又これが生れうる唯一の道なのである。

## ハ 不快感の契機(das Unlustmoment)

滑稽の中には快感と一緒にもう一つの契機がある。この點は「悲壯」と共通である。即ち快感の契機と並んで不快感のそれ、或はその傾向があるのである。

自然の大奇蹟の期待は二十日鼠で充たされたやうで、また充たされない。大きいものゝ代りに小さいものが現はれた。この點に於て吾々の期待は裏切られたのである。そして「當てが外れる」(Enttäuschung)といふことはそれ自身常に不快の根據である。即ちこの不快感の契機は快感のそれと並んで滑稽の中に存する、といふより両者が一緒になつてかの可笑味(Lustigkeit)の契機を成してゐる。滑稽といふ一種新らしい感情を成してゐるのである。

この感情は勿論不快感の契機の大さによつて絶えず變化する。そして後者は、期待せられる大きいものに對して吾々がどれほど重きを置いてゐるか、それに對する吾々の興味は一般に、或は現在に於てどれほど強く、どれほど深いか、依て定まるのである。餘り強くも深くもないときには不快感の契機は快感のそれに從

屬して終には全く感ぜられなくなり、吾々は可笑味だけを感じることになる。

他の場合には又不快感の契機が極めて明瞭に感ぜられることもありうる。吾々がある事物を實際的又は倫理的乃至審美的の理由からして絶対に要求するとする。この場合に於ける滑稽感は極端な不快感であらう。例へば、ある人があつて、重大な眞面目な問題を解決する能力も意志もあるやうな風をしながら、實際やらせてみると何にも出来ないとする。この時その人間は笑ふべきもの(lächerlich)になる。この滑稽感は著しく不快なものである。

最後に又苦い最も苦い滑稽感がある。絶望的の笑といふものがある。萬事を賭してかゝつた計畫が失敗したり、事志と違つて一生を無駄にしたといふやうな人が洩らす笑である。

今私は「笑」と云つた。或人々は「滑稽」を論ずるとき、人はどういふ時に笑ふかと訊ねる。その答は、例へば「笑はうと思ふとき笑ふ」ともなるし、又「揶られるとき笑ふ」とも云へる。かういふ場合の笑は「滑稽」とは没交渉である。他の場合には勿論交渉がありうる。笑は滑稽に付き物である。然し必然的附隨現象ではない。禮儀上

の顧慮から笑を殺すこともあらうけれども滑稽感まで殺しはしない。要するに滑稽と笑とは別物である。そして吾々の當面の問題は「滑稽」であつて「笑」ではない。

## 二 滑稽的表象運動(die komische Vorstellungsbewegung)

大きいものゝやうに振舞つて小さいもの又は比較的小さいものに變化するといふ滑稽に共通な性質は、又かうも云はれてゐる。滑稽に於ては相前後する二つの契機がある。始め「錯愕」(Verblüffung)があつて、次に「解明」(Erläuterung)がある。「錯愕」は滑稽が最初過大の把握力を要求する所に存し、解明は對象が「無」になり、従て把握力を要求し難くなる所に在る。

この錯愕と解明との繼起はある更に進んだ心的作用を制約してゐる。この事を説明するのは滑稽的經驗の有様を完全に示す上に必要である。吾々の注意は「期待」を充たしつゝ、然かも充さなかつたものから離れて再び期待を呼び起したものの方へ歸る。堰き止められた統覺の波はその習性に従つて元へ戻る。「どういふ意味だらう?」と自問し、更に進んで、どうしてこんな事があり得るのだらう?」と

訝る。「山が鳴動したのにどうして茲に二十日鼠が一疋ゐるなんて事があり得るのだらう?」

茲で吾々は復「山」とその「鳴動」とに歸つて來た。こゝで復「期待」が行はれる。この期待は再び外れる。そこで最初の幕が繰りかへされる。かういふ風に暫時往復する。その中に波は漸次に靜まる、といふ意味は滑稽的表象運動が止むといふことである。

## ホ 主觀的滑稽への過渡(Übergang zur subjektiven Komik)

さて前に述べたやうに期待の充足不充足といふ概念が適合しないやうな滑稽が起りうる。少くとも適切で無いやうな場合がある。

俗に「麥酒樽」といふやうな肥大漢を吾々が滑稽に思ふときにも恐らく期待の充足不充足といふことが云へるかも知れない。誰でも人間の體は活動してゐるもの、生活機能に役立つものと「期待」と恐らく云ふかも知れないしてゐるところへ、役にも立たぬ邪魔物然たる贅肉が現はれる、とかう云へるかも知れないが、この場合

の期待(Erwartung)の意味は前の例の場合と同一では無い。即ちある物が現はれるだらう、出て来るだらうといふ、その「期待」では無い。

なほ他の場合を考へると期待の充足不充足は當らなくなる。即ち機智的滑稽、短かく云へば「機智(Witz)」の場合である。

誰か機智を弄するといふ意味は、何か意義のあるらしいことを云ふので一寸聞いた時にはそれが一定の論理的價值を持つてゐるやうに見える、かと思ふとまたそれは戯れで唯語路が合ふばかりだといふやうなことが分かる。言葉が論理的價值を有つてゐる間は吾々の注意を牽くが、やがてその價值は消失する。然し一旦吾々の注意は言葉の方へ向いてしまつたので、その内容が「無」と分つた後にも其御蔭で不相應な注意がその言葉に授けられたのである。そしてこの注意の過剰、即ち把捉作用の内的準備がその對象の價值以上に高められたところから茲でも亦快感が生れる。そして同時に前に述べたと同様の理由で不快感の契機も加はる。更にかの表象運動の動搖も起るのである。

### 客觀的、主觀的及素朴的滑稽(Objektive, subjektive und

naive Komik)

茲に吾々は原則上相異なる二種の滑稽を區別することが出来た。前者は客觀的滑稽の場合で、後者は機智又は主觀的滑稽の範圍に屬する。

既に述べたやうに、前の場合には充足的不充足的の期待といふ概念が當籤り、後の場合には一層一般的に、あるものが大を装ひつゝ眼前小に變ずる、又は同一物が相踵いで二重の色を帯びると云へる。因に客觀、主觀の別はその名の示すやうな關係を成して相對してゐるのである。前の場合には、ある人、ある物、ある事柄が客觀的に大なるものゝやうに振舞ふ、即ち一定の價值ある性質を具へ、特徴を帯び、重大な仕事を爲し遂げられさうに振舞ふ。然かもまたさういふ性質、特徴を具へず、さういふ仕事は出来ないといふことが分かるのである。然るに主觀的滑稽の場合には、ある言葉、ある舉動、乃至ある行爲がある價值、ある意義、ある眞理を持つやうな風をするのである。彼等は吾々にとつてある觀念的内容を示してゐる。この觀

念的内容は吾々が対象に付與するのであつて、しかも再び之を彼等から取り去るのである。ある言葉、ある舉動、ある行爲が吾々の眼中にある論理的重味 (logisches Gewicht) を持ち、しかも再び之を失ふといふ、この論理的重味の生滅が主觀的滑稽の特質である。

最後にこの二種の滑稽に對して更に第三者が在りうる。素朴的滑稽、即ち「無邪氣」の滑稽である。この場合に於ける大小の相違は同時に立脚點の相違である。また茲にも外觀と真相といふことを云はうとするならば、かう云はなくてはならない。「外觀」といふことは純滑稽の場合にもあるが、吾々がある立脚點を保持する間はそれは唯の外觀では無い。吾々が立脚點を移す場合に始めてその外觀は消えて真相が現はれるのである。

こゝに云ふ立脚點とは一方に無邪氣な人間の立脚點と、それから一方に吾々自身の眞に優越的の、或は優越的だと思つてゐる立脚點とである。

吾々がある無邪氣な言葉、例へば子供の言葉などを子供の本體と結び付けて考へ、又は子供の立脚點から眺めるとする。この場合にそれは正當に、正直に、或は恰

例にさへ見える。孰れにしても子供の本性の發露と見える。従て吾々が素朴といふものに於て認める一種の「氣高氣」(Erlaubtheit) を帯びたものと見える。次に吾々はその言葉を子供の立脚點から、子供の本性から取り離してそのまゝ世間の因襲、吾々の省察、吾々の知識の中へ移して、この立脚點から眺めてみる。すると今度はそれが無價値に見え、不作法に思はれ、最早伶俐では無くて、馬鹿らしくなる。即ちそれは固有の價値を失つたのである。これが素朴的滑稽の意味である。

### ト 三の 特種的滑稽(drei besondere Arten der Komik)

茲に所謂三種の滑稽とは「揶揄」(das Possenhafte)、「作り替へ」又は「ちり」(das Burleske) 及「誇張」又は「漫畫」(das grotesk Komische) である。

「揶揄」といふのは、第一に粗野な滑稽であつて、吾々はそれに對して微笑せず、笑するやうな種類である。好意的ではあつても嗤笑し、嘲笑し、笑殺するやうなものである。然し附け加へて置く可きことは、この滑稽は対象に元來附帶し、自ら發生し、吾々が対象に於て之を認めるといふやうなものでは無くて、故意に作り出さ



れた滑稽なのである。即、自己又は他人を滑稽的に見せやうとする人爲的方法なのである。

従て揆笑は第一に馬鹿者、未熟者、臆病者、又は賢者振り、巧者がり、大勇がる輩に對してその弱點を暴露して笑草にする爲めに行はれる惡戯、茶番(Posse)の滑稽である。第二には、或者が自分自身を馬鹿者、未熟者、臆病者として示し、自分の肉體上の缺點を笑草に提供する場合、又は人を笑はせるために故意にさう装ひ伴る場合がある。

最後に言語又は圖象に依る滑稽的描寫も茶番的(Possenhaft)と云はれる。それは實際的又は假裝的滑稽物を描き、物語り、報告し、又はそれを表出するのでもよければ、描寫の方法に依て事物を滑稽的に見せ、又は滑稽化するのでも宜い。殊に自他を粗野な滑稽の對象とする機智が Possenhaft と云へる。

右の例で明かなやうに、茶番的(Possenhaftigkeit)と云ふのは本來滑稽又は滑稽的のもの、それ自身の賓辭では無く、滑稽的效果を目的とする人爲的行動を示す賓辭なのである。惡戯の犠牲物が Possenhaft なのでは無く、惡戯それ自身がさうなの

である。道化役が装ふ痴愚では無く、彼の演戲そのものが滑稽なのである。言葉や形で描寫せられた滑稽の物では無く、描寫自身が茶番的なのである。同時に又描寫それ自身では無く、描寫が一定の内容を持ち、又は一定の手段で一定の滑稽的效果を生ずる限りに於てさうなのである。

この揆笑又は茶番と並ぶものは「作り替へ、又は、もちり」(die burleske Komik)である。茲でも先づ云ふべきことは、これも亦滑稽の對象の一定の種類、性質では無く、滑稽的效果を生ずる方法であるといふことである。歴史的に、又用語上の慣習に依て吾々は「擬形」(Parodie)及「變装」(Travestie)の滑稽を Burlesk と名づけることが出来る。

最後に同様の理由で吾々は「畸形化、誇張、醜化、怪奇等」を以て滑稽的效果を擧げる手段とする滑稽的表現を Grotesk と名づけ得る。

### チ 性格的滑稽と運命的滑稽(Charakter- und Schicksalskomik)

前のよりも重要な第二の區別がある。「悲壯」を論ずる際に吾々は主人公の受ける苦痛が辜無くして運命から來る場合と、主人公の性格に潜む惡に因て來る場合

とに従て運命的悲壯と性格的悲壯との區別を立てたが、今之を布衍することが出来る。凡ての「有るまじき事」(alles Nichtseinollende)は人又は物の本性に附着してゐるもの、即その性質又は天分であるか、或は人又は物が逢着する損害又は否定である。前者は性格の問題で後者は運命の問題である。

滑稽も亦一の「有るまじき事」である。一の否定である。吾々の眼中に於て無に歸するものである。そしてこの否定も人又は物の本性に内在することもあり、或はまた運命の力に依て人又は物に負はされることもありうる。この二の場合を悲壯の場合に準じて性格的滑稽及運命的滑稽と呼ぶのである。勿論この場合には特に「人間」に附いた、又は「人間」が出逢ふ滑稽を考へるのである。

## 二 ユーモア論

### イ 滑稽とユーモア(Komik und Humor)

吾々は茲に滑稽を美學との關係に於て取扱ふのであるが、然し滑稽それ自身は悲痛(das Leiden)それ自身のやうに審美上無價値である。前に述べたやうに滑稽は

否定である。吾々の眼中に消え失せるものである。従て滑稽に於ては何物も吾々に與へられない。却て或物が取り去られるのである。

之に對して或はかういふ人があるかも知れない。滑稽に於ても或物が與へられる、それは「可笑味」である、可笑味は一の快感である、そして美的價値あるものは愉快なものであると。然しどの快感も美的快感では無く、どの快感も美的價値ある快感では無い。

ところが滑稽的快感は二つの理由から非審美的快感に屬する。第一に、美なるものとか美的價値あるものとかいふ言葉の意味は眼前の對象が吾々に取つて價値を持つて居り、價値感情は對象の價値感情であり、對象自身の固有價値であるといふことである。

然るにこれは滑稽的快感には當筈らない。それは吾々が滑稽的だと云ふ對象そのものに附いた喜悅では無く、對象がその中へ引き入れられる心的作用に附いた喜悅である。それは對象が心的價値を持つが如くにして然かも之を持たない、或は持たないやうに見えるといふ、その事實に對する喜悅、或はより正しく云へば

可笑味である。吾々の把握作用のこの戯れに對する悦びである。

この點で滑稽的快感は知的快感と並立するものである。知的快感も亦對象に附いた快では無くして理解、認識の快である。但滑稽的快感の起源があるもの、消滅に在るのに反して是は建設に在るのである。

茲まで論じて來ると自ら第二の理由も明かになる。即滑稽的のものはそれ自身を取て見ると美的内容を缺いてゐる。人格的價值、吾々が同感し得る生活々動を缺いてゐるのである。

然しこの事は悲痛の場合と同様に滑稽が美的價值感情を得る手段となることを妨げない。そしてその理由は滑稽が悲痛と同様に「否定」であるといふ點に存する。人間の價值は否定せられることに依て一層深刻に重大に強烈に感受せられることを吾人は知つてゐる。

價值の主體が滑稽的に否定せられるときにもこの事は當筈である。そして悲痛に依る否定、即人間生活に對する悲痛的干渉が「悲壯」を生ずるやうに、滑稽に依る否定、即人間生活に對する滑稽的干渉は「ユーモア」を生ずるのである。滑稽はユーモア

となつて積極的價值の契機を攝取することに依て美的意義を獲得するのである。

#### ロ 素朴的滑稽とユーモア (Das naive Komische und der Humor)

滑稽からユーモアへの過渡は吾々が素朴的滑稽と呼ぶものに於て最も直接に行はれる、と云ふよりも寧ろ茲で既にその過渡が行はれてゐるのである。純粹な素朴的滑稽は可笑しいと同時に氣高いものである。小兒の素朴には小兒の天真が流露する。そこに崇高が在る。尤も吾々が自分の立場に復るときこの崇高は一時消滅するが、然し最早其處を動かさない。前に述べた錯愕が吾々の眼を引き戻す。素朴が吾々の常識的の立場に矛盾すればする程益々強く吾々の眼は小兒の天真の方へ牽かれる。その天真の中に又はその流露として、先きに素朴が全く別種の色即崇高の色で現はれたのである。滑稽的過程の内に絡み込んだ崇高が再現する。そして結局この方が確立することもあり得る。そして常識や因襲の立場から出る要求との衝突は崇高の下に従屬せしめられる。之に依て崇高は一層痛切に感ぜられるやうになる。

この従属作用は吾々が自分の常識的立場と小兒の天真とを比較して前者の價値が相對的で、後者に絶對的價値の在ることを意識するときに行はれる。これは恰も悲壯の場合に否定と矛盾とが却て吾々をその對象に近づけ、その價値を一層痛切に感じさせるのと同様である。唯、一方の否定は惡や悲痛に依る嚴肅なものであり、一方は滑稽的否定である點が悲痛と滑稽との相違になる。これでユーモアの意義が明かになつた。ユーモアとはある崇高なもの又は何等かの點で人間的に價値あるものが滑稽的に否定せられ、或は滑稽的過程の内に埋没し又は消滅するが否定それ自身又は否定の手段に依て却てその印象を高めることを意味する。印象を高めるといふ代りに、吾々の同感が一層深くなり、一層効果を生ずるとも云へる。

之に依て同時にユーモアに伴ふ感情の特質が定まる。これは一種の混合感情であつて、滑稽感の作用が崇高感の條件の下に従属せしめられるときに生ずる。それは滑稽に於ける、そして滑稽に依れる崇高感である。

### ハ ユーモアの三相(Dreifache Daseinsweise des Humors)

ユーモアの存在の有様(Daseinsweise)に三種ある。

第一に、世間や世人の活動及終には自分自身をさへユーモラスに、即ちユーモアを以て眺める場合。この時にはユーモアは吾々の心の中の状態であり、吾々の情調である。滑稽的のものは勿論客觀的に與へられてはゐるが、崇高は吾々の崇高である、即ち吾々が之を経験し又は發見して、その中に没入する滑稽のものに面する崇高である。このユーモアは美的ユーモアでは無い、即ち對象の美的觀察に於て見出すユーモアでは無い。

第二に、ある表現例へばある詩作などにユーモアを見出す場合、但ちユーモアは表現せられたもの自身には無く、表現の様式に在る場合。ユーモラスなるもの、表現では無く、ユーモラスな表現なのである。吾々はその表現の中に、表現せられた滑稽的對象を超越した崇高を見る。對象自身は崇高で無く、唯滑稽なのである。かういふユーモアは美的事實である。